
Blue bird

kko

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue bird

【Nコード】

N6761M

【作者名】

kk o

【あらすじ】

スーパーロボット大戦EXシユウの章をベースとした物語。捏造有。ネタバレも考慮しておりません。

プロローグ

怒号。閃光。爆音。
後に訪れる静寂。暗闇。
やがて上がる歓声。

ああ、ようやく。

彼はひとりごちた。

眼前には、先の戦鬪の勝利を讃え合う者達。
勝利の悦びをどこか遠くに聞きながら、彼は笑った。
彼の異変に、最初に気が付いたのは誰だったのだろうか？

ようやく見つけた。

歓声が静まる。

誰もが、彼を見つめていた。
先刻まで共に戦った者達。その瞳に宿り始めたのは、驚愕、恐怖、
そして敵意。

私の、敵。

「さあ、“終わり”を始めましょう。」

静かに呟いた彼の、内に渦巻く感情は歓喜。

待ち望んだ“終わり”。
願い続けた“破滅”。
心地の良い“恐怖”。

貴方もさぞかし満足でしょう？

闇に囁く。

返る答えは虚空の彼方へ、閃光と共に消えていった。

籠の鳥

My mother has killed me ,

My father is eating me ,

My brothers and sisters sit
under the table ,

Picking up me bones ,

And they bury them under the
cold marble stones .

Kewit , kewit ,

What a beautiful bird I am

!

杜松の木の上で小鳥が歌う。

それは断罪の歌。

それは賛美の歌。

あの鳥が、自分であつたなら良かったのに。

「シュウ！手前エー！！」

聞き慣れた声で我に返る。

相変わらず、品の無い声だとシュウは思った。

「マサキ・・・その言葉使い、何とかありませんか？下品ですよ。」

「うるせえ！」

乱暴な言葉と裏腹に、マサキの駆るサイバスターは優美さそのものだ。

「何でこんな事をする、何の得があるってんだ！？」

彼の言う“こんな事”が、地球を滅ぼすと言った事なのか、それともそれを止めてみると戦いを挑んだ事なのか、シュウは一瞬判断に迷った。

が、しかし、そんな事はどうでも良いと思い直す。どちらでも返答は一緒だ。

「損得などではありませんよ、マサキ。私はただ、自分の心の命じるままに行動しているに過ぎません。」

破滅を。恐怖を。破壊を。

闇が騒ぎ立てる。

ええ、そうですね。そうしましょう。

シュウは笑った。

ねえ、愁。生まれ変わったら何になりたい？

えっとね、鳥になりたい。

あら、どうして？

鳥になって、自由に空を飛ぶんだ。それで、意地悪な大臣とか威張り散らしてる学者達の悪口をたくさん歌ってやるんだ。

ふふ、それは楽しそうね。

勿論、母さんも一緒だよ。だって母さんは僕の母さんなんだから。

ええ、そうね。その通りだね。二人でうんと悪口を言ってやりましょう。

笑い合う母子。

それは遠い日の想い出。

叶わなかったささやかな幸せ。

籠の中の鳥は、自身の破滅を願い、歌う。

警報がけたたましく鳴り響く。

モニターもその大半が役割を果たさず、ノイズばかりを映し出していた。

「“終わり”……ですね。」

どこか満足気に、シュウは呟いた。

辛うじて生きている通信機能を開く。

「……見事です。このネオ・グランゾンをも倒すとは。」

突然通信を開かれたマサキは、どこか面を喰らったような顔をしていた。

「……これで、私に悔いはありません……戦えるだけ、戦いました。」

間抜けな顔だ。シュウはそう思った。

「……なんて顔をしているのですか、マサキ？ “予言”の“魔神”を倒したのです。もっと……誇らしげな顔をして下さい。」

「何でだ！ シュウ！！ 何でお前は……！！！！」

感情のままに叫び散らす彼の、頬を伝うのは涙だろうか。

ノイズだらけのモニターからは細かい表情までは読み取れそうもなかった。

「全てのモノはいつかは滅ぶのですよ、マサキ。それが、私の番であつた。それだけの・・・そう、ただそれだけの事です。」

この世に生を受けて21年。その間、あらゆるモノが彼を縛り続けた。

自由になりたい。

大空を見上げて、飛ぶ鳥を羨んだ。

それも、もう終わる。

計器が限界を訴えてショートし始める。機体が爆発するのも、時間の問題だろう。

「・・・これで、ようやく全ての鎖から・・・解き放たれる事が、でき・・・ま・・・した・・・」

瞳を閉じる。

破滅を。破滅を。破滅を。

彼を包みこんだ闇が、壊れたテープレコーダーの様に同一の単語を繰り返す。

ええ、最高の破滅をプレゼントしますよ。

堕ち行くネオ・グランゾンの中で、シュウは微笑んだ。

ようやく、自由に。

長年待ち望んだ瞬間だった。

追憶の風

フランスの哲学者ジャン・ポール・サルトルは言った。

“人間は自由という刑に処せられている”と。

宗教家達は声高に詠う。

神は人間を創り賜うた、と。

科学者達は一様に唱える。

人間最大の発明が神である、と。

神が人を創ったとするならば、人というモノの本質は神によって決定されている筈である。

サルトルはこれを“本質が存在に先立つ”と表現した。

彼は問う。

では、人が神を創ったのだとしたら、どうなるのかと。

本質を決定されないままに、ただ存在だけが孤立してしまっているのではないかと。

“存在が本質に先立って”しまっているのではないかと。

彼は主張した。

人間とは、彼が自ら創りあげるものにほかならない。

自分の本質を自ら創る為に、本質を思い描き実現に向けて行動する“自由”を持っているのだと。

ただ、その“自由”は自ら思い至った行動において、全ての責任の所在は自身に返る事を覚悟しなければいけないものでもある、と続ける。

そして締め括る。

自由であるとは 自由であるように 呪われている事である。

読んでいた本を閉じて、少年は立ち上がった。
時計を見る。

もうすぐ母親に会える時間だ。

本を元の棚に戻し、鏡の前で少し身嗜みを整えた。

扉をノックする音が、本棚で埋め尽くされた室内に響く。

迎えの女中だろう。

「どうぞ。」

少年の声に応える様に扉が開いた。

「クリストフ様、お時間で御座います。」

いつもの女中が恭しく頭を垂れる。

「ええ、早く行きましょう。」

逸る心を抑え、彼は落ち着き払った様子で歩き出す。

開け放っていた窓から風が一陣舞込んで、彼の黒髪をふわりと揺らした。

初夏といっても差し支えない季節。

だが、吹く風は穏やかで未だ春の気配を残していた。

母親に会ったら、さつき読んだ本の話しよう。

廊下を歩く少年の心は春風の様に躍っていた。

パンドラの匣

母の手に引かれて、暗闇を進む。

不安は無かった。

そこに母がいる。

それだけで少年の心は穏やかだった。

どこに向かっているのかすら、聞かなかった。

二人でお出かけしましょう。夜中にこっそり。

微笑む母に、少年は満面の笑みで応えた。

母親と二人きりの時間が持てる。

少年にとって、それは何ものにも代え難い程の誘惑だった。

やがて、暗闇の中にぼんやりと明かりが灯る。

ここが目的地なのか、母親は歩みを止めた。

木々の間に隠れるように、洞窟があつた。明かりはそこから漏れて
いる。

洞窟から見知らぬ男が現れた。

「ようこそ。お待ちしておりますぞ、ミサキ様。」

母の名を呼んで恭しく頭を垂れる男に、少年は一瞬恐怖を感じた。

母の手を強く握る。

母が優しく握り返す。

「さあ、行きましょう、愁。」

男に続いて洞窟の奥に進む母親。

母親に手を引かれ、進む少年。

そこから先の事は、よく覚えていない。

声が聞こえた。

ひどく聞き覚えのある声だ。

彼の内側ですつと騒ぎ立てていた声。

その声が、今は彼を包む闇となつて“そこ”に存在していた。

願イハ叶エテヤツタハズダ。

サア、破壊ヲ。

破滅ヲ。

恐怖ヲ。

我ニ捧ゲヨ。

全テノモノニ甘美ナル死ヲ！

闇が、彼に迫る。

彼を飲み込もうと、うねり、蠢く。

彼は抗う。

闇が内側にいた時から戦い続けてきた。

そして、彼は勝った筈だ。

勝ったからこそ、今ここにいる筈なのだ。

今更、負けてなどやるものか。

闇を見据える。

私は私だ。何人にも犯させはしない。

それは決意。

或いは信念と呼ぶもの。

永い間、彼と闇とは対峙していた。

もしかしたらそれは一瞬だったのかもしれない。

不意に、名前を呼ばれたような気がして、彼は振り返った。

闇の中に一筋、光が漏れ出していた。

愁。

光が、彼の名を呼ぶ。

光はゆっくりと人の形を取り始める。

愁。

手を差し伸べられた。

少し戸惑いながら、彼はその手を取る。

愁。

私の、可愛い、子供。

光が優しく微笑む。

さあ、目覚めなさい。

彼が闇の中で最後に見たのは、穏やかに微笑む黒髪の女性だった。

目覚め

薄暗い天井。

最初に目に入ったのはそれだった。

ぼんやりとした意識の中、寝台のような物に寝かされている事だけは何とか把握できた。

「お目覚めになりましたかな、シユウ様。」

寝台の横に男が佇んでいた。

「…ル…ルオゾール…？」

シユウは男の姿を認めると、確かめるように名前を呼んだ。

「左様、私めに御座います。無事のお目覚め、何よりで、シユウ様。」

男は満足そうに口元を歪めると、恭しく頭を垂れる。

「私は…私の、名は…愁…シユウ…シラカワ…。」

頭痛が酷い。

ようやく“思い出した”自分の名前を呟く。

「…そして、貴方が…ルオゾール…ゾラン…ロイエル…。」

ルオゾールが肯いた。

なおも痛み続ける頭を押さえながら、シユウは記憶の糸を手繰って行く。

「…しかし…ここは、何処です？…何故、私は…此処に…？」

手繰った糸は、しかし途切れとぎれで、彼に正確な情報をもたらしてはくれそうには無かった。

何とか起き上がろうと腕に力を入れてみるが、神経すらも彼意思を巧く伝えてくれない。

僅かに身じろいだシユウを見咎めて、ルオゾールが声を出す。

「おお、そのままそのまま、まだ体力が完全では御座いませぬ故、無理はなさいませぬ様。ここは、ラ・ギアスの我等が神の祭殿の中。ご心配には及びませぬ。」

「祭殿：ヴォルクルス…様の、祭殿ですか？」

破壊神サーヴァ「ヴォルクルス。辛うじて繋がっていた系の中に名前を見つけ出す。」

「左様で。」

「…少し、記憶が欠けている様です…。何か、何か重大な事があった気がするのですが…。」

瞳を伏せるシュウに、憐憫に似た表情を作ってみせるルオゾール。

「無理も御座いませぬ。貴方様は一度死んでおられるのですから。我が蘇生術と云えど、完全に元には戻せませぬ。」

言葉の端に、どこか咎める様な響きがあったのは気のせいだろうか。「時が経てば、自然に思い出される事も御座いましょう。今はごゆっくりお休み下さい。」

ルオゾールの口から低く呪文が紡がれる。

それは眠りの魔法。

ゆっくりと薄らいで行くシュウの意識。

意識が闇に落ちるまでの僅かな時間。

それでも、彼の頭の中では幾つもの疑問符が浮かんでは消えていった。

眠りに落ちる直前、シュウは誰かの声を聞いた。

優しいような女性の声。

聞こえてきたのは子守唄だろうか。

確かめる術もなく、シュウの意識は完全に闇に沈んでいった。

少年が、母の異変に気付いたのは春先の事。
母の目線が、少年に向けられる時間より、虚空を見つめる時間の方が長くなっていた。

それでも、少年が呼びかければ、母親は彼の許に戻って来てくれた。
「ごめんね、ぼーっとしちゃってたわ。」

少し困った様に笑いかけてくれる母は、少年からみても美しかった。
「お爺様とお婆様の事を考えていたの？」

少年の問いかけに、母親は答えない。

ただ、寂しそうな笑顔を向けてくるだけだ。

「母さん、お家に帰りたいの？」

少年は常々思っていた事を口に出した。

母が遠い目をして見つめる先。

動かない太陽の更の上。

母の、故郷。

「ねえ、愁。愁は、ここが好き？」

問いかけで返された問い。

しかし、それは母の明確な答えだと、少年は理解していた。

悲劇が母子を襲ったのは、それから少し先の事だった。

悪夢

それは夏も近づいたある日の事だった。

少年はいつもの様に女中に連れられ、母親の部屋へと向かっていた。女中が部屋の扉を数回叩く。

いつもならすぐに返ってくる筈の音が、その日はなかなか聞こえてこなかった。

「ミサキ様？」

女中が怪訝そうに呼びかけながら、もう一度扉を叩いた。

「ミサキ様、クリストフ様をお連れしました。」

ノックの音だけが廊下に響き渡る。

「ミサキ様、いらっしゃらないのですか？」

恐るおそる、女中は扉を押した。

特に抵抗もなく扉が開く。

部屋の主は窓辺の椅子に腰掛け、外の景色を眺めていた。

母親の姿を認めて少年は駆け出す。

「母さん！」

呼びかける声は喜びに満ちていた。

少年の声を聞いて、ようやく気付いた様に部屋の主はゆっくり振り向く。

「母さん、何を見ていたの？」

母親の手を取り、少年は問いかけた。

彼女はきょとんとした顔で少年を見つめる。

「…母さん？」

何も答えない母に異変を感じる少年。

「母さん、どうしたの？」

必死に呼びかける少年に、彼女はようやく言葉を返した。

ゆっくりと、しかし、はつきりと。

「…あなた…誰なの？」

悪い夢に急き立てられて、シユウは目を覚ました。
汗を拭い、荒くなつた息を何とか整えようと奮闘する。

「…また…ですか…」

誰にともなくシユウが呟いた。

ルオゾールの手により常世から現世に引きずり戻され数日経つ。
その数日、シユウは毎晩の様に悪夢に魘されていた。

おそらくは毎回同じ夢。

しかし、どんな夢だったかを思い出そうとする度に、拒絶するよう
に頭痛が襲ってくるのだった。

不完全な蘇生術の後遺症なのだろうか。

未だ儘ならない身体を、無理矢理動かし起き上がる。

汗で髪が肌に纏わりつくのが鬱陶しかった。

シャワーを浴びたい。

そう思った。

頭の片隅にある夢の残照ごと、全て洗い流してしまいたかった。

闇と欠片と少年と

ばらばらと捲っていた本を閉じ、シュウは立ち上がる。

何不自由なく生活できるようになったのはつい最近の事。

結局、シュウが完全に体力を取り戻す為に要した時間は一月近かった。

相変わらず、記憶は穴だらけのままだったが。

それにしても、この論文は面白くない。

先刻まで読んでいた本を本棚に戻しながら、シュウはそう思った。

著者欄に刻まれている名前は、白河 愁。

よくこんな論文で博士号が取れたものだ、と半ば感心した。

その論文は哲学についてだったが、どうにも主張が幼すぎる。

書かれた日付を見れば、まだ自分が17歳だった時の物だった。

自分の書いた文章も第三者視点で読めるのは、記憶喪失者の特権に入るのだろうか。

同じ様に、今の彼から見れば、拙い文章で綴られた論文が十数冊。

つまり、同じ数の博士号を取得している、という事らしい。

どれも彼が20歳になる前の日付だった。

少しでも記憶が戻る助けになれば、と紐解いてはみたものの、どれも数頁読んだだけで本棚の中に戻ってしまった。

解った事といえば、自分が地上に出たのが17歳の時だったらしい、という事。

そして、17歳から19歳になるまでの2年間何かに取り憑かれたかのように、博士号をはじめとし様々な資格を取り続けていた、という事だった。

…取り憑かれた？

思考の整理をしながら、シユウはその単語に妙な引っかかりを感じた。

そう云えば、自分は何故、地上に出たのだろう。

素朴な疑問で終わる筈だった。

机に戻り、パソコンを立ち上げる。

ネットワークに繋ぎ、目当ての情報を探し出す。

セキュリティを掻い潜り、侵入した先はラングラン王国外務局のメインコンピュータ。

「記憶は失っても、こんな操作は覚えているものですね……。」

“トップシークレット”と書かれたファイルを見つけ出し、管理の甘さのため息を吐きながら、シユウは呟いた。
ファイルを開く。

ちょっとした知的好奇心を満たすだけの行為。

その筈だった。

千々に散った記憶はまるでパズルのピース。

其処此处に散らばって、見つけ出されるその日を待っている。

穴だらけの記憶は、ピースの抜け落ちたジグソーパズル。

ただそこに在りながら、ピースが埋まるその日に焦がれている。

ぱちり。

軽い音を立てて、ピースの1つが空いた記憶の穴に填まり込む。

シュウは、ただ黙ってパソコンのモニターを眺めていた。

少年の父親が死んだのは、少年が15歳になって間もなくだった。葬儀の場に、正妻である筈の母の姿は無かった。父の死を、少年は冷めた目で見つめていた。側妻と数人の妾が父親の亡骸を囲んで泣いている。

白々しい。

少年はそう思った。

踵を返し、少年は葬儀場を後にした。

自室に戻り、喪服を脱ぎ捨てる。

少年は、そっと自分の左胸に触れた。

それは丁度心臓の真上。

痛々しく残るのは、深々と抉られた傷跡。

服を着替えて、自室を出る。

サア、ソロソロ始メヨウ。

闇が、少年を蝕み始めていた。

チカ

ある朝、気が付いたら“ソレ”はそこにいた。

「ご主人様ー！おっはようございまーす！！」

凄まじいテンションで挨拶をしてきたソレは小鳥。

青を基調とした外見は可愛らしいの一言に尽きるのだが・・・。

「いやー、今日もいい天気でございますよー！清々しい朝って感じですね！！やっぱり天気が良いと気分も良いってモンですよ！ねえ！！」

兎に角喧しい。

シユウはその小鳥に一瞥しただけで、読んでいた本に視線を戻してしまった。

「あれー！？ご主人様、ノーコメント＆ノーリアクションですか！！？折角の感動の再会じゃあないですかー！アタシも久々にご主人様に会えるってんで念入りに毛繕いしてきたんですよ！ほら、見て下さいよ、この見事な毛艶！そんじょそこの鳥には出せない艶ですよ！！」

シユウの周りをパタパタと飛び回りながら、小鳥はなおもマシニングントーク。

シユウは諦めた様に本を閉じ、サイドテーブルに止まった小鳥に視線を向けた。

「・・・どちら様ですか？」

声は不機嫌そのものだった。

あまり感情を表に出すタイプではないシユウだが、流石に朝っぱらから甲高い声で騒がれては不機嫌にならざるを得ない。

しかも、相手は超絶ハイテンション。

「ご主人様！アタシの事まで忘れちゃったんですか！？そりゃああんまりじゃないですか！！」

今度は怒り始めた小鳥。

「タダでさえ、ご主人様が地上に出た時に置いてけぼり喰らったってーのに!!」

小さな身体の小さな羽根をバタつかせ、必死のアピール。

「ほら、アタクシでございますよ、ご主人様！使い魔の鑑！ファミリアの中のファミリア！チカちゃんでございますよ!!」

小鳥の名前を聞いて、ようやくシュウが反応を示した。

「チカ・・・ああ、貴女でしたか。」

記憶の、小さなちいさなピースが埋まる。

「ご主人様、反応薄っ!!」

「・・・貴女の反応がオーバー過ぎるだけでしょう。」

「そんな事ないですよー！今頃読者の皆様はチカちゃんの登場にスタンディングオベーションせんばかりの喜びですよ、きっと!!」

「・・・読者？」

（あ、こら。それ言っちゃダメでしょう。）

「あ、何でもないです、ハイ。」

「?・・・そうですか。」

（ギリギリセーフ。）

（チカちゃん、あまり余計な事を言わない様に。）

「はい。」

（・・・こほん。）

チカは気を取り直して飛び上がると、ちよこんとシュウの肩に止まった。

「いやー、やつぱりご主人様の肩が一番落ち着きますねー。」

ふーやれやれ、とでも言わんばかりにチカが息を降ろす。かと思えば。

「あー！忘れる所でした!!」

突如として大声を上げた。

「一体何ですか、いきなり・・・。」

耳元で叫ばれたシュウは、やや顔を顰める。

それでチ力が言った事といえば、

「この間お貸しした1000クレジット、返して貰って良いですか？」

だった。

「・・・チカ、余りふざけないで下さいね。」

チカに返されたのはお金ではなく、シュウの静かなしずかな低い声。その声に何か恐ろしいモノを感じとって、チカは思わず身を硬くした。

「しっつれいしましたー。」

ただでさえ小さいチカが、更に少し小さくなる。と、大人しくなったのもつかの間。

「あー！！忘れてた！！！！」

先刻よりも大きな声で叫ぶチカ。

勿論、シュウの耳元で。

「・・・チカ・・・。」

叫ばれた方は堪った物ではないようで、彼女の主人の声は静かに怒りを湛えていた。

「あ、いや、ほんとに、ほんとに重要な事だったんですって。本気と書いてマジと読む程！」

必死に言い繕うチカ。

静かに睨み付けるシュウ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

しばしの沈黙。

「・・・で、今度は何ですか？」

諦めた様に溜息を吐いて、シュウが沈黙を破った。

「えーと、その・・・ですね・・・。」

ちらちらと、主人の顔色を窺いながらチカが喋る。

「・・・ルオゾール様が、お呼びでした。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・。。。」

「またもや沈黙。」

「・・・チ力。」

「は、はいいい！」

急に名前を呼ばれて慌てて返事をする。

「・・・そういう事は、早く言っ下さい。」

今までの無駄な遣り取りを思い出して、シュウは盛大に溜息を吐いたのだった。

始動

「おお、これはこれはシユウ様、お待ちしておりましたぞ。」

チ力を伴って祭殿を訪ったシユウを、ルオゾールは恭しく出迎えた。
「随分と、遅くなってしまった様で。」

ちらり、とチ力を見遣るシユウ。

口笛を吹いて誤魔化すチ力。

それで大体の事情を察したのか、ルオゾールは特に突っ込む事もなく続けた。

「何、御気になさいますな。その後の御加減は如何ですか？」

「ええ、悪くありませんね。衰えていた体力も、ようやく元に戻ったようです。」

「それは何よりで御座いますな。」

不気味に口元を歪めるルオゾール。

「では、シユウ様。そろそろ“例の計画”を実行に移す時かと……」

「例の……計画？」

さも当然の様に囁くルオゾールだが、シユウの記憶はその言葉と過去とを未だ繋いでくれている。

「済みませんが、その計画について少し説明して頂けますか？どうも記憶が完全ではないようです。」

「おお、これは気が付きませんで、失礼を致しました。」

簡単な謝罪の言葉の後に、ルオゾールは計画について、滔々と語りだす。

ここ、ラ・ギアスにはヴォルクルスを封じた神殿が五箇所ある事。

その封印を解除し、ヴォルクルスの分身を復活させ、ラ・ギアス全土を混乱に陥れる事。

そして、最終的には、ヴォルクルス神を現世に蘇らせる計画だ、と。
「なるほど、ヴォルクルス様が遂に復活なされるのですか……全

くもって、楽しみな事です……。」

くすくすと妖艶に微笑みながら、シュウは呟いた。

「私はソラティス神殿に赴き、計画の障害になりかねない大神官イブンを始末して参ります。」

五箇所ある封印の一つ、ライオット。

丁度、封印の真上にソラティス神殿は建てられている。

四大精霊を祀った神殿と、ラ・ギアス屈指の大神官。

なるほど、計画には障害としかなり得ない組み合わせだった。

「シュウ様はモニカ王女の入手をお願い致します。ヴォルクルス様復活の儀には王族の生贄が必要不可欠ですので……」

「モニカ……?」

王女と言うからには面識が有るのだろうが、生憎と今は忘却の彼方に埋もれてしまっているらしい。

「詳しい事はチカにお聞き下さい。貴方様の記憶の欠けた部分を補ってくれる事でしょう。」

話題にされて、得意気にチカがその小さな胸を張った。

「はいはい、チカちゃんにお任せ下さいまし! じゃんじゃんぱりお役に立ちますよー!!」

シュウの肩の上で、一生懸命自己主張。

「とりあえず、王都までの案内料は500クレジットでいかがでしょう?」

お約束。

「チカ! いい加減にせんか!」

ルオゾールに怒鳴られて、チカはこそこそとシュウの後ろに隠れた。

「ちえ、みんなノリが悪いな!。ちよつとボケただけじゃないですか……。まあ、この面子にノリを求めるだけ無駄なんですかね!。」

シュウとルオゾールを交互に見て、チカは溜息を吐く。

「そいじゃ、ご主人様、参りましょうか。」

ぱたぱたとシュウの肩から飛び立つチカ。

「ああ、チ力。」

呼び止められる。

「はいな。何ですか、ご主人様？」

振り向いたチ力に、シュウが真顔で告げた。

「お金は払いませんよ。」

「今頃!？」

のってくるの遅くね!？

と、心の中で突っ込みながら、チ力は、さも愉快そうに笑う主人を見つめるのだった。

武装機甲士

何が起きたのか、理解するのに少しかかった。
男に案内され、洞窟を母と共に進み、そして・・・
そして。

意識が一度、途切れた。

目覚めた時には、神殿の様な所にいた。
祭壇のような場所に寝かされて。

傍らに母が居た。

男は、少し離れた所から、こちらを見て、晒っていた。

「・・・か、か・・・あ、さ・・・ん・・・？」

巧く喋れない。

身体は、何かに縛られた様に動く事を頑なに拒む。
母さん。

もう一度、少年は必死に呼びかける。

母が、ゆっくり振り向いた。

これまで、少年が見たことも無いような、笑顔で。
その手に、握られていたのは・・・。
握られて、いたのは。

目の前の女は、それ以外の表情を忘れてしまった様に、ただ、笑っていた。

少年の声は・・・届かない。

「ごつしゅじんさまー、着いて来てますかー？」

「ええ、問題有りませんよ、チ力。」

一時間近く、それも木々が生い茂る森の中を歩き続けてきたにもかかわらず、シュウは息一つ乱さず答えた。

「相変わらず、ご主人様は色々と人間離れしてらっしゃいますねー。」

「・・・褒め言葉として、受け取っておきましょうか。」

「やややややや、嫌だなあ、ご主人様、褒めたに決まってるじゃないですかー！」

溜息混じりのシュウの言葉に、ようやく失言に気付いたチ力が慌てて言い繕う。

「あ、ご主人様、見えてきた、見えてきましたよー！」

話題を逸らす様に、チ力は必死に見えてきた壁をアピールした。

「ここ、ですか。」

「はいな！えーと、スイッチは何処だったかなー。」

ここでもない、ここでもない、と飛び回るチ力を傍目に、シュウは迷わず壁の出っ張りを一つ押した。

ガコン。と硬い音がして、壁に一つ扉の様な物が現れる。

「あれー、もう見つけちゃったんですか！？流石ですねーご主人様！」

「一つだけ、不自然な出っ張り方をしていましたからね。」

シュウは事も無げに言うが、一般人が見たら何処が不自然なのか、理解できないだろう。

やっぱ、色々人間離れしてるなー、この人は。

そう思いながら、チ力は、さっさと扉の中に入ってしまった主人を

追うのだった。

中は、簡単な格納庫になっていた。

最奥に、濃紺の巨兵が聳え立っている。

シュウは、ほう、と声を出した。

「グランゾン・・・ですね。」

「何だ、ご主人様ってば、ちゃんと覚えてるじゃないですか！そうです、何を隠そう、こちらがご主人様の愛機、その名も武装機甲士グランゾンですよー！」

お前が作ったんじゃないだろう、と突っ込みたくなる程自慢そうにチカがグランゾンの紹介をする。

「ところで、チカ・・・その“武装機甲士”というのは何ですか？」

「え、グランゾンにも“魔装機神”とか“妖装機”、“咒霊機”みたいな呼び名が欲しいじゃないですか！それで、アタクシが考えました！どうです、格好良いじゃないですかー！武装機甲士！うーん良い響き！貴公子と機甲士を掛けてる辺りにセンスが窺えませんか？ねえねえ、どうですご主人様！？」

シュウ、ノーコメント&ノーリアクション。

「さて、モニカ王女の居場所に向かいますようか。」

「・・・はい。」

チカはちよっぴりいじけていた。まあ、そんな事を気にするシュウではないが。

「で、そのモニカ王女は今、何処にいますか？」

「えーとですねー、モニカ王女は・・・現在シュテドニアスに占領されてる、王都ラングランにいらっしゃるみたいですねー。まずは王都に忍び込まなきゃですね、こりゃ。」

さっきまでのいじけた表情はどこへやら、活きいきと喋り始める。

「そう言えば、知ってました？モニカ王女ってば、どうにもご主人様に気があるみたいなんですよねー。あのお姫様ってほら、昔から

メンクイでしたからねー。」

「お喋りはそこまでにしましょう。乗り込みますよ。」

「はいはい！いやーご主人様とグランゾンに乗れる日が来るなんて！アタクシ感激でございますよ！！」

ゆつくりと、グランゾンに歩み寄るシュウ。

そっと、機体に触れて、呟いた。

「・・・貴方も、死に損なったのですね・・・。」
ならば。

シュウは少し笑った。

「・・・もう少し、お付き合い頂きますよ。今度こそ、本懷を遂げる為に。」

武装機甲士は、ただ静かに佇んで、しかし、確かに主人の帰りを待っていた。

コクピットが、音を立てて開く。主人を、シュウを迎え入れる為に。

ラ・ギアスに、蒼い魔神が蘇ろうとしていた。

闇色の魔神

シュウがコクピットのシートに座ると、待ち侘びていたかのようにグランゾンに灯が燈った。

各計器が正常を示す数字を次々に映し出す。

チカはグランゾンの計器を忙しく確認しながら、精霊リーダーとナビゲートの設定を始めた。

シュウの指は滑らかにコンソール上を踊り、全ての機能が正常である事を確かめる。

「グランゾン、異常なしで御座いますよ、ご主人様！」

「ええ、それではモニカ王女をお迎えに上がりましょう。」

コントロールクリスタルに意思を込める。

ゆっくりと、濃紺の巨兵が動き始めた。

「えーと、今いるのがドレント州だから・・・カラタミーティ州を抜けて・・・」

チカが一生懸命ルートを確認している。

「チカ、その作業は一旦中断して下さい。何か近づいて来ますよ。」

「えっ！？ホントですか！？すみません！！気付きませんでした、敵ですか！？」

リーダー映った反応数はおよそ10機。

「ええ、敵意を剥き出しにしていますよ。尤も、私達に殆ど味方など居ない筈ですから、近づく者は全て敵・・・なのですね。」

冷やかに、しかし、少し楽しそうに、シュウは笑っていた。

ザレスⅡクワイヤーは焦っていた。

簡単な偵察任務だった筈だ。

突如現れた反応は、しかし、たった一機。

この所、地上の兵器とそのパイロットが大量に召喚される事件が相次いでおり、今回もそれ絡みだと思っていた。

念の為、と隊を率いてやって来たのは幸か不幸か。

既に眼前に迫ったその兵器。

ザレスには見覚えがあった。

「・・・グランゾン・・・。」

紡がれた名に纏わり付くのは、恐怖。

冷たいものが背筋を滑り落ちていく感触があった。

「ク、クワイヤー大佐！・・・い、如何致しましょう！？」

部下達が、明らかにうろたえているのが分かる。

“大佐”。その肩書きに恥じぬだけの武勲をあげてきた。ザレスは額の汗を拭くと、冷静を装って部下に命じた。

「構わん。敵は一機だ、破壊せよ。」

指揮官の動揺は、部下の士気に関わる。

背教者クリストフ。その名はシュテドニアスでも広く知られていた。特に、恐怖の対象として。

だからこそ、ザレスは冷静を装わなければいけなかった。

それに、とザレスは思う。

あの悪魔を、これ以上野放しにしておくのは危険だ、と。

祖国を守る為、軍に入った。

ならば。

闇色を纏った悪魔を見据える。

ならば、ここで戦わずして、何処で戦おうというのか。

一呼吸置いて、ザレスは隊を展開させた。

「あつれー、シュテドニアスの偵察部隊ですね、ありゃあ。」

チ力は、グランゾンのデータベースから該当機体を探しながら、小

馬鹿にしたように笑う。

「こつち見てビビってますよ、ご主人様！」

隊の展開の遅さを見れば、その恐怖の大きさを窺い知る事が出来た。
「えーと、指揮官機が・・・ゴリアテで、レンファが四機。あとは無人偵察機って感じですかねー。うっわ、グラフ・ドローンとかまだ使ってるんだ。ダサいなー。」

「ふむ、リハビリには丁度良いかもしれませんね。お相手して差し上げましょう。」

久方振りの戦場の空気。

死と隣り合わせの緊迫感。

生の、実感。

軽い興奮を覚えながら、シュウはゆっくりとグランゾンを前進させた。

紅蓮のサファイネ

もし、この光景を他に見ている者が居たならば、きっとこう言ったであろう。

地獄の様だ、と。

其処此処に散らばるのは、無残な姿の元兵器達。

グラフ・ドローン郡は、何か圧倒的な力で押し潰された様に、大地にその亡骸を埋めていた。

レンファ二機は、手足を切断され、芋虫のような姿で無様にその身を横たえている。

「フフフ、この程度ですか？」

物足りない。

嘲笑う様なシュウの言葉は、暗にそう伝えていた。

「この程度でこのグランゾンに向かってくるからですよ。ざまーみやがれってんです！」

チカが自慢そうに胸を張る。

・・・お前は何かしてないだろうが。

「チカ、ブラックホールクラスター発射準備を。」

「あら、ご主人様ってば、雑魚相手にサービスし過ぎじゃないですか？」

言いながらも、チカは器用に羽根を使い、コンソールを操作し始める。

「このグランゾンに向かってきた勇氣だけは、賞賛して差し上げようと思ひましてね。」

くすくすと、晒う。

その妖艶な横顔は、悪魔と言うより堕天使と言った方が相応しい様に思えた。

「はいな、ご主人様。お待たせしました！ブラックホールクラスター、いつでも発射OKですよー！一発バーンとぶちかましちゃって下さいー！」

「・・・チ力、下品な物言いは控えて下さい。」

溜息混じりに使い魔を窘めながら、それでもレンファ一機をサイトに入れ、トリガーに指を掛けるシュウ。

「ブラックホールクラスター・・・発射。」

静かに呟かれた言葉は、まるで死刑宣告。胸部の装甲が音を立てて開いた。

封印を解かれた心臓部に、闇が収束する。

それは、光すら脱出を許されない、闇。

レンファのパイロットが、最期に見たのは何だったのだろうか。

闇に喰い尽くされ、存在の一欠片すら現世に残す事なく、彼の全ては喪われた。因果地平の彼方へと。

その光景を呆然と見つめていたザレスは呟いた。

「・・・バケモノ・・・か・・・？」

言葉の端々に滲むのは絶望。

話には聞いていた。その狂気の力。

それが目の前に居る。

ここまで圧倒的なのか。

ザレスは齒噛みした。

絶望が、ゆっくりとザレスに、その血色の眼を向ける。

嫌な汗で湿った掌に、それでも意思を込めた。

ここで退く訳には。

それはシュテドニアス軍大佐としての意地なのか、ザレス「クワイヤー」としての意地なのか。

ゴリアテはその意思に応え、蒼色のバケモノに対峙する。

「ありやま、まだやる気なんですかねーあの人。」

呆れた様に呟くチカに、何を思うのかシュウは告げた。

「チカ、指揮官機に通信を繋いで下さい。」

「はいはい、通信ですね・・・って、え、通信ですか、ご主人様！？」

「聞こえませんでしたか？」

「い、いえ、通信ですね。繋がります。・・・でも、何ですか？」

「フッフ、勇敢な指揮官殿と、少しばかりお話をしたくなりましてね。」

「はあ・・・。」

主人の意図を測りかねるチカ。

それでも、命令通りにゴリアテに通信を繋ぐ。

「ご主人様、繋がりました。」

「ご苦労様です、チカ。・・・初めまして、指揮官殿。私は、シュウシラカワと申します。其方のお名前をお聞かせ頂けますか？」

突如入った通信に、ザレスは戸惑った。

悪魔にしては、穏やかすぎる声に。

そして、相手が名乗った名前にも。

「・・・シュウシラカワ・・・だと・・・クリストフではないのか？」

暫しの沈黙の後、返ってきた答え。

シュウは少し笑った。

「・・・クリストフ・・・。懐かしい、名前ですね。もう、その名前の男は死にましたよ。」

「・・・ご主人様？」

チカが訝しげに、主人の言葉を聞いていた。

シュウは構わず続ける。

「それで、貴方のお名前は？」

「・・・ザレス。ザレスクワイヤー。シュテドニアス、陸軍大佐だ。」

「ザレスクワイヤー大佐ですね。・・・覚えておきましょう。」

「・・・クリストフ・・・いや、シュウ」シラカワ、何が目的だ。」
「目的・・・ですか。そうですね、我が本懐を遂げる事・・・とでも申し上げておきましょうか。」

「・・・本懐・・・？」

「さて、それでは出会ったばかりで恐縮ですが・・・。」
そう言うと、シュウはコンソールパネルに指を走らせた。

「お別れの時間です。」

グランゾンが、右手を掲げる。

空間が、ぐらりと歪んだ。

歪みの中から、一振りの巨大な剣が現れる。

身の丈程もある大剣を、軽々と片手で引き抜くグランゾン。

「チカ、ワームホールを開いて下さい。」

「いえっさー！」

「それでは、参ります。」

グランゾンが、大剣グランワームソードを構える。

応える様に、ゴリアテも臨戦態勢を整えた。

それを見届けて、シュウはグランゾンを加速させる。

「ワームホール、てんかーい！」

チカが、その羽根を広げて叫ぶ。

シュウが、笑った。

「逃げても無駄ですよ。」

瞬間、グランゾンの姿が掻き消えた。

「何！？」

慌てて精霊レーダーの索敵範囲を広げるザレス。

しかし、反応は何処にも無い。

何処だ。

振り向いた瞬間だった。

血色の、瞳が見えた。

次に見えたのは、闇の色。

さらに、次いで衝撃。

最後に見えたのは、ノイズだらけのモニターだった。

「……ク、クワイヤー大佐！」

最後に残ったレンファのパイロットが悲痛な声を上げる。

「……おや、まだ残っていらっしやいましたか。」

ずしゃり、と大地を踏んで、グランゾンがレンファに向き直る。

「……っひ！」

パイロットが恐怖に負け、戦線を離脱する。

「あー、逃げた！」

チカが、馬鹿にしたような声を上げるが、シュウは取り合わない。

「構いませんよ。好きにさせましょう。」

「えー、逃がしちゃうんですかー？ 資金と経験値がもったいないな
ー……。」

また、言っちゃいけない事を……。

「……資金は解りますが……経験値は何ですか？」

「あ、いや、何でもないですよ。何でも。ええ。」

慌てるチ力に、シュウはそれ以上突っ込みはしなかった。

レンファが、レーダーの範囲から外れようとした瞬間だった。
ズドン。

空気を震わせ、最後のレンファが大空に散った。

「おや？」

「ありや、落ちちゃいましたね。どうしたんだろう？ エンジントラブルってー訳でもなさそうですねし……。」

疑問符を浮かべる二人の前に、鮮血の色を纏った魔装機が、ゆっくりと降り立った。

「あー！ あれは……もしかして……。」

チ力の顔が青褪める。

追い討ちをかけるように、通信が入った。

「チ力、繋いで下さい。」

「は、はい……。」

渋々、という言葉が似合う返事をしながら、チ力は通信を繋げる。

モニターに映ったのは、魔装機に負けない程、鮮やかな赤に彩られた美女だった。

「うふふ、ダメねえ、敵に背中を見せるなんて……あら。」

通信が繋がったのを確認して、美女は妖艶に微笑んだ。

「シュウ様、ご無事の帰還、おめでとう御座いますわ。お待ちしておりますのよ。」

鮮血よりもなお赤い髪をかき上げて、うつとりと言葉を紡ぐ。

チ力はシュウの陰に隠れるようにひっそりとモニターを見つめていた。

「……失礼ですが、どちら様でしょうか？ 少々記憶が欠けておりまして……。」

「あら、そうですね？……そう言えば、ルオゾールがそんな事を言ってたかしら……。」

赤い髪の女性は、少し思案顔をして、思いついた様に手を叩いた。

そうして、モニターに視線を移すと、恍惚とした表情でとんでも無い事を言い始める。

「・・・それにしても、あんまりですわ、シユウ様・・・二人で過ごした、あの甘い夜の事も・・・忘れてしまいましたの・・・？」
身体をくねらせ、色気たつぷりに囁く美女。

堪えかねてか、チ力がシユウの陰から飛び出して抗議した。

「いい加減な事言わないで下さい、サファイーネ様！」

「あら、居たのチ力。」

子供の嘘がばれた時の様に、女性は小さく舌を出した。

「でも、アナタに他人の事言えて？・・・どうせ、貸してもいないお金、請求したんでしょ？」

その通り。

「・・・。。。」

どっちもどちだとも言いたそうに、シユウは小さく溜息を吐いた。

「改めて自己紹介させて頂きますわ。私、サファイーネと申します。」
言って、ウインク一つ。

「・・・サファイーネ・・・紅蓮のサファイーネ・・・ですか？」

「思い出して頂けましたの！？」

「・・・いえ、思い出せたのは、その通り名だけです。」

「まあ・・・でも、気にしませんわ。思い出なんて、これから作って行けば良いんですもの！」

「なーに言ってたんだか・・・。」

小さくちいさく突っ込むチ力。

幸い、サファイーネには気付かれなかったようだ。

「シユウ様、今王都は警備が厳しゅうございますわ。私が居れば、多少お力になれるかと。」

「えー！？」

チ力が、なんとも言えない声を上げる。

「・・・サファイーネ様・・・一緒に、いらっしゃるんですか・・・」

？」

恐るおそる、訊ねるチ力に、さも当然だと言いたげにサフィーネは応えた。

「当たり前じゃないの。．．．それとも、チ力、私について来て欲しくないとても？」

「いいいいいい、いやいや、そそそんな事ないですよーうれしーなー．．．。」

「そういうわけですね、シュウ様。よろしくお願い致します。」
再びウインク。

「やだなー、この人、怖いんだもん．．．。」

チ力の小さな溜息を他所に、闇色と血色の機兵は並んで歩み出したのだった。

力

「おーっほっほっほー！ほーら、仔猫ちゃん、靴をお舐め！！」

嬌声と共に振り下ろされた一撃が、レンファの胴体を両断する。

「うふふ、アナタを天国に連れて行ってア・ゲ・ル。」

続けて撃ち出されたレーザーが遠方にいた改良型グラフ・ドローンを撃墜した。

「・・・なんて言うか・・・相変わらずだなあ、サフィーネ様・・・」

鮮紅の魔装機、正しくは妖装機、ウィーゾルの暴れっぷりをグランゾンのコクピットから眺めていたチカは、若干呆れ気味に呟いた。

「・・・余所見をしている暇はありませんよ、チカ。ワームスマッシャー発射準備を。」

「あ、スミマセン！ワームスマッシャーですね！！」

ゴリアテからの攻撃を、歪曲フィールドで弾きながらシュウはチカに指示を出す。

コンソールを操作するチカを横目で確認しながら、グランワームソードを振るう。

グランゾンの攻撃をかわす為に、一旦機体を引くゴリアテ。

狙ったようなタイミングでチカが声を上げた。

「発射準備オーケーです！」

「・・・ワームスマッシャー・・・発射。」

回避行動が終わったばかりのゴリアテに、グランゾンの心臓部から発生した歪が迫る。

なす術無く歪に飲み込まれたゴリアテは、次元と共に引き裂かれた。

「はー、王都に着くまで、あーゆうのがいっぱい出てくるんですよねー。うっとーしーったらないですよ。ホントに！」

何度目かのシュテドニアス軍の襲撃を退け、チカは溜息を吐いた。

「仕方ありませんよ、チカ。それに、私にとつては良いリハビリになるので・・・そう悲観した物でもありません。」

「いやー、でも・・・あたしゃ、こうやってご主人様が生き返ってくれて本当に嬉しいですよ。ご主人様が亡くなつたつて聞いた時は心臓が止まりましたよ！いえいえ、例えじゃなくて本当に、です！ご主人様が死んじゃうと、その無意識であるアタクシも消えちゃいますからねー。」

精霊リーダーを確認しながら、チカは滔々と喋り続ける。

喋るか寝てるか食べてるか。チカの行動は主にその三つに限られるような気がする。本当にシュウのファミリアなのか、疑問の声が上がったのは一度や二度ではない。

「もうすぐラングラン領内ですわね。・・・シュテドニアスの連中、まだきつと襲つてきますわよ。」

「・・・チカ、リーダーに異常はありませんか？」

「はいはい、えーと・・・はいな、リーダー、異常ありません！」

リーダーに何の反応も無い事を確かめると、チカはその羽根で敬礼のようなポーズをとつて見せた。

「・・・そうですか。」

「どうしましたの、シュウ様？」

「・・・いえ、何か気配を感じるのですが・・・気の所為、という訳では無さそうですね。チカ、サフィーネ戦闘準備を。」

「え？え？・・・あ、ホントだ！ご主人様、敵です！所属はシュテドニアス軍！数は十四機！！」

リーダーに現れた反応をチカが報告する。

「・・・チカ、アナタ、リーダー手の意味無いじゃない・・・。」

「違います！ご主人様の魔力が凄過ぎるんです！！ホント、亡くなる前より強くなってるんじゃないですか！？」

サフィーネの厭味に、必死に自分の無力さを自身でフォローするチカ。ただ、シュウの魔力が並々ならぬのもまた、事実だった。

「シュウさま、お下がり下さい。この程度、私一人でも充分ですわ。」
「ずい、と前へ出るウィーゾルに、しかしシュウは首を横に振った。
「いえ、私も戦いますよ、サフィーネ。まだまだリハビリ不足ですのでね。」

ゆつくりと戦闘態勢を整えたグランゾン、その血の眼を瞬かせた。

「ふむ、レンファにグラフ・ドローンIIレイ、ナグロット・・・そして・・・あは・・・パーソナルトルーパー？いえ、アーマードモジュールでしょうか・・・？しかし、何故ここに・・・？」
敵データを参照していたシュウが、驚きの声を上げた。

「あ、説明してませんでしたっけ。ここ最近なんですけどね、誰かが強力な召喚魔法を使ったらしくって、地上の兵器が次々にラ・ギアスにやってきてるんですよ！」

「お陰で、シュテドニアスの連中や、ラングランのカークス軍なんかが強化されちゃって・・・やり辛いつたらないんですよ、最近。」

「言葉とは裏腹に、少し楽しそうな口調なサフィーネ。
戦うのが楽しい。そんな感じだ。」

「いや、自分の力を試せるのが、と言った方が良いのかも知れない。」

「地上の・・・ではブルー・スウェアの皆さんもいらっしやっているかも知れないですね・・・フフフ、楽しみですね・・・。」

「あれ、ご主人様、記憶戻ったんですか？」

シュウの呟きを、耳聴く聞きつけてチカが問う。

「・・・私は今・・・ブルー・スウェア、と言いましたか・・・そう、ですね。何となく思い出しました。ある時は敵、またある時は味方・・・だった気がします。・・・ただ、誰が居たかまでは思い出せませんね・・・。」

「知っている筈の事が、思い出せない苛立ち。そんな物を、少なから

ずシュウは感じていた。

「シュウ様、大丈夫ですわよ。そういう事は、時間が経てば自然に思い出せますわ。焦らないで下さいまし。」

サフィーネが、シュウを慮ってかそつと囁いた。

「まあまあ、なんにせよ、あんな連中、ザコですよザコ！ぶわーつとやっちやいましょう！ぶわーつと！！」

暗い雰囲気嫌ってか、チ力が一際明るい声を出す。

シュウは、そんなサフィーネとチ力の気持ち察したのか、少し笑った。

「ええ、そうですね。ぶわーつと、とは言いませんが・・・やっつてしましましょう。」

フレッド「ショーカーは、大尉昇進後初の出陣に逸っていた。

小隊を任されての初任務。その隊には地上の兵器も含まれており、偵察とはいえ重要性の高さを窺わせた。

フレッドの腕には真新しい階級証が輝いている。

この任務で成果を挙げれば、この階級証の星がまた増える事もあるだろう。

指示された偵察地点に着いたフレッドは、見た事が無い兵器二機が並んでいるのを確認した。

「・・・何だ、アレは？」

「・・・さあ・・・。」

「カークス軍の新型魔装機か？データを照合してみろ。」

部下に、機体の確認作業をさせる。

「・・・データ照合。・・・該当機体、有りません。」

「・・・地上の兵器か？・・・まあいい。相手は高が二体だ。無傷で手に入れる！」

新しい地上の兵器だとすれば、無傷で手に入れば相当な手柄になる筈だ。

階級証の星を一気に増やす事も、夢では無い。

「・・・了解致しました。」

余り乗り気でなさそうな部下の言葉など、彼には聞こえていなかった。

もつともつと、権力を。

力を。

フレッド「ショーカーの心は、権力への、力への執着に囚われ始めていた。」

妄執

左胸に感じるのは、痛みではなく熱。

熱い。

ただ、そう感じた。

熱い。あつい。アツイ。

見開かれた瞳に映るのは、艶やかな黒髪。

これは・・・誰だ。

左胸から、熱が流れ出す。

それは、生命。

ゆっくりと、命が、流れて行く。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

否定した。全てを、否定した。

この身体の、なんと無力な事か。

力が欲しい。

全てを否定しきるだけの、力が。

ここから逃げ出す為の、力が。

誰でも良い。

誰か。

それは、生命の悲鳴。

闇が、目を覚ました。

ゆつくりと、差し出される手。

闇の手招き。

闇の囁き。

チカラヲ、ヤロウ。

全テヲ否定スル、チカラヲ。

闇が笑う。

サア、選べ。

闇に吞まれ、死ぬか。

闇に包まれ、生きるか。

差し出された手に縋った少年を、一体誰が責められるというのか。

彼はただ、生きたかっただけなのだから。

「シュウ様、どうされましたの？」

怪訝そうなサフィーネの言葉で、シュウは我に返った。

「やっぱり、お疲れなのではありませんか？ここは任せて頂いても・

・・。」

「・・・いいえ、大丈夫ですよサフィーネ。心配には及びません。」
軽い頭痛。

一瞬目を伏せたシュウの脳裏に、様々な画像が飛び交った。

先刻まで見ていた記憶のピース。

しかし、それらは完成図の見えないただの欠片。

記憶のパズルは遅々として進まない。

「お、ご主人様、敵さん攻めてきましたよ！戦闘開始ってヤツですねー！くうー！チカちゃんまたまた活躍しちゃいますよー！」

チカが、グランゾンの中で忙しく飛び回る。

「各計器、異常無し！歪曲フィールド、展開準備おつけー！ブラックホールエンジン、対消滅エンジン共に異常なっし！ご主人様、いつでもいけますよー！」

いつもはその騒がしさに苦言の一つも呈するシュウだが、今は何故か、チカの騒がしさが有難かった。

「・・・それにしても・・・。」

サフィーネが目の前敵を見据えながら呟く。

「私達の事、知らないのかしら？あの程度の戦力で、真正面から挑んで来るなんて・・・命知らずも良い所ですわね。」

彼女の言葉に含まれている呆れの色。

隊の展開の仕方から見ても、あまり場数を踏んでいないのだろう。出会ってしまった事。ただそれだけが、彼等の不幸だった。

フレッドは代々軍人の家系に産まれた。

曾祖父と祖父が將軍だったらしい。

父は婿養子だった。その父は、戦場で死んだ。

殉職で二階級特進。准佐の階級証が虚しく、もう袖を通す者の無い軍服に、輝いていた。

ショーカー家の面汚しが。

葬儀の場で、祖父が呟いた言葉を、フレッドは忘れられなかった。

その後、無言の圧力の中、彼は育てられた。

階級証の星を、一つでも多く。

理由など、当時の少年に分かる筈もなかった。

偉くなりなさい。

母親の言葉で、覚えているのはそれくらいだった。

少年に植え付けられた歪んだ思想は、やがて成長と共に権力への執着へと変わり始める。

執着は、妄執へと。

青年になった彼は、軍に入った。

順調に出世して、次第に権力が自分の物になって行く。

肩書きが持つ力を、軍で目の当たりにした時、青年の中の何かが壊れた。

権力を。権力を。力を。力を。チカラを。

壊れたそれは、或いはブレーキと呼ばれる物。

坂道を転がり落ちる石の様に、彼は突き進む。

例え、その先に待っているのが破滅だとしても。

彼には、もう止める術など無いのだから。

隊が壊滅しかけても、彼は止まれなかった。

「た、大尉！戦力が違いすぎます・・・撤退しましょう！！」

部下の一人が、悲痛な声を上げる。

フレッドには、そんな言葉は届いていない。

ただ、目の前にある二つの力に、魅入られていた。

「・・・何だ、あの力は・・・まるで噂に聞く、魔装機神の様だ・・・」

フレッドは呟いた。

魔装機神。

ラングランが産み出した、四つの強大な力。

それに勝るとも劣らぬ力が、目の前に、在る。

「大尉！大尉！・・・これ以上は無茶です、撤退しましょう！！」

部下が、再び悲痛な声を上げる。

「うるさい！司令官は私だ！！・・・あの力・・・手に入れてみたい・・・」

「そんな！！無茶です、大尉！！」

「煩い、五月蠅い！さっさと行け！！これ以上言つのであれば、敵前逃亡とみなし、軍法会議にかける！！！」

それは、死ね、と言う命令。

その言葉を、部下達はどんな想いで聞いたのだろうか。

フレッドは、壊れた。人間として。

もう、そこに居るのはフレッド。ショーカーでは無く、ただ力に取
り憑かれた亡霊だった。

「・・・愚かですね。いつの世も、人と云う者は・・・。」

不意に、主人が呟いた言葉はどこか寂しそうだった。

「どうしたんですか、ご主人様？」

「・・・いいえ、なんでもありません。」

モニターの端では、ウィーゾルが一機、また一機と敵兵を屠って行くのが見えた。

十四あった敵影は、もう片手で数える程しか残っていない。

「・・・サフィーネ、少し下がちなさい。」

「はい、シユウ様。あれをなさるのですね。」

命令の意図を察し、ウィーゾルを後退させるサフィーネ。

「チカ、グラビトロンカノン発射準備を。」

「いえっさー！」

絶え間なく降り注ぐ砲撃を、歪曲フィールドで防ぎながら、グラン
ゾンは徐々に前進して行く。

「グラビトロンカノン、チャージ完了！ぶわーっとぶちかまして下
さいご主人様！！」

「チカ、下品な物言いは控えなさいと言ったでしょう。」

敵陣のど真ん中で、グランゾンは立ち止まった。

なおも降り注ぐ砲撃を物ともせず、シユウは静かにトリガーを引い
た。

「グラビトロンカノン・・・発射。」

闇が、広がる。

それは、質量が持つ暴力。

亡霊達への、せめてもの鎮魂歌。

歌い手は、重力。

潰れて行く機体の中で、フレッドは恐怖していた。

眼前に在るのは、力ではなく、死。

「な・・・何だ、まるで歯が立たないというのか!？」

コンロールクリスタルに意思を込める。

死にたくない。

ただ、その想いだけを、込める。

「動け・・・この、動けえ!!」

重力は、なおも彼等を押し潰そうと、暴れる。

機体は、ぴくりとも動かない。

「・・・グランゾンに向かって来た。その勇氣だけは、賞賛して差上げましょう。・・・ただ、力を求める行為は・・・時として酷く危険な行為なのですよ・・・。」

「グ・・・グランゾン・・・?」

聞き覚えのある名前に、フレッドの血の気が引いた。

「で、では、貴様は・・・背教者クリストフ!!」

やっと、自分の過ちに気付いたフレッド。

しかし、遅すぎた。全てが。

「・・・せめて、貴方々の魂が、安らかで在ります様に。」

冷たく囁かれた死の宣告。

重力が、彼等の悲鳴すら喰らい尽くし、闇に帰る。

墓標代わりとなった拉げた機体の群れを、シュウは見つめる。

「ご主人様?」

チ力が、主人の異変を感じて問いかけた。

「・・・力を求めるのは、罪なのでしょうか?」

「・・・ご主人様・・・。」

シユウにしては、珍しい疑問。

でも、きつと答えは彼の中で出ているのだろう。

証拠に、彼の無意識ははつきりとした声で答えた。

「力を求める事自体は、きつと本能的なモノなんですよ。動物、植物でさえ、上を上を目指しますから。だから、罪じゃありません。

きつと。罪になるのだとしたら、それを求める動機なんじゃないでしょうか。うーん、ゴメンナサイ言い出してはみたものの、難しいですねー。あははははー、これじゃご主人様のファミリア失格かなー？」

最後は明るく笑って見せる。

シユウもつられて少し笑った。

「・・・そう、ですね。フッフ、チカ、貴女は私のファミリアですよ。」

「ふふ、チカが真面目な事言うなんて、珍しいわねえ。明日は雪かしら？」

サフィーネも、笑う。

混沌の信徒達が、穏やかに笑い合う。

見る者から見れば、何とも、不思議な光景。

だが、知らぬ者から見れば、ごく自然な光景。

そんな光景の中で、シユウは小さくちいさく呟いた。

「・・・十を数えたばかりの少年が、生きる為に力を求めた事は、罪なのでしょうか・・・。」

自身すら、その言葉を発した事に気付いてはいなかった。

亡霊と凶鳥

最初はまたブラックホールエンジンの暴走かと思った。

激しい振動からきた眩暈を、リンは軽く頭を振って追い払う。新型ヒュッケバインの起動テストの最中に、それは起こった。

バニシングトルーパーと不名誉な渾名を戴いたこの凶鳥も、改良を重ねるうちに、主は選ぶものの、なんとか戦場に出せるだけの安定性を備えてきた。

そして、最終起動テストの為、リン自ら乗り込んだ。

それから・・・。

リンは、溜息を吐いてヒュッケバインの計器に異常がないか確かめる。

モニターの電源を入れて、リンは我が目を疑った。

「・・・なん・・・だ、これは・・・？」

月のマオ社に居たはずだ。

しかし、モニターに映し出された風景は、緑が広がる大地。

それだけならば、沈着冷静なリンの事、それほど驚かなかったかもしれない。

「・・・地平線が・・・無い・・・？」

彼女を驚かせたのは、その大地の形状。

本来、地平線と呼ばれるべき場所は天上に向かって湾曲し、しかし丁度目線の高さで霞がかって空へと溶け込んでいる。

「・・・ヒュッケバイン自体には、異常なし・・・か。」

さて、どうしたものか。

思案する彼女の耳に、聞き慣れた声の通信が飛び込んできた。

「あつれー、そこに居るの、もしかしてリンちゃん！？」

世界で唯一、自分を“ちゃん付け”で呼ぶ人物。

「・・・腐れ縁も、ここまで来るとはな・・・。」

呆れたように呟いて、リンはその人物、イルムガルト「カザハラ」の

姿を探した。

「リンちゃん、こつちこつち。」

呼ばれて振り返ると、見慣れた機体が目に入ってくる。

亡霊の名を冠した、漆黒の機体。

「・・・なんでゲシュペンストなんだ、イルム？」

「いや、グルンガストは親父が改造するつつてステラ研に持つてかれちまつてさ。しかたなく、これ乗ってたら、気が付いたらこの世界さ。」

「・・・ふむ・・・。」

リンは、もう一度周囲を見渡す。

「イルム、ここは何処だと思う？」

真剣なリンの言葉に、イルムはいつも通り、少しおどけた口調で応える。

「さて・・・ね。少なくとも、月でも地球でも無いって事くらいしか分かん無エな。ま、俺はリンちゃんと一緒に居れば、何処でも天国だけだね。」

「・・・その言葉を、何人の女に言ったかは知らんが・・・ふざけている場合では無さそうだ。」

本気なんだけどな。そう思いながらも、リンの言葉から芳しくない状況を察知して、イルムも身構えた。

「・・・敵か？」

「・・・分からん、所属不明。データ該当機体無し。機影多数。・・・
・ 囲まれたな。」

「さて、どーしたモンでしょうね・・・。」

流石のイルムも、溜息を吐いた。それでも、口調は明るい。リンと二人だからだろう。

「ま、ちよつとやそつとの相手に、俺ら無敵コンビが負ける筈ないけどね。」

「コンビを組んだ覚えは無い。」

「リンちゃん、相変わらず冷たいなー。・・・ま、そこが可愛いん

だけど。」

「馬鹿言っでないで、さつさと戦闘体制を整えろ。」

言葉では冷たくあしらいながらも、リンは自分の中の不安が薄れていくのを感じていた。

・・・腐れ縁、か。

それもいいかも知れない。

リンは少し笑った。女性らしさに満ちた、美しい笑顔だった。

こうして、亡霊と凶鳥は導かれ、精霊の大地へと降り立った。

地球の内部に存在する世界、ラ・ギアス。

彼等がそれを知るのもう少し後の事だった。

又エット海

「ごっしゅじんさまー、王都まで色んなコースありますけど・・・どうやって向かいます？」

ナビゲーターのチェックをしていたチカが口を開く。

「このまま、又エット海を突っ切るのが一番の近道ですわね。」

後方から追走してくるウィーゾルから通信が入る。

「では、又エット海を横断して王都へ向かいましょう。」

「了解です！」

羽根で敬礼紛いのポーズを取り、チカはナビゲーターをいじり始めた。

「そういえば、このコースって、カークス將軍の又エット海横断作戦と同じコースですね。」

ナビゲートされたコースを見て、チカが呟いた。

「カークス・・・ああ、ラングランのバルチザンを指揮している人物ですね。」

カークスⅡザンⅡヴァルハレピア。

名前だけは、シュウのデータベースに存在している。

しかし、顔がどうにも浮かんで来ない。

「うーん、シュウ様、それは少し古い情報ですわね。今では立派な正規軍になってますわよ。」

「私は、そのカークスとは・・・会った事があるのでしょうか？」

「ええと・・・いえ、一度も無い筈ですよ。」

チカは、シュウがラングランにいる間は常に一緒に居た。

そのチカが言うのだから、会った事は無いのだろう。

「大体、あのカークス將軍って、戦争が始まるまでは・・・」

チカの長い話が今まさに始まるうとした瞬間。

ドオォーン！！

突然の爆発音。

軽い振動。

「きゃっ!!」

サフィーネが小さな悲鳴を上げる。

「なななな、なんだなんだ!？」

チカはグランゾンの中で右往左往。

シュウは冷静に、周囲の状況を探っていた。

「対空ミサイル・・・気配が無い所を見ると、ブービートラップですね。先刻言っていたカークスが仕掛けていった物でしょう。被害はどうです？」

チカが手早くコンソールを叩く。

「えっと、大した事ありません。良かったー。」

殆ど被害が無いのを確認して、チカは安堵の息を吐いた。

「・・・チカ、安心するのは早いですよ。トラップの中に信号弾が混じっていた気がします。」

カークスが残したブービートラップならば、何の為に設置したのか。答えは簡単だ。

後方からの奇襲を避ける為。或いは挟撃になるのを避ける為。

ならば、対空ミサイルと合わせて信号弾が入っているのは当たり前前の事。

「・・・どうやら、シュテドニアスの偵察部隊に見つかったようですね。」

レーダーが反応を示す前に、呟くシュウ。

サフィーネは、ウィーゾルのレーダー索敵範囲を広げる。

レーダーの端に、シュテドニアス軍の反応を見つけてサフィーネは溜息を吐いた。

「あらあら、全く、うっとーしい連中ですわね。」
それでも、彼女はすぐに笑う。

反応数が少なすぎる。

レーダーが捉えた数を、サフィーネは哀れそうに見つめたのだった。

ヌエツト海の海上で謎の信号をキャッチして、ディック「シャイエールは隊を向けた。

ラングランのカークス将軍が、シュテドニアスに攻め込んで来たコース。

信号が発信された位置を確認して、ディックは思い出した。

この戦争が始まってから、突如として頭角を現した男。カークス「ザン「ヴァルハレビア。

今のシュテドニアスにとって、一番の敵と言っても良い。

しかし、その男が仕掛けたであろう信号弾に、自身の軍がかかる筈は無いだろう。

では、一体何が。

その答えを、彼はすぐ知る事になる。

「シャ・・・シャイエール中尉!!」

斥候に出ていた兵士が、血相を変えて戻って来た。

「どうした、何があった?」

「グ・・・グランゾンです!!」

部下が告げた名前に、ディックは驚きを隠せなかった。

「何っ!? グランゾンだ!?!」

自身から、血の気が引いて行くのを感じる。

ディックは一度だけ、グランゾンと合間見えた事がある。

二年程前の事だろうか。

自分はまだ指揮する側ではなく、される側だった。

当時のシュテドニアスは、まだ魔装機を開発し始めたばかりで、機体のスペックは左程高くは無かった。

それでも、今率いている隊の何倍もの戦力を持って、挑んだ。
結果隊は全滅。

既に損傷が激しく、行動不可能な機体にまで振るわれる、理不尽なまでの力。

その時に味わった恐怖は、戦場、と言う程生易しい物では無かった。地獄。

そう呼べば、相応しいだろうか。

結局、その戦闘で生還したのは彼一人だけだった。

「最寄の基地に、急いで増援を要請しろ！グランゾン相手にこの戦力では……。」

ディックは声を張り上げる。

果たして、増援が来るまで隊が持つだろうか。

当時に比べて、魔装機のスペックは飛躍的に上昇した。

地上の兵器も、ある。

それでも、あの強大な力に対抗するには数が足りない。

地獄から生還して二年、自分自身の能力も上がった。

上がったからこそ解る、戦力の違い。

慎重に、彼は隊を展開させた。

部下を無駄死にさせない様に。

それでも、戦わずに逃げる事が叶わないのは、軍人の性なのだろうか。

せめて、この美しい海が、死の海に化けませんように。

美しい海上に浮かぶ、二機の不気味な影を見て、ディックはそう祈らずにいらなかった。

思惑

急に、外が慌しくなったのをイルムは感じた。

エマージェンシーコールだろうか。

あの後、シュテドニアスなる国の軍に囲まれ、半ば脅される様に連行された。

そして、簡単に事情を説明されて、協力を要請された。

喰ってかかるリンを宥め、考える時間をくれ、とだけ軍のお偉いさんに告げ、至現在。

「おやおや、何かあつたのかね？」

相変わらず、能天気そうな声を上げる相手を、リンは軽蔑を持って見つめた。

宛がわれた部屋の、一番死角が少ない場所に彼女は陣取っている。

正反対とでも言うように、ベッドに大の字で寝転がるイルム。

「・・・貴様は気楽そうで良いな、イルムガルト」カザハラ。」

「いやーん、リンちゃんこわーい。」

リンが自分をフルネームで呼ぶ時は、大抵機嫌が悪い時だ。

それでも、イルムはおどけて見せる。

彼女が不安がつているのが、解るから。

クール・アズ・キュークを地で行くような彼女だが、時折ガラスの様な脆さを見せる。

その脆さが、愛しい。

言えば全力で否定するだろうが。

本人は必死で隠しているのだろう。弱い自分を。

だから、イルムもそれを無理に暴こうとはしない。

ただ支えてやるだけだ。自分のやり方で。

ずるいのは判っている。

それでも、イルムは自分を偽る。リンと同じ様に。

打算と計算で生きてきた冷徹な自分を、隠す。

それはまるで道化師。

それでも良い。彼女が、リンが、笑ってくれるなら。

お気に入りの曲を口笛で吹きながら、イルムは考えていた。

機体を取り返して、尚且つ馬鹿馬鹿しい戦争に加担しなくて済む方法。

何より、地上に戻る方法。

思考を巡らすイルムの耳に、切羽詰まった足音が聞こえてきた。チャンスかもな。

イルムは不敵に口元を歪めた。

「ありやりや、敵さん、増援呼んだみたいですよご主人様。」
通信を傍受したチカが、面倒臭そうに言い放つ。

「・・・余計な戦闘をする羽目になってしまいましたね。」

呟くシュウの脳裏に、一つの考えが横切る。

あれは、ラングランの信号弾だった筈だ。

ならばシュテドニアスが察知して、当のラングランが察知しない訳が無い。

考えを裏付ける様に、シュテドニアスとは別方向から魔力の揺らぎを感じた。

数は多く無なさそうだが、面倒が増えるのは確かだ。

「おそらく、ラングランからも来ますよ。」

「どっから何が来ようが、シュウ様は私がお守りいたしますわ!」

一人、張り切るのはサファイーネばかりであった。

てつきり、シュテドニアス軍がトラップに引っかかった物とばかり思っていた。

少数の部隊で来たのは間違이었다かも知れない。

「・・・まさか・・・グランゾンだと・・・?」

ラテルⅡザンⅡアクロスは苦々しく呟いた。

グランゾンと対峙する形で、シュテドニアス軍もいる。

「アクロス少佐、我々はどちらを相手にすれば!？」

困惑しているのは部下達も同様。

「・・・仕方あるまい・・・危険だが、双方を相手にする! クリストフは危険過ぎる・・・それに紅蓮のサファイーネも一緒とあつては・・・」

苦虫を噛み潰した様な顔で、ラテルは命令を下した。

「・・・今、余りラングランと事を構えたくは無いのですが。」

やれやれ、とでも言いたそうにシュウは溜息を吐いた。

「え、何ですか、ご主人様？」

「そうですね、あの程度の戦力、やってしまえば良いんですわ。」

「チカ、サファイーネ、気持ちは分かりますが・・・混乱、と言うのは戦力の均衡が取れてこそ、長続きするものです。今はシュテドニアスに天秤が傾いている状態ですから・・・。」

「じゃあ、説得して、隊を退いてもらったらどうですか？」

チカの言葉に、シュウは軽く苦笑した。

「そう、ですね。上手くいけば良いのですが・・・。」

「では、私はシュテドニアス軍をしばし足止めしますわ。その間に、シュウ様はラングランの指揮官にコンタクトを取って下さいませ。」
言うが早いか、サファイーネはシュテドニアス軍の真っ只中に単身突っ込んで行く。

元来、好戦的な性格なのだ。

「おーっほっほっほ! 紅蓮のサファイーネ、参りますわよ!」

真紅の機体が、群青の海に美しく舞った。

突然の通信に、ラテルは少々面食らったようだった。

「ラングラン、カークス軍、ラテルⅡザンⅡアクロス少佐とお見受けします。」

穏やかな声で語りかけてくるこの青年は、本当にあのクリストフなのか。

「・・・如何にも。貴様はクリストフⅡゼオⅡヴォルクルスだな・・・？」

愚問だ、とラテルは感じた。

それでも、問わずにはいられなかった。余りにも、イメージが重ならない。

魔神、と呼ばれたあの男と。

「・・・クリストフ・・・ですか。」

懐かしむような、グランゾンのパイロットの声。

「残念ながら、私はクリストフではありませんよ。 シュウ。 シュウⅡシラカワと申します。」

「シュウ・・・シラカワ・・・？」

シラカワと言う名前に、覚えがある気がした。

ただ、地上人の魔装機操者の中にはそんな名前は無かった筈だ。

何処で。

思考は、シュウと名乗る青年の声で遮られた。

「失礼ですが、隊を退いて頂けますか？今はラングランと事を構えるつもりはありません。」

やはり穏やかな声。

記憶にあるクリストフとは・・・。

重ならない。そう思って、ラテルは気付いた。

重なるクリストフを、知っている、と。

それは、十年以上前。

彼がまだ、クリストフⅡマクスードであった頃。

「クリストフ・・・殿下・・・？」

ラテルは思わず呟く。

「・・・さあ、何方の事でしょう？」

モニターの向こうで青年は、少し笑っているようだった。

「ともかく、今は無益な争いをするつもりはありません。隊を退いて頂けますね、アクロス少佐？」

穏やかだが、底に得体の知れない物を潜ませた声。

「・・・分かった・・・。今回は、隊を退こう。」

「感謝しますよ、ラテル。」

モニター越しに微笑む青年。

やはり、彼はクリストフⅡゼオⅡヴォルクルスでは無く、クリストフⅡグランⅡマクソードであるように思えた。

「・・・クリストフ殿下、貴方は・・・。」

去り際、ラテルは青年に呼びかけた。

青年は、ただ黙って、少し寂しそうに、笑っただけだった。

邂逅

「さて、説得は上手くいきましたね。」

ラングラン軍が隊を退いたのを見届けて、シユウは呟いた。

「なーんか、ああ言う神妙な空気、苦手なんだよなー。」

やっと喋れる、とばかりにチカがぶはーっと息を吐いた。

「貴女が喋るとややこしくなる一方ですので、私はその方が有難いですね。」

「ご主人様・・・ヒドイ・・・。」

「さあ、サファイーネの援護に向かいましょう。そろそろシユテドニアスの援軍が来ないとも限りません。」

「・・・はぁーい。」

拗ねるチカを完璧に無視して、シユウはグランゾンのバーニアペダルを踏み込んだ。

「・・・おい、イルム・・・どう言つつもりだ？」

傍受されないように、接触通信でリンはイルムに呼びかけた。

「ん？何が、リンちゃん？」

あくまでお気楽な口調のイルムに、リンは溜息を吐く。

「・・・何のつもりがあつて、こんな奴等に手を貸す!？」

「まーまー、リンちゃん、落ち着けて。」

露骨な舌打ちが聞こえて、イルムはちよつと苦笑した。

「・・・グランゾンが、出てきたらしい。」

「なん・・・だと・・・?」

「あの状況で、アイツが生きてたとは思いついが・・・グランゾンを操縦できるのはアイツしかない。それに・・・。」

「・・・それに?」

「ゲシユペンストとヒュツケバイン、取り返せたる?」

してやったり感の漂うイルムの言葉に、今度はリンが苦笑する番だった。

「フン、そういう事か。」

「ああ、そーゆう事だ。あわよくば、このままトンズラこくぜ。」

「全く・・・お前らしい。」

「それ、褒め言葉って事で良い？」

「勝手に解釈しろ。」

「了解！」

「これ以上は、怪しまれる心配がある。離れるぞ。」

「ほいよ、んじゃまた。」

亡霊と凶鳥が距離を取る。

向かうべき戦場は目の前だった。

ディックの駆る魔装機ギルドーラに通信が入る。

「シャイエール中尉、無事か！？こちらはゴドル＝ノーランドだ。」

「これは、ノーランド少佐！」

ディックの声が喜色ばんだ。

「少佐に来て頂けるとは・・・おお、それに新しい地上の兵器ですね、それは。」

ディックがヒュッケバインとゲシュペンストを見て感嘆の声を上げる。

「うむ、この度、協力して貰う事になった地上人の方だ。グランゾンの事を話すと急に乗り気になられてな。・・・何か、因縁があなたの様だ。」

ゴドルは通信チャネルの関係でか、やけに謙った言葉遣いでリンとイルムの事を紹介し始める。

そんな会話を他所に、リンはグランゾンの姿を見据えていた。

「・・・イルム、見えたか？」

「ああ、バッチリ。間違い無く、グランゾンだな、ありや。」

「どう思う？」

「あの状況で、生き伸びた可能性は低いと思うんだけどね。実際、目の前に居られちゃうと、なんともコメントし難いな。」

「ともかく、本当にシユウ〃シラカワなのか、確認するのが先だな。」

「だな。んじやま、久々ですが、俺ら“ラブラブ無敵コンビ”の実力、お見せしますか。」

「後ろから撃落とされたくなければ、今すぐコンビ名を変更するんだな。」

「いやーん、リンちゃんつてば、相変わらず照れ屋さんなんだからー。」

「ほざけ！」

二人は同時に又エットの海を駆けた。

「あの地上人達は、アテになるのですか？」

二機がある程度遠ざかってから、ディックはゴドルのギルドーラに接触通信を入れた。

「・・・分らん。が、今はあの力に頼る他あるまい。」

吐き捨てるように言い放ったゴドルの言葉は、何処か忌々しげな空気を纏っている。

昔程ではないが、ラ・ギアスの人間は地上人を軽蔑している節がある。

科学技術に傾倒し過ぎて、精神的に未熟なまま強大な力を振るう野蛮人。

そんな認識が未だに大半を占める。

数年前にラングラン王国が、魔装機計画の一環として地上人の召喚を公に始めてからは多少その認識も薄らいだが、それ以前は酷いものだった。

時折、何かの事故に巻き込まれた地上人がラ・ギアスに偶然迷い込

んでしまう事もあった。

彼等に待っていたのは、差別。

そんな環境からか、地上人とラ・ギアス人のハーフというのは中々誕生しなかったが、極稀に存在する例もあった。

魔力と精神力が高いラ・ギアス人、プラーナと力が強い地上人。そのハーフである子供は、全てにおいて極めて高い能力を誇る。

ラ・ギアスの王族の血筋を受ければ、なおの事。

ただ、産まれた子供が受ける差別は、両親の比ではなかったそうだが……。

「ふえーくしよい！」

「……チカ、風邪ですか？」

「ファミリアでも、風邪つて引くんですかねえ……。」

「さて、前例が無いので分かりませんね。それより……あのパーソナルトルーパー、見覚えがある気がします。」

シユウがゲシユペンストとヒュツケバインを指して呟く。

「あらま、地上でのお知り合いですか？仲間になってももらえませんかねえ？」

「どうでしょう……お話してみない事には、なんとも言いかねますね。」

そう言いながら、グランゾンは二機との距離を詰める。

「サファイーネ、そちらは大丈夫ですか？」

「ええ、シユウ様！ご心配には及びませんわ。こちらは私にお任せ下さいませ。」

サファイーネの言う通り、他の魔装機はウィーゾル一機でも充分そうだった。

「……では、お言葉に甘えて……そちらはお任せします。」

「リンちゃん、ちよいと下がっててもらえるかい？」

「どうするつもりだ、イルム……。」

「なーに、ちよいとあちらさんとコンタクト取るだけさ！」

言うが早いか、イルムはゲシュペンストを加速させた。

「よう、グランゾンさん！中にいるのはシュウ＝シラカワ博士かい？」

威嚇射撃をしながら、イルムはグランゾンに通信を入れる。

「・・・おや・・・私をご存知なのですね。」

返って来た静かな声は、紛れも無く、シュウ＝シラカワの物だった。

「イルムガルト＝カザハラ。階級は中尉。アンタの死に際も看取った筈だけだな！」

ガチャリ、とグランゾンの頭部に銃口を向ける。

返答までに、少し間があった。

「・・・ああ、カザハラ中尉でしたか。お久しぶりですね。」

「ああ、久しぶりだ。まさか生きてたとはな。・・・んで、こんな所で何してんだ？」

「それは、こちらの台詞ですね。地上人の貴方が、こんな所で何をしているのです？」

「どっかの誰かに勝手に呼び出されたらしくてね。お陰でしかない傭兵生活になりそうだよ、全く。」

「おやおや、それは災難でしたね・・・。」

通信機を通してだが、彼の声は微かに笑っている様に聞こえた。

「・・・もし、よろしければ、地上に帰して差し上げましょうか？」
余りにも唐突な提案に、イルムは一瞬耳を疑った。

「はい？」

「地上に帰して差し上げても良い、と言っているのですよ。イルムガルト＝カザハラ中尉。」

「・・・どうも、話が旨すぎるな。」

イルムの声が鋭くなる。

「信用して頂けないのですか？」

「旨い話にや裏があるってのは、昔からのお決まり事だからね。」

「・・・では、こうしましょう。貴方々の力を、しばらくお借りし

ます。その見返りとして、事が済んだら地上に帰して差し上げる。これで如何です？」

「なるほどね……。んで、アンタは俺達の力を借りて何しようってんだい？」

「そうですね……。完全なる自由を得る……。とても申しておきましようか。」

「イマイチ、ピンとこねえな……。リンちゃん、どうする？」

後方で待機しているリンに意見を求める。

「……。信用しかねるな。」

「おや、確かそちらはリン＝マ才社長ですか。お久しぶりですね。」

「ああ、よもやまた会う事になるうとはな。」

リンの言葉は警戒心に満ちていた。敵として対峙していた時間が長いのだろうか。そんな事をシユウは考えていた。

「……。ではお二人にお約束しましょう。貴方々の不利になるような事は、一切強制いたしません。いつでも、断って頂いて結構です。……私は約束を破った事はありませんよ。」

「フン……。確かに、な。」

「それに、カザハラ中尉、貴方は最初から、この下らない侵略戦争に加担する気など無かったのでしょうか？」

「あややま、ご明察。」

「……。良いだろう。イルム、シユウに協力しよう。」

「オーケー。リンちゃんとならば何処へでも！」

イルムはリンに向かってウインクして見せた。

勿論、スルーされたが。

「って、事でゴドルさん悪いね。俺等、アンタ達の敵になるわ！脅されて戦うのは、性に合わなくてね！！」

言って、グランゾンの頭部に向けていた銃口を先刻まで味方だった者達に向ける。

ディックは苛立たしげに叫んだ。

「やはり、地上人などアテになりません！」

「・・・そのようだな・・・。」
　　眩くゴドルの言葉は、何とも苦々しかった。

帰

「さて、シュウ」シラカワ。今は貴様と行動を共にするつもりだが・
・もし、以前の様な事があれば、その時は・・・。」

リンの棘を含む言葉に、しかし、シュウは首を傾げてみせる。

「以前の？」

「あの時の事だよ、シラカワ博士。アンタが死んだ筈の時の事さ。」

「ああ、済みません。言い忘れていましたが、私は蘇った際に記憶の大部分を失っておりまして。」

「ほう・・・？」 イルムがぴくりと片方の眉毛を吊り上げた。

「蘇った、と言う事は・・・やはりお前は一度死んでいるのだな、シュウ？」

確かめる様に、リンが問う。

「ええ、確かに一度命を失いました。以前の私は・・・。」

言いかけて、シュウは軽くかぶりを振った。

「・・・いえ、やめておきましょう。今の私を信用して頂くしかないですね。」

「まあ、こつちも・・アチラさん裏切っちゃった以上、アンタにくつついて行くっきゃないんだけどねえ。」

イルムは悪気も無く言い放つ。最初から、こうするつもりだったのだから当たり前だが。

その時、残りの敵を掃除し終わったサフィーネが、ウィーゾルから軽やかに降り立った。

「お！美人！！」

すかさず喰い付くイルム。間髪入れず、その足を思いっきり踏みつけるリン。

「いってえ！！リンちゃん痛い、痛い！！」

「フン！」

「あら、先程仲間になって頂いた方達ですわね。私、サフィーネと

申しますわ。シュウ様の忠実な僕ですの。」

言って、ウインク一つ。イルムは、さっとサファイネの横に移ると、さりげなく肩に手をまわす。

「俺はイルムガルト」カザハラ。イルムで良いぜ。君みたいな美人と知り合いになれるなんて・・・この世界に来てよかったよ。」

「まあ、お上手ですね。ウフフ、イルムさん・・・好い男ねえ・・・。」

満更でもなさそうなサファイネ。

「・・・でも、良いのかしら。彼女、行っちゃったわよ？」

リンを指して言うサファイネに、慌てるイルム。

「あ、ちょ、リンちゃん！愛してるのは君だけだって！！」

「・・・どうだか・・・。」

その様子をちよつと離れて見ていたシュウは、微かに笑っていた。

「フフ、一気に賑やかになりましたね、チカ。」

「ですねー。ああ、アタシの陰、薄くならないといいなー。ほら、ただでさえアタクシって陰薄いじゃないですか。物静かな性格なモンですからねー。ご主人様のファミリアって感じてございましょう？」

シュウ、ノーコメント＆ノーリアクション。

「ご主人様・・・せめて突っ込みを・・・。」

「おや、突っ込まれる内容だと自覚していたのですね。安心しました。」

「・・・。。。。。」

常世の旅路を引き返してから、主人はよく笑うようになった。変わった、と言おうとしてチカは気付く。変わってなどいない、と。

「・・・ご主人様、戻りましたね。」

少し迷って、口にした言葉。

シュウは無言で、しかし、柔らかく笑って見せた。チカの言葉を肯定するよう。

リユーネ＝ソルダーク

誰から聞いたかはすっかり忘れてしまったが、一つだけ、ずっと覚えてる話がある。

メーテル＝リンク、幸せの青い鳥。

魔法使いに頼まれて、色んな世界を巡って青い鳥を探す兄妹。ついに青い鳥を見つけた事が出来ず、落胆して家に帰ると、飼っていた鳥が青い色をしていた。そんな内容。

何故、覚えているのかは分からない。妙に心に残っている。それだけだ。

「この調子で行けば、今日中にはバルディアに着きますわ。」
サフィーネからの通信で、ふと我に返る。

「バルディアはカークス軍が占領してますよね？どうするんですか、ご主人様？」

レーダーを弄くっていたチ力が、一段落ついたのか右肩に飛んできて、ちよこんと止まった。

「カークス軍とは戦わなくても良いでしょう。ただでさえ、シュテドニアスの力が強くなっているのですから。これ以上、彼等の手助けをする必要はありませんよ。」

「ほいじゃあ、カークス軍に出会ったら逃げの一手ですねー。．．．あれ、でもこのまま行くと、カークス軍の本陣に突っ込んだじゃいますよ。」

「おや、ではせっかくですのでご挨拶だけはしておきましょうか。」

「え？ご主人様．．．？」

「シュウ様、カークス軍の識別信号をキャッチしましたわ。」

チ力の困惑を他所に、シュウはカークス軍の真つ只中に自機を進めた。

「なあ、リンちゃん。俺等、完璧置いてけぼり？」

「この世界の事も詳しく分かったらのに、何を口出しする必要がある。」

「・・・いや、まあ、そうだけどねえ。折角登場したんだから、もう少し活躍したいじゃん。」

「・・・何をワケの分からん事を・・・。さっさと行くぞ、イルム。」

外が騒がしかった。

リユーネは日課のトレーニングを中断して、目的の人物を探す。

「ヤーンローン！」

「もういる。」

すぐ後ろから声がして、リユーネは一気に二、三メートル後ずさった。

「びびびびつくりしたあ！急に声かけないでよ！！」

「・・・呼んだのはお前だろう・・・。」

呆れた様に溜息を吐いたのは中国人の青年。名はホワン・ヤンロン。

「ああ、そうそう。外騒がしいけど・・・何かあったの？」

「・・・所属不明機が四機、本陣の真っ只中に現れた。大方、油断していたのだろう。まったく、この軍の連中は少し緊張感に欠ける。」

「ハイハイ、アンタの軍事論評はどうでもいいから、さっさと出撃しようよ。」

話を途中で遮られて、ヤンロンは不服そうだったが、リユーネは気にせず格納庫に向かった。

今ラングランで一番力のあるカークス軍。その本陣の真っ只中に突っ込んで来た所属不明機。

何処の誰かは分からないが、面白そうな奴等だ。久しぶりに楽しい戦いが出来るかも知れない。

リユーネの心は躍っていたが。

出撃したリユーネが見た物は、濃紺の機兵。

見慣れたその機体は、グランゾン。

「あーっ！ーアンタ、まさかシユウ！？」

リユーネは思いっきり叫んでいた。

通信越しとは言え、甲高い声で叫ばれてシユウは顔を顰めた。

「・・・チカ・・・あれは誰ですか？」

「さあ？アタクシの知らない人物ですよ。」

こちらの会話などお構いなしに、むこうの人物はなおも甲高い声で続ける。

「・・・生きてたとはね・・・でも、私に見つかったからには、覚悟してもらおうよ！ー！」

いきなり敵意を剥き出しにされて、シユウは溜息を禁じえなかった。

「・・・何のことでしょう？」

「何すつとばけてんだい！まさか、この私を忘れたなんて言わないだろうね！？」

そんな事は言わせない。そんな空気だったが、覚えていないものは覚えていない。

「さて・・・申し訳ないのですが、私には以前の記憶が無いのですよ。」

「本当かい！？」

「待て、リユーネ。」

喰ってかからんばかりの勢いなリユーネを、後ろから諫めるヤンロ
ン。

「あら、ヤンロンじゃないの。ゴ・ブ・サ・タ。」

「サフィーネか・・・シユウが記憶喪失なのは本当なのか？」

「ええ、本当よ。こんな事で嘔吐くような方じゃあないの、知ってるでしょう？」

「ふむ。」

納得した様に一步下がる。

「シュウ、一つ問いたい。どうやって生き延びた？」

「ああ、貴方の事は覚えています。黄炎龍。炎の魔装機神グランヴェールのパイロット。」

肩透かしを喰らったリユーネが、グランゾンの後ろに見慣れた機体を見つけた。

「あれ、もしかして・・・リンとイルム？」

ヒュッケバインとゲシュペンスト。「よう、リユーネちゃん。相変わらずだな、お前さんも。」

「・・・久しいな、リユーネ。こんな所で会うとは思わなかった。」

「なんで、アンタ達まで・・・？」

「ま、人生色々ってな。説明しても、納得するのは難しいっしょリユーネちゃん。」

相変わらずの調子なイルムに、リユーネはすっかり毒気を抜かれてしまった気分だ。

「記憶喪失なのは分かった。んで、何企んでるんだいシュウ？」

「さて、ね。ともかく、今の私は貴方々と事を構える気はありません。たまたま近くを通りましたので、ご挨拶に伺ったまでです。」
変わらないシュウの懇懃さに、しかし、何か変化を感じてリユーネは口を開いた。

「シュウ、アンタ、ちょっと変わったかい？」

「・・・そうですか・・・？」

「今のアンタ、以前とちよつと違うみたいだ。相変わらず、陰険そうだけどね。少なくとも、ドス黒いイメージが無くなったって言うか・・・。」

途端にしどろもどろになったリユーネに、シュウは苦笑する。

「それでは、私はこれで失礼します。用事がありますのでね。」

「あ！待ちな、シュウ！！こっちはまだ・・・！」

なおも喋ろうとするリユーネを無視して、シュウ達はその空域から撤退した。

「どうにも乱暴な人ですねえ。マサキにそっくり！・・・お知り合
いだったみたいですけど、本当に覚えてないんですか、ご主人様？」
チカが、またぶはーっと息を吐く。毎回何もしない割には偉そうだ。
シユウは記憶のパズルを探る。未だ収まる所を見付けられず、欠片
の儘の記憶達。

その中に、一つ見付けた欠片。

「少し、思い出しましたよ。・・・そう、確か・・・リユネ・・・
ゾルダーク・・・。DCのビアン博士の・・・娘だった気がします。

「へー、博士の娘がパイロットやってるんだー。パターンですねー。

何のパターンかは敢てスルー。自分のファミリアと一緒に居て、日
々磨かれるのはスルースキル。

それにしても、とシユウは思った。先刻のリユネ〃ゾルダークと
いう少女に似た人物を知っていた気がする、と。

喧嘩早くて、他人の話を聞かない猪突猛進タイプの人物。

誰だったろうか、と思案するシユウの脳裏に、その人物が浮かぶ事
は無かった。

可能性、選択、結果、その過程

一卵性双生児は、同じ環境で育てば見分けがつかない位に似た状態で成長する。

しかし、産まれて間もなく引き離され、全く異なる環境で育てば比べようも無いほど別々の人格となる。

遺伝子それ自体は可能性に過ぎない。可能性は環境によって選択肢として振り分けられる。

無意識にその選択肢を選び取りながら成長していく。

いま此処にある“私”という存在は、数多あった可能性の中選択された、ある一定の結末へと向かう過程に過ぎない。

「本日は、チカちゃん観光株式会社をご利用頂きまして、誠に有難う御座います。ワタクシ、当ツアーの添乗員を務めさせて頂きますチカちゃん御座います。どうぞ宜しく。」

シウウの右肩でチカが虚空に向けてぺこりと一礼。

「えー、まもなくパオダ州上空に入りまーす。右手をご覧下さーい。」

「右肩から、グランゾンのコンソール付近に場所を移し、右の羽根をばさりと広げる。」

「ハイ、雄大なネフィルーナ山脈が一望のもとに見渡せまーす。美しいですねー。大自然の偉大さを感じさせてくれる光景です。えー、このネルフィーナ山脈はそもそも・・・。」

「チカ、いい加減になさい。」

サフィーネ、耐えかねて突っ込み。

「えー、サフィーネ様、ノリが悪いですよー！せっかく徹夜で調べてきたのにー。」

「もつと他の事にその才能を使いなさいよ、全く。」

「だってー、地上の皆さんにラ・ギアスの良い所も見て貰いたいじゃないですかー。」

ねえ。と地上勢、リンとイルムに同意を求めるチカ。

「・・・ところで、何処へ向かっているんだ、シュウ？」

リン、完璧スルー。イルムとの遣り取りで磨きに磨いたスルースキルを如何無く発揮中。

「ラングラン王国の王都です。今はシュテドニアスに占領されていますがね。」

「何々、可愛い娘ちゃんでも迎えに行くの？」

「・・・イルム、何でお前は毎回そうも短絡的なんだ・・・。」

「いえ、当たらずとも遠からず、ですね。」

苦笑しながらシュウが言う。

「え！？マジでー!!」

「・・・。。。」

喜ぶイルム。黙り込むリン。

愉快な一行を連れて、鋼とオリハルコニウムの機兵達は雄大な自然の中を進んでいった。

血塗れの母子

その日は小さな町に宿を取った。

言うまでも無く、四人別々の部屋だ。

ロボット達は隠行の術をかけて近くの森に置いてある。

部屋の確認をしている最中、サフィーネが悩ましげに腕を絡めてきた。

「・・・シユウ様、今夜、お部屋に伺ってもよろしいですか？」

上目使いで囁かれた言葉の意味を分からない程シユウは朴念仁では無い。

ただ、サフィーネのその感情をどう受け止めれば良いのか、それが分からず彼は一瞬困った様に笑い、そしてやんわりと断るだけだった。

一方でそんな遣り取りをしてる中、もう一方はと言えば・・・。

「リンちゃん、今夜部屋に・・・。」

「絶対来るな。」

言い終わる前に断固拒否されたイルムは、シユウとはまた違った意味で、困った様に笑うのだった。

夕食の時間。

決して豪華では無いが、暖かみのある家庭料理が並ぶテーブル。

サフィーネも、目立つからと町中では少し地味な服装になっていた。・・・それでも派手だが・・・。

「さて、今後についてですが・・・。」

料理があらかた片付いた所で、シユウが切り出した。

「王都への潜入は私一人で行います。皆さんはこの町でしばらく待機していて下さい。」

「シユウ様・・・私もですか？」

予想通りに不服そうな声を上げるサフィーネ。

「貴女には、別に頼みたい事があります。」

「ハイ！ シュウ様のご命令ならば喜んで受けさせて頂きますわ！」

「では・・・彼等に、ラ・ギアスの事をもう少し詳しく教えてあげて下さい。今後の戦いに備えて必要な事なども。これは今、貴女にしか頼めません。お願いできますか、サフィーネ？」

「・・・シュウ様・・・。」

シュウの言葉に、瞳を潤ませるサフィーネ。

「お任せ下さい！ 不肖、このサフィーネ、全身全霊を持ってそのご命令、聞かせていただきますわ！！」

「・・・そこまで気負って頂かなくても良いのですが・・・。」

立ち上がって敬礼せんばかりの勢いなサフィーネを見て、シュウは苦笑する。

「・・・やれやれ、気付かないのは本人ばかり・・・かねえ。」

二人の遣り取りを見て、イルムは皮肉そうに笑った。

「何の事だ、イルム？」

訝しげに問うリンに対して、イルムは食後のコーヒーを啜りながら答える。

「いやいや、天然誑しは質が悪いなあって思ってたね。」

「・・・あえて誑してるお前の方が、よっぽど質が悪いと思うがな。」

「嫌だなあ、リンちゃん。俺は誑してなんかいないって。いつだって、本気だぜ・・・君にはね。」

「・・・フン。」

真摯に見つめるイルムから、ぷいと視線を逸らして、それでもリンは少し赤面していた。

そんなリンを見て、やっぱり可愛いな、と思うイルムだった。

大公子と大公妃の姿が消えている事に城の者が気付いたのは朝だった。

報告を聞いた時、カイオンⅡグランⅡマクソード大公は落ち着き払った様子だったと言う。

ただ淡々と搜索隊の出動を命令しただけだった。

母子が発見されたのは、搜索隊が出動した一両日後。そう遠くない山中の洞窟の中。

二人を最初に見つけた隊員は、思わず我が目を疑った。

彼の目に映った光景。

彼が見たのは、血塗れの短剣を握り締め、返り血を浴びたまま放心状態の大公妃。そして、祭壇と思しき台に横たえられ、左胸から大量の血を流す大公子。

二人は無事とは言い難い状態で保護された。

大公子の横に寄り添う様に存在する小さな鳥に、その時気付いた者は居なかった。

大公子は一命を取り留め、何事も無かった様にその後の生活を続けた。

その事件以降、大公妃は表舞台から姿を消す事となる。

胡蝶

それは、擦り切れたフィルムの様なボロボロの記憶。

色の無い世界。音の無い映像。ただ自分の意識のみが、鮮明。

血塗れの母。死に逝こうとしている自分。優しく微笑むのは、闇。
それは夢。ただただ夢である事を願う現実。

或いは莊子の胡蝶。

違いは夢を見ているのも、見られているのも自分。

ならば、どちらの自分が夢を見ているのか。

それとも、それすら胡蝶の夢に過ぎないのか。

悪夢に魘される胡蝶の目覚めは未だ遠い。

月の美しい夜だった。

いつもの夢に追い出され、眠りの世界を後にしたのは数分前。
睡眠に関して自身の執着の無さに感謝する。

窓を開けると、夜の冷たい空気が部屋に流れ込んできた。

ラ・ギアスの気候は、一部結界外を除いて、一年中比較的温暖だ。
それでも、それなりに四季があり、冬の空気はやはり冷たい。

「ふ・・・えつくいしよい！」

後ろから、雰囲気台無しのかくしゃみが聞こえてきたが、シュウは構わず空を見ていた。

「うつうつ、ご主人様、お早いお目覚めですね・・・。まだ夜中の二時ですよ？」

小さな体をカタカタと震わせ、チ力がシュウの傍らに飛んで来る。
「夢を見たがっている蝶がいたのですよ、きっと。」

視線を空に向けたまま、シュウが呟いた。

「えーと・・・胡蝶でしたっけ、莊子の？」

「おや、貴女にしては珍しく知っているんですね。」

意外だ、と言わんばかりにシュウはチ力を見遣る。

「嫌ですよ、アタクシだって、ご主人様のファミリアですよ。それ位、知ってますとも。」

「フフ、そうでしたね。」

軽く笑みを浮かべて、また視線を空へと戻す。

太陽の輝きが無くても存在するラ・ギアスの月。

精霊の加護の下、輝く星。

何と美しく、何と白々しい事が。

「ねえ、ご主人様。」

チ力の問い掛けに、シュウは応えない。それでも、聞いている事は分かっていたから、チ力は続けた。

「もし、もしですよ、ご主人様が胡蝶の夢なら、アタクシは一体、誰の夢なんでしょうねえ？」

「・・・・・・・・・・。」

「そもそも、ご主人様が胡蝶の夢なら、アタクシは存在しているんでしょうか？」

「・・・・・・・・・・。」

「えーっと、カント・・・でしたっけ？そんな疑問に取り付かれた思想家・・・いや哲学者？・・・まあ、どっちでもいいんですけど。うーんと、我想う故に我在り、ですよ。コギトエルゴスム！・・・あれ、違ったっけ？・・・まあ、んな事あ良いんですけどね。」

「・・・・・・・・・・。」

チ力のお喋りを、シュウはただ黙って聞いていた。

「ねえ、ご主人様。アタクシ、たまに思うのですよ。何がって？そりゃあアタクシ自身の存在の事なのですけどね。」

「・・・・・・・・・・。」

何も応えない主人をちらりと見遣り、ちゃんと聞いている事を確認

してチ力は更に続ける。

「・・・アタクシは、もしかしたら・・・もしかしたら、ですよ。IFのお話ですがね・・・。」

チ力も、そつと空を見上げた。

冬の澄んだ空気の中、ぽつかりと開いた穴の様に、月は燦然とその存在を誇示している。

「アタクシは・・・ご主人様の見ている夢なんじゃないか・・・。そんな風に思う時が・・・あ、いや、ホント、すつごく稀に、ですよ。・・・でも、そう思う時があるんですよ。」

「・・・チ力。」

「ハイハイ！」

「・・・貴女が私の見ている夢ならば・・・ここに居る私は、一体誰なのでしょうね。」

「アタクシのご主人様です。」

シュウの疑問に、チ力は間髪入れる事なく答えた。

「・・・フッフ、貴女は良いですね、とても、シンプルで。」

「あら、単純つて事ですか？チ力ちゃんはとっても複雑な気分ですよ。」

「いえいえ、そういう事ではありませんよ。」

シュウは、少しだが、愉快そつに笑った。

「・・・明日の胡蝶の目覚めはきつと爽やかでしょうね。」

「まだそんな事言うんですかー！もうー！例えこの世界が、誰かの夢でも、今、ここに存在する世界は、アタクシ達にとっては現実ですよ！」

「おやおや、チ力もたまには良い事を言うのですね。」

「たまにじゃないですー！いつもチ力ちゃんの良い事言ってますー！！」

バタバタと抗議するチ力を横目に、シュウはまた空を見上る。

月の明かりに照らされて、蝶が一頭虚空に舞った。

この世の全ては夢現。

胡蝶が一頭、空に舞う。

終の住処は夢の果て。

常世現世限りなく。

胡蝶は未だ、夢の中。

セニア

「あのー、ご主人様・・・ホントに大丈夫なんですか？なんか、すっごくいいっぱい敵いますけど・・・。」

王都ラングランを悠々と歩き回るグランゾンの中で、チ力は不安そうに呟いた。

「心配はいりませんよ、チ力。この“隠行の術”は持続時間と持続空間を絞り込めば完全に気配まで消す事ができますから。」

事も無げに言つてのけるシュウだが、それがいかに高等な技術が必要な事かはチ力もなんとなく想像がつく。

「あー、確かに・・・目の前通つても全然反応無いですもんね！こりゃあいいや。」

「さて・・・モニカ王女は・・・あの神殿でしたか。近くにとめて忍び込みますよ。」

「はい。」

王都のかなり外れの方に、王族が儀式に使う為の神殿がある。

その中にモニカがいるらしい事は昨日の内に調べておいた。

「ご主人様、ご主人様。」

グランゾンの中でそわそわとしながら、チ力が声を出す。

「どうしました、チ力？」

「うー、なんか、こう、相手から見えないって思うと・・・すっごく、イタズラしたくなりませんか？」

「なりません。」

シュウ即答。

「えー！ご主人様ってば、子供心を忘れちゃったんですか！？ダメですよ！！純粋な子供の心があつてこそ、人間はより豊かに生きる事ができるんですよ！！」

お前がイタズラしたいだけだろう、という突っ込みが各所から飛んできそうだが、シュウは無反応を貫く。

チカはイタズラしたそうにウズウズとあっちこっちを行ったり来たりと忙しなく飛び回った。

「ダメですよ、チカ。隠行の術が効いている間はこちらからの干渉はできませんからね。」

「ちえー。」

心底残念そうに舌を打つチカに、シュウは苦笑するのだった。

奥の部屋からすすり泣く声が聞こえる。

セニアはもう何度目ともなるその声を溜息と共に聞いていた。

「まーたあの子は泣いてるのかしら……。全く、どーしてもないわねー。」

外で見張っているシュテドニアス兵に聞こえないように、セニアは小声でばやく。

奥の部屋に居るのは双子の妹モニカ。

元々王宮暮らししか知らない妹には、確かに酷な環境なのかもしれないが、幼い頃からそこら中を飛び回っていたセニアにとっては今の環境は退屈さえ除けば取るに足らない状況だった。

「はあ、デユカキスは元気かしら？……シュテドニアスの奴らに見つかって、酷い事されてないかな……？」

彼女の心配は、もっぱら自身が構築したメカやコンピュータに向けられている。

その気になれば、コンピュータでロックされたこの部屋から抜け出す事など簡単なのだが、その先のアテが無い為、セニアは渋々今の環境に甘んじているのだった。

不意に、ドアの向こうで物音がした。

呻き声と、何かが倒れる音だろうか。

一瞬の静寂の後、ノックの音が響いた。

「……誰？」

シュテドニアス兵ならばノックなど無しに入ってくる筈だ。それに、先刻の物音も気にかかる。

セニアの声には警戒の色が浮かんでいた。

「失礼しますよ。」

かちやり、と小さな音を立て、開いた扉から優雅に入ってきたのは、思いも寄らぬ、しかし、見知った人物だった。

「え・・・クリストフ!? 何で・・・どうやってここに!?!」

驚きの声を上げるセニアに、シュウは唇に人差し指を当て、微笑んで見せる。

「しつ、お静かに。貴女は・・・セニア・・・ですね?」

確かめる様なシュウの言葉に、セニアは不思議そうに眉根を寄せた。「何言ってるの、クリストフ。他の誰かに見える?」

シュウは、自分の記憶が合っている事を確認すると、満足気に頷く。「クリストフ?」

「ああ・・・いえ、しばらく見ない間に美しくなりましたね。」

「あら、そう? アリガト。心にも無いお世辞だとしても嬉しいわ。」

・・・でも、あの子にはそんな事言っちゃダメよ。多分、卒倒するから。」

「あの子?」

「モニカよ、モニカ。アンタって見かけに寄らずニブイのね。」

「そう言えば、そのモニカは一緒ではないのですね?」

「モニカに何か用なの?」

ほんの僅か、セニアの声に警戒の色が戻る。

「ここから連れ出して差し上げるだけですよ。」

「ふーん・・・何か、怪しいなあ。」

従兄弟とはいえ、これまでの所業を思うと素直に妹を託そうとは思えない。

「何でしたら、貴女も一緒にいかがですか?」

「私?・・・遠慮しとくわ。アンタと一緒になんて、ぞっとしないもん。」

齒に衣着せぬセニアの物言いに、シュウは苦笑した。

「やれやれ、嫌われたモノですね。」

「・・・モニカなら、この奥の部屋で泣いてるわ。ま、こんな所に閉じ込められちゃあ、ね。アンタは行きや、少しは元気になるですよ。」

「この奥、ですね。感謝しますよ、セニア。」

「言っとくけど!」

急に語気を荒げて、セニアがシュウに喰ってかかる。

「今回は黙ってるけど、もし、この先、モニカをこれ以上悲しませるようなマネしたらタダじゃおかないからね!」

「分かっていますよ、セニア。約束しましょう。」

「ん、なら良し。早く行ってあげて。私なら大丈夫だから。」

「ええ、そうしましょう。セニア、貴女も多分、近い内にここから出られると思いますよ。」

「アンタ、未来見の能力まであったっけ?」

「いいえ、ただの勘ですよ。」

昔と変わらぬ、訳知り顔で微笑む従兄弟を、セニアはじっと見つめていた。

部屋を出て行こうとしたシュウが、ふと足を止めて振り向く。

「・・・セニア、もし、この先貴女の原因で悲劇が起きたとしても、それは貴女の所為ではありません。気に病まないようにして下さいね。」

「何、ソレ?それもアンタの勘?」

「・・・そういう事にしておきましょう。それでは、また。」

静かに閉められた扉。去っていった従兄弟は、昔と何一つ変わってはいなかった。

託した希望 託された夢

素っ頓狂な言葉遣いは覚えている。
やや非常識な性格も、覚えている。

出会ったのはどこかは覚えていない。

始めまして、と挨拶したら「あら、始めましてではござられませんのよ？」と笑顔で返された記憶がある。

どこで会ったのか、聞いても笑顔ではぐらかされるだけだった。

そして、かみ合わない会話を交わし、最後別れ際に少女は悪戯っぽく笑った。

「クリストフ様、ずっと、お慕いしておりますのよ、私。」

「ご主人様ー。この先は見張りがいいいますよー。どーします？」

斥候に出ていたチカが、相変わらず暢気な様子で帰ってきた。

「やっぱセニア王女とは規模が違いますねー。まー、人質としてもモニカ王女の方が価値があるでしょーしね。」

「流石に、神殿の結界内では隠行の術も効果はありませんし・・・さて、困りましたね。」

さして困っていなそうな顔で、シュウが呟く。

「仕方ありませんね。・・・チカ、行つてらっしゃい。」

「あ、やっぱり。待ってました！」

出番を告げられ、俄然張り切るチカ。

「くれぐれも、やり過ぎない様にして下さいよ。騒ぎを大きくして、他の見張りに来られては困ります。」

「任せて下さいって、アタクシを誰だと思ってるんですか？チカちゃんですよ！」

だから不安なんだ、と喉まで出掛かった言葉を飲み下し、シュウは

チ力を見送った。

鼻唄混じりに廊下を飛ぶ。

チ力は意気揚々だった。

好き勝手出来るといふのはやはり気分が良い。

誕生して十一年。好き勝手出来た記憶が、実はあまり無いチ力だった。

常に誰かの監視があつた。主人と同じ様に。

主人は、奔放なチ力を言葉で窘める事はあつても、決して彼女の自由を奪おうとはしなかった。

まるで、自身の夢を託すかの様に。

だからチ力は奔放に振舞つた。

例え、監視があろうとも。ルオゾールに数時間の説教を喰らおうとも。鳥籠に入れられようとも。

それが、主人の望みである事を知っていたから。

チ力は小さな決心をすると、見張りの兵士達の前に踊り出た。

「コンニチハ！」

わざと片言の様に発音する。見張りの一人がチ力を指差した。

「おい、あんな所に鳥がいるぞ。」

「あれは・・・ローシエンか。何でこんな所にいるんだろうな？」

「大方、誰かのペットが逃げ出したんだろう。」

チ力は兵士達の前を大きく横切りながら大声で鳴いた。

「バーカ！バーカ！」

「な、何だこの鳥！バカにしゃがって！！」

一人が過剰な反応を示す。チ力はほくそえんだ。やりやすそうな相手だ。

「まあまあ、落ち着けて。たかが鳥だろ。」

別の一人が宿めに入る。

「全く、誰のペットだ！？ 躰がなつてない！！」

「仕方ないって。鳥は躰けるの難しいじゃないか。」

宥めに入ってる兵士の前に飛び、チ力は必殺の一言を放つ。

「ヤーイ！ ノ 野郎！！」

・・・・・・。

余りに過激な発言の為、一部に規制が入っております。

その規制が入る程の一言を、穏やかで無い気持ちで聞く男がいた。宥めに入っていた筈の見張り氏だ。A氏とも呼ぼうか。

彼は顔を真っ赤にして、チ力に怒鳴りかかった。

「ききき、貴様！ 今の言葉は聞き捨てならん！！ 取り消せ！！！」

驚いたのは宥められていた見張り氏。こちらはB氏としよう。

「お、おいおい、どうしたんだよ。たかが鳥だろ。・・・そ、それとも・・・お前、本当に が なのか・・・？」

「お、お、お前まで言うかああああ！！！！！！」

A氏。逆ギレ。

「アホー！ ボケー！ カース！！ ガ ー」

さらに挑発するチ力。更に怒るA氏。

「も、もう勘弁ならん！ 待て、この鳥！！！！！！」

伸ばされる手を、紙一重でひらひらとかわす。

「バーカ！ クヤシカッタコツチニオイデー！ xxxヤロー！！」

トドメの一言を放って逃げるチ力。

「ま、待て！ この！！」

「おい、ほつとけて！ おーい！」

ムキになって追いかけるA氏。A氏を止めに追いかけるB氏。

誰も居なくなつた廊下で、溜息を吐く男が一人。

「・・・上手く行つた様ですが・・・下品な・・・。あまり多用する手ではありませんねえ。」

多少後悔しつつ、それでも、彼は使い魔の自由を奪おうとは思わなかった。

モ二力

丁寧な言葉遣いを覚えている。

歳不相応な落ち着いた様子も、覚えている。

出会った時の事も、しっかり覚えている。

窓の向こうで、寂し気な様子の貴方。声をかけても気付かなかった。何だかそのままだと消えてしまいそうだったから、思わず走って中庭に、貴方の居る場所へと走った。

「始めまして！」

振り向いた貴方の、驚いた顔。一生忘れないと思う。

多分、あれが、本当の貴方。

私が恋に落ちた瞬間。

ここに閉じ込められてどれ位経つのだろう。

すっかり赤く腫れてしまった目を、濡らしたハンカチで冷やししながら、モ二力は溜息を吐いた。

ハンカチを見つめる。

「・・・シユウ様・・・。」

ふう、と吐いた溜息は、先程と違ってちよつと熱っぽい。

恋する乙女、とでも言えば良いのだろうか。

想い人からもらったハンカチをじつと見つめるモ二力。

胞子の谷に出かけた時、転んで怪我をした自分にそつと差し出された白い手とハンカチ。

彼にとっては他愛ない事だったのかも知れない。それでも、彼女にとっては世界がひっくり返る程の大事件だった。

その証拠に、十数年経っても彼女の手からそのハンカチが離れた事はない。

「・・・ああ、シユウ様・・・今、貴方はどこにおいでになられて

いるのでしょうか・・・。」

相変わらず、素っ頓狂な言葉遣い。誰が何度注意しようとも治る気配は無い。

そんな彼女を、後ろから眺めている人物が居た。

ノックはしたのだが、彼女がこんな調子なので一切気付かなかったらしい。

「モニカ。」

呼んでみる。

「はあ・・・シュウ様・・・。」

気付かない。

「モニカ・・・。」

もう一度、呼んでみる。

モニカはきよろきよろと左右を見て、後ろの確認をする事無く、はあ、と溜息を吐いた。

「ああ、今もシュウ様のお声が・・・。シュウ様、ご無事でおられるのでしょうか・・・どこにおられるのです？」

「・・・ここに居ますよ。」

呆れ気味な声で、何度目かの呼びかけをする。

「ああ・・・そうでしたわね・・・。」

モニカは納得したようにひとりごちると、ハンカチを胸元で握り締めた。何か狙ってんじゃねえだろうかって位後ろを向こうとしない。「シュウ様は、いつも私の胸の中におられるのですわね・・・。」

違うから。

チカが居たなら、間違い無く突っ込みが入っていた事だろう。

何故か痛みを感じる頭を押さえるシュウ。

「モニカ。こっちですよ。」

「え？」

ここまで言つて、ようやく振り向くモニカ。

「え？え？・・・ま、まさか・・・本当に？本当に、シュウ様でおられますの・・・？」

「文法が変ですよ、モニカ。」

驚愕と歡喜に固まるモニカに、シュウはそつと微笑んで見せる。

「ああ・・・！！お会いしたかった！！」

凄じ勢いで抱きついてくるモニカに少し戸惑うシュウ。

こんなに積極的な娘だったたろうか。

「ああ、シュウ様！私、これでもう思い残す事はありませんわ！
！」

「モニカ、ひとまず落ち着いて下さい。積もる話もあるでしょうが、今は時間ありません。分かりますね？」

「あ、申し訳ありませんわ。私ったら・・・。」

頬を赤らめながら、シュウから離れる。

「モニカ、貴女が必要です。着いて来て頂けますね？」

真摯に見つめられ、モニカは更に頬を染めた。もう、感動し過ぎて倒れそうな彼女だったが、その理由をきくとシュウは分かっているだろう。本人は自覚無しなのだから恐ろしい。

問われたモニカに、迷いなどあるう筈が無かった。

夢にまで見たこの瞬間なのだから。

「はい！シュウ様とでしたら、私、どこまでも着いて行きたく思われておりますわ！！」

「だから、文法が変ですよ、モニカ。」

何故か凄まじい気合を放つモニカを見て、シュウはただ苦笑するだけだった。

「あ、上手く行きましたね、ご主人様！」

廊下に出ると、狙ったかの様なタイミングでチカが帰ってきた。

主人と一緒にモニカ王女の姿を認め、喜色ばんだ声を出す。

「ええ、あとはここから脱出するだけ・・・。」

「シュウ様、誰か来られますわ！」

「ありゃ、見張りあつちにもいたんだ！」

「やれやれ、急ぐとしましょう。」

シウがモニカの手を引いて走り出した瞬間、廊下の角から兵士の一人が顔を出した。

「！？……貴様……クリストフ！？」

「失礼しますよ。」

すれ違い様、相手の鳩尾に無駄の無い一撃を見舞う。

崩れ落ちる兵士。

「……ご主人様、最初から、全員これで良かったんじゃないでしょうか？」

「……チカ、それでは余りスマートなやり方とは言えないでしょう。」

「はあ、そんなモンでしょうか？」

「そうなモノです。」

さらりと涼しげな顔で答える主人。

「ああ、シウ様はやはりお優しくていらつしやいますのね！」

何をどう解釈したのか、理解に苦しむ言葉のお姫様。

「ただポジティブシンキングなんだ、お前は。喉まで出掛かった言葉を、彼女にしては珍しく、飲み下したチカ。」

「頑張りました、チカちゃん、頑張りましたよー。」

「……何をですか？」

「あ、いえ、こつちの話です。」

「ふふ、チカもお変わりございませんのね。」

緊張感ゼロの逃走劇。

モニカはずっと笑っていた。

ラングラン崩壊以来、ずっと忘れていた筈の笑顔。

繋がれた手。

それだけが、彼女に笑顔を思い出させてくれた。

手を引いてくれる人。

あの日、ハンカチと共に差し出された手と変わらない、白い手。

ずっと、お慕いしておりますのよ。

あの時と変わらない気持ち。

彼女の手握られた、少し古びたハンカチだけが、流れた年月を教えてくれる。

それでも、何も変わらない。

相手も、自分も。

何一つ、変わっていない。

それが、モニカには嬉しかった。

脱出

周囲に疎まれながら、少年は育った。

少年の身分上、それを表に出す者は少なかったが、少年が何も知らずに成長できる程隠す者も少なかった。

それでも少年が鬱屈を抱えずに成長できたのは、ひとえに母親の擁護があつたからだ。

父親は妾にばかりかかりつきりで、少年に見向きもしなかった。

母親と離され、父親を病で亡くした少年は、それでも数人の理解者に支えられ十七歳を迎えた。

そして、行方を眩ます。

公式には行方不明とされたが、その実、ラングラン政府上層部の命を受けて地上へと出ていた。

ラ・ギアス全体の暗黙の了解として“地上への不干涉”というものがある。

しかし、予言への対策として魔装機計画を実行に移していたラングラン政府の一部の人間にとっては、魔装機操者足り得る地上人の情報は是が非でも欲しい物だった。

そこで白羽の矢が立ったのが、地上とラ・ギアス両方の血を引く少年だった。

政府としては、厄介払いの意味合いもあつたのだろう。

こうして万事滞りなく、歯車は回る。

破滅へと向けて、着々と。

「逃がすな！第二、第三小隊は背後に周り込め！！」

張り詰めた声が、戦場に木霊する。

「あちゃー、ご主人様、どうします？逃げ道塞がれちゃいましたよ。」

グランゾンのコクピットで、チカは相変わらず場にそぐわない暢気な声を出した。

「仕方ありませんね、西の方が手薄なようです。ギナス山の方へ向かいましょう。サファイーネ達に連絡を取って下さい。」

主人からの命令を遂行すべく、チカは器用に羽と嘴を使って通信を開く。

「いえっさー。．．．あ、もしもし、チカで御座いますよー。えっとですねー、ちょっと合流地点の変更をお願いしたいんですけど．．．ええ．．．ハイ、ギナス山でお願いします。．．．え？．．．あ、ハイ．．．わ、分かりました．．．。い、いえいえ、そんな事はありませんよー！ええ、モチロンですとも！ハイ！それでは！！」通信を切ると同時に、チカは大きな溜息を吐いた。

「どうしました、チカ。またサファイーネに何か言われましたか？」

「．．．ええ、その通りでございますよ、ええ、ええ．．．。」

よっぼど、何かこつ酷く言われたのか、チカはすっかり元気を無くしていた。

「まあ、落ち込んで少し静かになってくれるのならば有難いですね。」

「ご主人様まで．．．酷い！おーぼーだ！使い魔虐待！！鬼！悪魔！きー！！」

「チカ、八つ当たりも結構ですが、戦闘中なのをお忘れなく。」
右からの砲撃を歪曲フィールドで防ぐ。

コクピットには、軽い振動が伝わってくる程度だ。

「ああ、シユウ様と一緒に．．．はあ．．．なんて幸せなんでしょう．．．。」

こっちはこっちで、戦闘も、隣の喧騒もお構いなく、ただただ想い人の顔に見惚れるモ二カ。

「ありやりや、ご主人様ー。困まれちゃいましたー！」

「．．．この程度、問題ありません。グラビトロンカノン発射準備を。」

「はいなー！」

「ああ、シュウ様・・・。」

チグハグな二人と一羽を中心に、闇が広がる。

結局、全ての追手を振り切るまで、グランゾンのコクピット内はこんな調子だった。

風の呼び声

いつだって、少女はそこに居た。

「私、アナタの事、知ってるわ。ねえ、アナタは私の事、知ってる？」

思い出すのはその笑顔。

どこか母親の面影を見せる、少女。

姿を見られなくなったのはいつからだっただろう。

それでも、きつと少女はそこに居続けたのだらう。

多分、今でも。

「合流地点が近づいてきましたですよー、ご主人様！」

ナビゲーターチェック係のちかがあちこち忙しく動き回りながら報告をしてくる。

シユウは先刻の戦闘で受けた損傷などを調べていた。

「追手の方はどうですか？」

「追つてきようがないんじゃないですか？」

あれだけ暴れてきたんだから、と思いながらチ力はレーダーを一応確認した。

やはり、レーダーで確認できる範囲内には何の影も映ってはいない。

「はいはい、レーダーも反応なし！でございますよ。」

「・・・そうですか。」

「どうしました、ご主人様？」

「いえ、前方から不思議なプラーナを感じるのですが・・・。」

ちらり、とシユウの脳裏に見知らぬ少女の笑顔が横切る。

何だ。

シユウは記憶の糸を手繰る。

『ねえ、私の事、覚えてる？』

少女が笑う。

誰だ。

『私の事、忘れちゃった？』

少女の表情が曇る。

誰だ。

『ねえ、私は、ずっと、ここに居るの。』

少女は両手を優しく広げる。

これは、誰だ。

『ねえ……。』

ゆつくり微笑んで、少女はさらりと闇に溶けた。

消える直前、少女は何かを言っていたような気がした。

「シュウ様？」

モニカの心配そうな声で我に返った。

「ああ、済みません。少し考え事をしていました。このプラーナに覚えがあるような気がするのですが……どうにも思い出せません。」

「前方……ですよね？……うーん、精霊リーダーには何の反応も無いですよ。」

「いえ、シュウ様のおっしゃられる事に間違いはあられませんか。……この先にどなたかがおいでいらつしゃいましてよ。」

「モニカ様ー、文法が変ですよ。えーと、あ、リーダーに反応あり！ホントだ！！……でも、コレじゃあホントにアタクシすっかり知らない子じゃないですか……。」

ウオオ……オン

純白の神鳥が嘶いた。

「……どうした、サイバスター？」

黒髪の少年が訝しげに問う。

ウオオ・・・オン

応える様に、もう一度神鳥は嘶く。

「何か近づいて来てるのか？」

「どうしたの、マサキ？」

「ああ、テュツティ・・・。何か、サイバスターが言ってるんだ。」

「敵・・・かしら？」

「どうだかな・・・。とりあえず、様子を見に行つて来るぜ。」

「ああ、待ってマサキ。私達も行くわ。」

『ねえ、私、アナタの事、知ってる。』

風の少女はいつだってそこで待っていた。

全てを運ぶ、風のように。少女は万物の摂理を運ぶ。

昔も。そして、今も。

風との再会

「あー！サイバスターー！！」

チカの甲高い声がグランゾンのコクピットに木霊する。

遠目に確認できたソレは、美しい純白の機体。

優美な羽根を広げたその姿は、神鳥と呼ぶに相応しい。

風の魔装機神。

渾名は、サイバスターー。

「な・・・ま、まさか!？」

サイバスターーのコクピット内で、マサキは絶句した。

モニターが映し出したその機体は闇の色。

自分が止めを刺した筈の、その人物。

傍らにいるガッデスからも、テュッティが息を呑む様子が伝わって来た。

「クリストフ・・・いえ、シュウ!!シラカワ!!」

敵意を剥き出しにする二人に、しかし、返ってきたのは意外にも穏やかな声。

「・・・貴方々も、私の事を知っているのですね？」

空惚けた様な声に、マサキは怒りを露にする。

「シ、シュウ、手前え!!」

通信機の音が割れんばかりの声に、シュウは閉口する。

「・・・チカ、私は随分と色々な所で恐れられたり、怨まれたりしているのですね。」

「・・・まあ、そうでしょうねえ。」

溜息混じりのシュウの言葉に、冴えない声色で応えるチカ。

そんな事などお構いなしに、サイバスターーのパイロットは尚も声を荒げる。

「生きてやがったとはな・・・だが、ここで会ったが百年目！今度こそ逃がさねえぞ！！」

さり気無く通信機のヴォリュームを下げ、シュウは深々と息を下ろした。

「・・・この下品な物言い・・・思い出せそうなのですが・・・。」

「何ワケの分からねえ事言ってやがる！！俺の事を忘れたとは言わせねえぞ！！」

「先程の、リユーネという少女も、全く同じ事を言っていましたねえ・・・。」

「おい、シュウ！何とか言いやがれ！！」

「ああ、失礼しました。・・・残念ですが、貴方の事を覚えていないですよ。」

あっけらかんとしたシュウの言葉に、またしてもマサキは絶句する。

「なん・・・だと！？」

「・・・シュウ」シラカワ。私の事は覚えていますか？」

穏やかな中にも、うつすらと敵意を滲ませた、女性の声。

「・・・申し訳ありませんが・・・。機体の名前なら存じております。水の魔装機神、ガッデス。」

「まさか・・・記憶喪失なのか、シュウ！？」

「ご主人様、ご主人様。こんな所で時間潰してるヒマありませんよ。」

「ええ、そうですね。では、またいずれお会いしましょう。今は急ぎますので、これで。」

会話を打ち切られて、マサキはまた声を荒げた。

「ま・・・待ちやがれ！シュウ！！」

自身を呼ぶ声に背を向けて、シュウはグランゾンのバーニアを噴かす。

「では、御機嫌よう。」

それは誰に向けての挨拶だったのか。

純白の機体の後ろで、少女が一人、笑っているのが見えた気がした。

違和感

誰かと誰かの遣り取りが聞こえる。

二人が不仲なのは、会話の内容を聞かなくても分かった。

一方は、食って掛かる様な叫び声。

もう一方は、どこまでも対象的な冷たい声。

「・・・懲りない方ですね、貴方も。」

冷たい声が呆れた様に呟く。

「うるせえ！手前えのその台詞も聞き飽きたぜ！！」

「貴方が勝てる確立は万に一つありません。なのに何故、そうムキになってかかって来るのです？」

諭すような静かな声に、先程まで勢いのあつた声が少したじろいだ。

「・・・確かに、そうかもしれないね・・・けど・・・」

そこまで言つて、少し言い淀む。

言葉を探しているのだろうか。何度か言葉を紡ごうとしては飲み込む事を繰り返す。

やがて、意を決した様に声を張り上げた。

「・・・けど、それじゃあ俺自身が納得できねえんだよ！」

余りにもストレートな声。

どこまでも自分に正直な彼が、少し羨ましかった。

「やれやれ。そんな下らないプライドの為に、命を落とすつもりですか。愚かな・・・。」

どこか吐き捨てる様に呟き、小さく溜息を吐く。

この言葉を紡いでいるのは、誰なのだろう。

声は酷く聞き覚えがある。

叫び散らす声は、先刻出会った不思議なプラーナの少年。

もう一方は、一体誰だ。

「サイバスター・・・俺のプラーナを・・・いや、俺の命をお前にくれてやる・・・！俺はどうなろうと構いやしねえ・・・だがな、

奴だけは・・・奴だけは生かしちゃおけねえんだ!!」

少年の、覚悟の叫び。

戦場に、一陣の風が吹きぬけた。

風が存在し得ない、宇宙空間。

そこに駆け抜けた、風。

「・・・俺がもっと早く奴の正体に気付いていれば・・・今までの悲劇は起きなかった・・・!」

はらり。

羽根が舞い降りた。

そんな気がした。

「・・・俺は・・・もう後悔したくねえ。あんな想いは・・・あんな想いはもうたくさんなんだ!!」

少年は、一体どんな想いを踏み越えてここにいるのだろう。

「・・・ねえ。」

声が聞こえた。少女の声。

「だから、サイバスター・・・俺は全身全霊をかけて奴を倒す!!」

少年が鋭い視線を向ける先。

モニターとオリハルコニウムの装甲、そして、宇宙空間を隔てた先に居る人物。

「私の声が、聞こえる?」

必死な声で、少女が呼びかける、その先。

そこに居る、人物。

シュウ!!

少年と少女。二人の声が重なった。

「シュウ様!!」

「っ！」

切羽詰った声に呼ばれ、シュウは我に返った。

「・・・あ・・・っ・・・。」

息が荒い。

「シュウ様、如何なさいましたの？」

横を見れば、心配そうに眉根を寄せたモニカが。正面には同じ様に心配そうな顔をしたチカが居た。

「わ・・・たし・・・は・・・？」

「急にぼんやりとなさったので、心配なさいましたわ・・・。」

「そう・・・ですか。」

色々な物が頭の中で渦巻いている。

急に記憶が一部蘇ってきた。

「そういえば、ご主人様。ホントにマサキの事忘れちゃったんですか？」

マサキ。

自分に激情をぶつけて来た、あの少年。

「・・・そう、少し・・・少し思い出しましたよ。・・・サイバスターに選ばれた少年。時には敵。時には味方・・・だった気がします。」

他にも、何かあった気がする。

もつと他に。

ずきり、と頭が痛んだ。

そのこのピースは未だ手元に無い。

それにしても、とシュウは思った。

先刻の記憶に見た自分。

あの自分に感じた、言い様の無い違和感。その正体。

あれは・・・。

「それにしても・・・。あのマサキがシユウ様とご一緒に戦われたなんて・・・ちよつと信じられませんか・・・。」

シユウの思考は、のんびりとしたモニカの言葉で遮られた。

「・・・モニカ、文法が変ですよ。」

雲合霧集の思考と記憶。

少しずつ、絵の見えてきたパズル。

その絵に潜む、違和感。

見えてきた物。

増えてきた疑問。

全てを内包し、闇は尚も不敵に微笑んだ。

女の決意

「では、サファイアー達と合流しましょうか。」

痛みの残照を引きずる頭を軽く振り、シユウはチカとモニカに告げた。

「え！？紅蓮のサファイアーがいるのですか！？」

もう何度会話に出ている名前を、今始めて聞いた様にモニカが驚く。

「ええ・・・言っでませんでしたか？」

「モニカ様、ご主人様に見惚れてて話全く聞いてませんでしたからねー。」

意外そうに呟くシユウの言葉も、小馬鹿にする様なチカの声も無視して、モニカはついと俯いた。

「・・・サファイアーも一緒・・・という事は、シユウ様は戦場でもあの女と一緒に・・・ああ、なんて事でしよう・・・油断できませんわ、サファイアーって人・・・これは・・・と、なると私も・・・」
一頻り小声で呟くと、意を決した様に顔を上げる。

「・・・どうしました、モニカ？」

何かを決意したモニカの視線に、シユウは横目で問いかける。

「シユウ様、私も・・・私もシユウ様と共に戦わせて頂きたいと思われておりますわ！」

思いがけないモニカの言葉。

文法が変だ、とはどちらも言わなかった。

「貴女が・・・ですか？」

「私も・・・私だって、シユウ様のお役に立ちたいですわ！」

「気持ち嬉しいですが・・・モニカ、貴女の扱える魔装機は・・・」
「」

「ノルスがあります！！」

どこまでも食い下がるモニカの瞳に宿るのは決意。

「・・・」

少しの間、シュウとモニカは見詰め合っていた。

折れたのはシュウだった。

「・・・ノルスの保管場所は、分かりますか？」

「シュウ様！！」

瞳に不安の色を浮かべていたモニカ。その表情が一気に晴れ上がった。

「有難う御座います、シュウ様！ノルスの場所、探してみますわ！！」

モニカはすう、と深呼吸をすると、ゆっくり目を伏せる。

「・・・良いんですか、ご主人様？」

耳元で囁くチカに、シュウは軽く苦笑いして見せた。

お宝

「間違いありませんね、モニカ？」

モニターの端に映し出された地図の一点を指差してモニカは頷いた。

「ええ、ここからノルスの気配を感じますわ。間違いありません！」

「・・・ここは・・・フラモス州ですか。チカ、フラモス州にあるラングラン軍基地のデータを。」

「あいあいさー！」

サブ・モニターに幾つかのデータが映し出される。

「・・・ああ、ありましたね。コーラルキャニオン東、フラモス第3基地。つい最近、ノルスが搬入された記録が残っています。」

「こっからそう遠くなさそうですね。」

「サファイアー達には、少し遅れる旨連絡しておいて下さい。」

「はい。」

シウは更にコンソールを叩き、目的地の詳しい状況を調べ始める。

「・・・基地内の戦力は・・・大した事は無さそうですね。魔装機も殆ど配備されてなさそうです。」

「まー、戦術的に見ても大した事ない場所ですもんねー。」

「お兄様とカークス將軍に殆どの兵は付き従っている筈ですから、余程重要な場所でなければラングラン軍はおられなさそうですね。」

「シユテドニアスの奴等がいたりしないかなー？」

「それこそ、こんな場所に陣取る意味がありませんよ。」

「んじゃ、楽勝ですね。」

フラモス第3基地に警報が鳴り響いた。

兵士達の動揺は明らかだった。

地理的にも、戦術的にも、重要な場所では無い。敵の目を引く様な

兵器も、無い。

本来であれば、一番戦闘とは無縁の場所である筈だった。そこへ現れたのは、グランゾン。

「うつひゃー、大混乱ですねー、ご主人様！」

「グランゾンを遠隔操作出来る時間には限りがあります。急ぎますよ。」

三つの影が、混乱が支配する小さな基地内を、駆ける。

「モニカ、分かりますか？」

問われたモニカは自信に満ちた瞳で頷く。

「間違いありません、こちらです！」

呼んでいる。

私を。

この人の力になる為に！

幾つかの角を曲がった先に、扉があった。

迷いもせずに、モニカはその扉を開け放つ。

さして大きくはない格納庫。

泉の戦乙女が優雅に佇んでいる。

「ああ、ノルス！」

愛機の姿に、モニカの声が喜色ばむ。

「ノルス、ノルス！お久しぶりですわ！力を借りに参りましたの！」
モニカは必死にノルスに呼びかける。

精霊との契約をしているとはいえ、低位。しかも、出力不足で正式な魔装機としても登録されなかった機体。

それでも、少女にとっては、唯一自身を受け入れ、戦場へと導いてくれる鎧にして武器。

「ノルス、私、シユウ様のお力になりたく思われますの。一緒に、来て下さいますね？」

意識を持つ事は出来なかった機体。だが、ソレは確かに彼女の意思

に応え、肯いた。

モニカがノルスと語らっている間、シュウは格納庫の中を歩いていた。

「ん！？くんくん・・・ご主人様！匂う・・・匂いますよー！これはお宝の匂いですー！」

「・・・何ですか、それは・・・？」

「嫌ですよ、ご主人様！金目の物はですね、分かる者には分かる匂いを持ってるんですよー！」

「・・・そうなのですか？」

「アタクシが言ってますから、間違いありませんー！こっちですー！！！」

意気揚々と飛び立つチカに、呆れたような溜息を吐くシュウ。

「ごっしゅじんさまー！こっちですよー！！早くはやくー！！！」

「・・・ええ、今行きますよ。」

チカの声が続いて、格納庫の奥へと進む。

他の場所とは区切られたスペースに、ソレはあった。

「・・・これは・・・。」

「あ、ご主人様！ここ、この中からお宝の匂いがいたしますですよー！！！」

巨大なシルエットは、移動要塞。

奇襲戦が主な戦術となったラングラン軍の、戦の要。

「移動要塞・・・ですね。一般的な物より小型でしょうか。搬入搬出記録にはありませんでしたから、ここで製造された可能性が高いですね。」

「ふーん、なんでまた、こんな所にこんな大事なモン置いとくんでしょうね？」

「・・・製造が間に合わなかったのかもしれませんがね。」

「戦闘に、ですか？」

「おそらく。」

「ご主人様、コレ、頂いちゃいましょうよ!」

「良いですね。」

思いつきで言った言葉が、あっさりと採用され、チ力は呆気に取られた。

「・・・ほえ?」

「自分で言っておいて、何を驚いているのですか?」

心底意外そうな顔の主人。

「え・・・い、いや、こんなでつかいモノ、どうやって持ってくるかなー・・・なんて・・・。」

「動かせば良いだけの事ですよ。」

これまた簡単そうに言い放つシュウ。

「モニカ、こちらへノルスを持ってきて下さい。この要塞を奪って逃げますよ。」

「分かりましたわ!」

「チ力、入り口を探して下さい。」

「りよ、了解です!」

この人に常識を問うのはやめよう。

移動要塞の入り口を探してる間、チ力はそう結論付けた。

「・・・少人数でのゲリラ戦を想定した艦のようですね。」

艦のメインコンピュータが生きていたのは幸いだった。

必要な情報を一通りさらう。

「あれ、ご主人様、この艦、武器付いてないですよ。」

操舵室をあちこち飛び回っていたチ力が声を上げる。

「そのようですね。小型化したは良いものの、装甲と武装に難があつて実戦投入は見送られた・・・といった所でしょうか。」

「ふーん・・・まあ、こっちとしては、動けば儲けモノですからね!」

シュウの情報収集が終わると同時に、モニカが操舵室の扉をくぐった。

「見ない型の移動要塞であらせますわ。」

物珍しそうに周囲を見回しながら、楽しそうにモニカが呟く。

「ノルスの搬入は済みましたか？」

「はい、大丈夫ですわ。・・・これでサフィーネなんかに負けません！！」

気合が入った言葉と共にガッツポーズ。

「モ、モニカ様・・・？」

チカの視線に気付いて、モニカは慌てて居住まいを直した。

「あ、何でもありませんのよ。」

につこりと微笑むモニカは、しかし以前の彼女とは違う気がする。

「・・・恋は女を強くするって言うけど・・・ここまでイメージ変わる人も珍しいなあ・・・いつかサフィーネ様みたくなっちゃったら、どうしよう・・・。」

「そういえば、シュウ様。艦の格納庫に魔装機の部品などがありましたわ。使えるかも知れません。」

「お！お宝ですかい、ダンナ！？」

「確認は後にしましょう、動かしますよ。揺れるでしょうから掴まっついて下さい。」

メインエンジンに火が燈り、小柄な機体が微かに揺れる。

見捨てられた小さな艦は、ようやく燈った灯りに喜び震えている様だった。

発進準備が整った所で、基地格納庫の扉を決じ開けグランゾンが姿を現す。

無人の機体を收容し、艦は猛スピードで精霊の大地を駆け抜けていった。

水面下の戦い

何か重要な事を思い出したり、思いついたりするのは、いつだって突然。

例えば、ずっと詰まっていた理論の解決策を、眠りに落ちる直前に思いつく。

昨日まで、まったく解らなかった方式を、今日になったら簡単に見つけ出す。

覚醒、とでも言えば良いのか。

そんな瞬間はおそらく万人に存在する筈だ。それが多かれ少なかれ。ああ、なるほど。

シュウはひとりごちる。

酷く殺風景なブリーフィングルームの椅子に腰掛けながら、彼は唐突に全てを理解した。

記憶は未だ全ては戻っていない。

それでも、理解した。

これまでずっと感じていた違和感の正体を。

そして、思う。

やはり、今までの行動は間違っただけではなかったのだ、と。

笑う。

可笑しかった。

そして、待ち遠しい。

破壊神サーヴァーヴォルクルスの復活。

「シュウ様？」

声に気付いて、シュウは振り返る。

そこには、どこから持って来たのか、掃除用具一式を持ったモニカが居た。

「ああ、モニカ。ご苦労様です。」

「すぐに使いそうな所だけ、とりあえず綺麗にしておかれましたわ。」

言つて、につこりと笑う。

王女にしては、妙に所帯じみた少女だ。

何回目かに会つた時は、確か城の中庭で洗濯物を干していた。趣味ですの。

投げかけた疑問に、まだ幼い彼女は照れくさそうに笑つて答えた。

「ご主人様ー、サファイネ様から通信でつす！」

グランゾンに待機させていたチカから知らせが届いた。

「有難う御座います、チカ。こちらに繋いで下さい。」

「りょーかいです。」

しばらくの沈黙があつて、モニターが切り替わる。

「シユウ様！・・・あら、グランゾンではありませんのね？」

「ええ、途中でちよつとした拾い物をしまして。」

「まあ、そうですの。・・・それで、モニカ王女は見つかりまして？」

「見つかりましたよ。丁度、ここにいます。」

モニカに少し目配せをすると、意を汲み取つてか、モニカがモニターの前に歩み出る。

「お久しぶりですわ、サファイネさん。」

王女らしい、優雅な会釈を一つ。

「お元気そうで何よりですわ、モニカ王女。」

形式ばつた挨拶を返すサファイネ。

笑顔を作つてはいるが、友好的なモノでは無い。

どこかねめつける様な視線がモニカに向けられていた。

「・・・生贄の元気が無くては、ヴォルクルス様の復活も巧くいかどうか分かりませんものねえ。」

「イケニエ？」

突拍子も無い言葉に、モニカがきよんとする。

「あら、聞いてらっしゃらなかったの？」

意外そうに目を丸めたサフィーネだが、すぐに思い立ってか、サデイスティックな笑みを浮かべる。

「光栄に思つて下さいまし。アナタはヴォルクルス様復活の為の、生贄に選ばれたんですのよ。」

サフィーネの言葉に、モニカが顔色を変える。

「それは本当ですか、シユウ様！？」

シユウは応えず、視線すらモニカに向ける事なく、ただ静かに瞳を伏せる。

そんな二人の遣り取りを見て、サフィーネは愉快そうだった。

「あらあら、何も知らされてなかったようですね！アナタの生贄としての恐怖が、絶望が、ヴォルクルス様を復活させるのよ！……ああ、絶望に打ちひしがれた王女なんて、見物ですね！ほーほほほー！」

最後に高笑い。

グランゾンの中で通信の中継をしていたチカは、シートの上でその台詞を聞いていた。

「……ハマリすぎて、こえーよ、この人……。」

勿論、グランゾンの中の音声も相手に届いてしまうので、あくまで小声である。

モニターの向こうに居るモニカは、少し俯いていたが、やがて意を決したように面を上げた。

「……分かりました。シユウ様が、それをお望みなのですたら……私は喜んで生贄になりましょう。私の命が、少しでもシユウ様のお役に立つのでしたら。」

そして浮かべた表情は、微笑み。

瞳を伏せたままのシユウは、動かない。

サフィーネは少し焦っていた。

明らかに今の遣り取りで、ポイントが高かったのはモニカだ。

「あ、あの、シュウ様、私のシュウ様の為でしたら、生贄でも何でもなりますわ。」

慌てて言い繕ってはみるが、すぐさま、チカの突っ込みが入る。

「・・・サフィーネ様、生贄って処女じゃないとダメなんですよ？」

「うっさいわね！私だって、心はいつも処女よ！」

「なんだかなー。」

チカの嘆息を合図だったように、シュウが伏せた瞳をゆっくりと開ける。

「・・・心配しなくても大丈夫ですよ、モニカ。貴女を生贄にするつもりはありません。」

『え？』

シュウの言葉に、三つの声が綺麗に揃った。

「シュ、シュウ様、それは一体・・・。」

「元々、生贄という考え自体がおかしいのです。要は、できるだけ純粋で、大きな、恐怖と絶望の感情が得られれば良いのです。処女だの王族の血だのに拘る必要など無いのですよ。」

「そ・・・それはそうですが・・・。」

サフィーネは戸惑った。

生贄が必要でないなら、何故、モニカを連れ出したのか。

そもそも、ルオゾールに命じられた時点で、何故反論しなかったのか。

腑に落ちない点が幾つも浮かんでくる。

「心配せずとも、ヴォルクルス様の復活は見事成し遂げて見せますよ。・・・それとも、私が信用できませんか、サフィーネ？」

呟かれた言葉に、サフィーネは慌てて首を振った。

「ととと、とんでもありませんわ！私、シュウ様だけは、いつでも信頼しております！！」

「・・・その言葉、覚えておきますよ、サフィーネ。」

言って、シュウは少し微笑んだ。

サフィーネが、舞い上がらんばかりの勢いで喜んだのは言うまでも無い。

ささやかな願い

地上に出た少年の本当の目的は、政府上層部の思惑とは全く別の場所にあった。

内なる声の命ずる儘に、力を蓄える事ならラ・ギアスでも出来る。自身を苛む破壊衝動を満たす事も、地下世界で事足りる。

地上でしか叶わない、少年の願いがあった。

だからこそ少年は、毛嫌いしていた政府上層部の人間とコンタクトを取り、言葉巧みに自分を地上へ送るよう仕向けた。

この時すでに地上へのゲートを単身で開く事も出来たが、それでは都合が悪かった。あくまでも、自分の意思で地上に出た事を隠しておきたかったのだ。

そうでなければ、少年の目的は達せられない。仮に達せられたとして、その事が他の人間に知れたら意味が無くなってしまふ。

少年にとって“魔装機計画”は様々な意味で良い隠れ蓑になった。

錬金学を学ぶにしてもアカデミーに出入りする理由が少年には必要だったし、研究という名目で監視の目を欺く事も出来た。

全てはただ一つのささやかな願いを叶える為だった。

母親を故郷に帰してやりたい。

少年のその願いは、しかし、意外な形で踏み躪られる事となる。

ノックの音が聞こえた。

今しがたまで伏せられていた瞳を薄く開き、シュウは応えた。

「開いていますよ。」

「邪魔するぜ。」

意外な程静かに扉を開けて、入って来たのはイルムガルト「カザハラ」。

「おや、貴方でしたか。こんな時間に、何かご用でしょうか？」

横目でちらりと時計を見る。机の上に置かれた小さなデジタル時計は22時を示していた。

「なあに、ちよいと男同士の込み入った話でもしようと思ってね。」

おどけた口調とは裏腹に、イルムの瞳は鋭い光を湛えている。こういう手合いは厄介なのだとシュウは経験上知っていた。

「・・・構いませんよ。丁度、私も手が空いた所です。」

椅子から立ち上がりながら、来客用のソファを勧める。イルムは言われる儘ソファに身を沈めた。

「時間も遅いですから、ハーブティーでよろしいですか？」

「おやま、シラカワ先生直々に淹れて下さるんで？そりゃ光栄。お任せするぜ。」

シュウは棚からドライのリンデンフラワーとペパーミントの瓶を取り出し、ティーポットにそれぞれ1：2の割合で入れた。

「沸かしたてのお湯で淹れられないのが、残念ですね。」

「別に俺は英国紳士じゃ無えから、構わないけどな。」

「おや・・・拘りはお持ちの様に見えましたか？」

「モノによるさ。」

「なるほど。」

かちやりと小さな音を立てて、白いバラがあしらわれたティーカップが目の前に置かれる。

「マイセンか？凝ってるな。」

「良くご存知で。まあ、選んだのはモニカですが。」

「ああ、あのお嬢さんか。そんな感じだな。」

ポットから、淡い琥珀色の液体が注がれる。ほのかな甘い香りが立

ち上った。

「どうぞ。」

「どうも。」

自身のカップにもハーブティーを注ぎ、少し香りを楽しんでから一口飲んだ。そつとソーサーの上にカップを戻し、シユウは話題を切り出す。

「・・・それで、お話とは何でしょう？」

「アンタが居ない間に、大体の事はサフィーネちゃんから聞いたんだが・・・。どうにも腑に落ちない点があつてね。」

イルムはカップに入っているハーブティーを一息で飲み干すと膝の上で指を組んだ。

「サフィーネちゃんは、アンタらの目的を破壊神とやらの復活だつて言つてた。」

「ええ、その通りです。」

「俺が思うに、アンタは自身に何がしかの利害が無けりや決して自分から動く男じゃ無い。」

「・・・。。。」

「しかし、その破壊神だかの復活に、アンタの利害が見つからない。復活させたからって、願いを叶えてくれる神さんじゃ無さそうだな。」

「・・・確かにヴォルクルス神は私の願いを叶えてはくれないでしょうね。しかし、ヴォルクルス神が復活しなければ、私の願いは叶わないですよ。」

イルムは射る様な視線でシユウを見据えていた。シユウはその視線を真つ向から受け止め、しかし微動だにしない。

「・・・そこまでしてアンタが求める“願い”ってのは何なんだ？」

「貴方には、きっと分からないでしょうね。」

冷め始めてしまったハーブティーをゆっくりと飲み干す。

「“昔”も“今”も、求めているのはただただささやかな・・・。」

「

そう言つて瞳を伏せたシュウの姿は、どこか儚さを感じさせるものだった。

何故ささやかな願いすら叶わないのか。

目の前に広がる荒れ果てたその場所を、少年は怒りと悲しみを持つて見つめていた。

同ジ様ニ壊シテヤレバ良イ。全テヲ。

ああ、そうか、こわせばいいのか。おなじように。ぜんぶを。

闇と

少年が

嗤った。

女三人寄れば

サファイネは操舵室の一角でプログラムと格闘していた。

普通のプログラムであれば、瞬時に彼女の虜にさせる事が出来るのだが、いかんせんプログラマがシュウとあつてはその作品も一筋縄ではないかない。

ようやく作業を終えた彼女に、後ろから声がかかる。

「お疲れ様ですわ、サファイネさん。お茶になさりませんか？」

「あー、貰うわ。後、さん付けなくて良いわよ、モニカ王女。堅苦しいのキライなのよ。」

「お分かりになりましたわ、サファイネ。では、私の事も呼び捨てになさって下さい。仲間ですもの、対等がよろしいですわ。」

「・・・モニカ、文法変よ。」

サファイネの言葉に、モニカがはにかむ。初めて友達が出来た、子供の様に。

お茶の準備をしてくる、と言ってモニカは小走りに去っていった。

「・・・対等な・・・仲間・・・か。」

モニカが去った後、サファイネはモニカの言葉を反芻する。

「・・・初めて言われたわ・・・。」

呟く彼女の横顔は、照れくさそうに笑っていた。

ホーンで呼び出され、食堂に来てみればモニカとサファイネが他愛ない話題で盛り上がっていた。

「邪魔をするぞ。」

リンは適当な椅子を選んで腰を下ろす。子供の様な笑顔の二人が待っていたのよと声を揃える。

差し出されたカップには琥珀色の液体が満たされていた。香りはアッサムティーに似ているが、水色はずっと鮮やかだ。

「・・・いい香りだな。」

「マラカのフラワリオレンジペコですわ。」

「私はコーヒーの方が好きね。」

そう言いながらもサファイーネの表情は満更でもなさそうだった。

「・・・で、どうよ、リン。こっちの生活には慣れた？」

「ああ、お陰様で。雑務に追われない分、こっちの方が落ち着く位だ。」

「居ついちゃえば良いのに。歓迎するわよ。」

悪戯っぽく笑うサファイーネに、リンも笑い返す。

「魅力的な提案だな。社長という肩書きさえなければ誘惑に負けた所だが・・・。」

「あら、そうおっしゃればリンは会社をお持ちでらしたのですわね。」

「流石に、私一人の我侭で社員を路頭に迷わせる訳にもいくまい。」

「・・・何だかねえ。もっと自由に生きても良いんじゃない？」

「いや、これも自分で選んだ道だ。忙しいなりに、満足はしているよ。」

「ふうん・・・ね、あっちの方はどうなの？」

含みのあるサファイーネの言葉に、リンは首を傾げる。

「あっち？」

「やあねえ、の事よ。」

余りにストレートなサファイーネの言葉に、リンは思わず口に含んだ紅茶を吐き出しそうになった。

「サファイーネってば、お下品でしてよ。」

「いーじゃない。で、どうなのよ？」

「い、いや・・・どう・・・って・・・その・・・イルムと・・・か・・・？」

急に狼狽し始めたリンを見て、サファイーネは愉快そうに笑う。

「リンってば、見かけに寄らずウブなのねー。」

「サファイーネがストレート過ぎるだけな気もなさいますわ。」

「うつさいわね。おぼこは黙ってなさいよ。」

「や・・・その・・・お互い忙しい身だから・・・。」

どンドン萎縮していくリン。ヒートアップするサフィーネ。何故か平然とした顔のモニカ。

「あんまりやってないの？ダメよ、そんなんじゃ。女の方からドンドン誘っていかないと。」

「あら、女は慎ましかに殿方からのお誘いをお待ちいたすものでしてよ。」

「そんな考えだからアンタは未だに処女なのよ。」

そういう問題ではない気がする。

「構いませんわ。私の純潔はシユウ様のものですから。」

「ふん、アンタみたいなカマトト女にシユウ様が振り向くモンですか。」

「分かりませんでしてよ？私、シユウ様の為でしたら、どんな女にでもなりますもの。」

「言うじゃない。でもね、テクニクの無い女なんてすぐ飽きられてお仕舞いよ。」

「多少の知識は御座いますわ。」

「知識だけじゃダメなのよ。要は実践経験なんだから。」

何で二人ともそんな恥ずかしい話題で盛り上げられるんだ。とリンはカップに揺れる自分の顔を凝視しながら考えていた。

文化か？文化の違いなのか？

どんどんとアツくなっていく二人の議論に挟まれ、リンは所在無さそうに紅茶を啜っていた。

駒

捲っていた文献を閉じ、シユウは軽く溜息を吐いた。

「あらま、ご主人様つてば、溜息吐くと幸せが逃げてくらしいですよ！」

お茶菓子として用意されたカシューナッツのクッキーを、器用に嘴で突付くチカ。今時小学生でも口にし無さそうな事を平然と言う。

「・・・迷信ですよ。“幸福”など概念に過ぎません。要は自分がどう感じるか、なのですから。」

「んま！ネタにマジレスされちゃうとチカちゃん困っちゃいますよ！で、で、どうしたんですか、溜息なんかお吐きになって。」

「チカ、品の無い物言いは止めて下さい。・・・少し予想外の事態が起きましてね。」

カップに半分程残っていた紅茶を飲み干す。すっかりと冷めてしまったアールグレイは少し香りが弱い。グレイ伯を魅了した香りは、やはり淹れたての湯気と共に立ち上るあの香りなのだろうなと思った。

「予想外ですか？何も問題なんか起きて無い気が致しますケド？」

「中途で生じた問題ではありませんからね。私とした事が、すっかり失念してしまっていた様です。」

頭の中で問題を整理し直す。儀式。生贄。執行者。場所。術者。やはり、足りない。何故こんな簡単な事に気付かなかったのか。そう考えると自身の甘さに溜息を禁じない。

自身は執行者を演じなければならない。生贄の役はモニカ。儀式の方法は既に承知済みだ。場所も調べてある。足りないのは、術者。地上の二人には残念ながら魔力が無い。サフィーネも、幾分高まってきたとはいえ、術者足り得るにはまだ魔力が足りない。

「・・・さて、困りましたね・・・。」

呟きながら、シユウは自身のデータベースを探る。魔力が高く、尚

且つ一時的にでも良いからこちらに協力してくれそうな人物。

魔力の高い人物は、往々にして教養も高い。そういった人物に、ヴォルクスの復活を手伝えと言った所で首を縦に振る筈が無い。話術には自信があるが、相手の意志力で大きく難易度が変わる。意志力は出来るだけ低い方が良い。

そこまで考えて、シュウの脳裏に一人の人物が浮かぶ。

人生の全てを諦めた様な、無気力を絵に描いた様な、それでも、自身の気付かぬ膨大な魔力を内に秘めた少年。

地上に出る前、幾度か言葉を交わした位だが、印象には残っている。机の上に置かれたホーンを手に取り、サフィーネの部屋に繋ぐ。ワゴンコールも終わらない内に、相手は受話器を取った。

「サフィーネですわ!」

何故か息を切らせて、サフィーネがホーンの向こうで応える。

「急にすみませんね、サフィーネ。少々調べて頂きたい事があるのですが。」

「はいっ!何なりとお申し付け下さいまし!」

「・・・では、テリウスの居場所を調べて頂けますか?」

「テリウス?・・・テリウスって、あの軟弱王子のテリウスですの?」

軟弱王子。その言葉が聞こえたのか、チ力が小さく噴出した。言い得て妙だとも思ったのだろうか。

「ええ、テリウスⅡグランⅡビルセイアの居場所が知りたいのです。この戦乱で行方不明になったと聞いています。」

「それでしたら、丁度先日情報が入りましたわ。なんでも、カークスに保護されてるそう。」

シュウが、ほう、と小さく声を出した。

今、ラングランの王座は空席になっている。純粋な王位継承権保持者は三人。そして、そのラングランには今四つの勢力がある。その四つ、フェイルロード軍、カークス軍、シュテドニアス軍、そして自分達。四つの内三つに見事王位継承者第三位までが顔を揃えた形

になる。

フェイルロード軍はラングラン第一王位継承者であるフェイルロードⅡグランビルセイア率いる正規軍。第二王位継承者であるモニカは手中に。そして、カークス軍が第三王位継承者を手に入れた。

シュテドニアスの力が日に日に弱まっていつている今、ラングラン奪還を旗印にしていた両雄がそう長く肩を組んで歩くわけが無い。フェイルロードには時間がないだろうから、尚更だ。

そこへ来て、無気力な王位継承者を手に入れたカークス。シュウは笑った。

「どうしましたの、シュウ様？」

「・・・いえ、面白くなって来たと思ひまして・・・ククク・・・」

「ホーンから聞こえてくる冷たい笑い声に、サフィーネはぞくりとした。あ、あの冷たい瞳で蔑む様に見つめられたら！あの美しい脚で、踏みつけて貰えたら！」

全ての頂点に立つ様な、尊大なあの方を、屈服させられたら！理性の権化の様なこの方を、力で捻じ伏せ、組み敷けたなら！

サフィーネの脳裏を、様々なアブナイ妄想が駆け巡る。映像化されたら成人指定間違い無しだ。

「・・・ネ・・・サフィーネ、聞こえていますか？」

ずいぶんとトリップしていた様で、ホーンからは訝しげなシュウの声が聞こえていた。

「あ、も、申し訳ありませんわ。」

慌てて我に返るサフィーネ。

「・・・カークスはおそらく早々にテリウスを王位に就けようとするでしょう。」

「あら、フェイルロードが居るのに・・・ですか？」

「ええ、カークスが欲しているのは自分の意の儘になる傀儡です。

民衆にカークス軍の活躍が鮮やかな内に動く筈です。」

「・・・そんな事を、フェイルロードが許すモノでしょうか？」

「フェイルはまずラングランを平定する事を優先させるでしょうから、表向きには同意を示すでしょう。それでも、黙ってはいない筈ラングランからシュテドニアスが撤退し次第、フェイルも動くと思いますよ。」

「では、その前にテリウスとコンタクトをお取りになるのですね。」

「ええ、その通りです。調べて頂けますか？」

「お任せ下さいまし、シュウ様。二日、お時間を下さい。必要な情報全て持って参りますわ。」

「お願いします。」

シュウは静かにホーンを下ろした。

椅子の背凭れに体重を預け、組んだ足の上で指を合わせる。椅子のスプリングがぎしりと小さく音を立てた。

「ご主人様、ご主人様？」

「何ですか、チカ。」

「何でフェイルロードとカークスが対立するって思っんですか？そのまま仲良くラングラン治める可能性もあると思っんですが。」

「・・・チカ、貴女は自分で言っていたではないですか。動物も、植物も、上を目指し上る、と。」

シュウは静かに瞼を下ろす。

「支配者の椅子は一つ。両雄が並び立つには舞台が狭すぎるのですよ。」

伏せた瞳に何を映すのか、シュウの声は何処か哀しそうでもあった。

乙女心

ブリーフィングルームの小さな窓から、ウィーゾルの赤い機体が緑の大地を滑る様に駆けて行くのが見えた。

サファイーネの情報収集能力を、シュウは特に高く買っていた。もつとも、本人は前線に立って戦うのが好きなようだったが。

「あら、サファイーネはお出かけになられてしまいましたのね。一緒にお茶でも飲もうかと思われましたのに。」

後ろから窓の外を見ていたモニカが残念そうに呟く。

「・・・モニカ、また文法が変ですよ。」

「ふふ、個性的な女性は魅力がある、とイルムが言っして下さいましたわ。」

「それは良かったですね。」

「シュウ様は仰って下さいませんか？」

ずっとシュウの横にモニカが立つ。陽光に、栗色の髪が美しく輝いた。

「・・・貴女の淹れる紅茶は、今の所、他に並ぶ物が無いと思ってますよ。」

「まあ！」

モニカの表情が華やぐ。

「では、シュウ様、お茶になされません事？マカラティーのフลาวリイオレンジペコが御座いますの。」

「おや、それは良いですね。淹れて頂けますか。」

「お任せ下さい。サファイーネも、この紅茶は好きだって言っていましたわ。」

モニカの言葉に、シュウはおやと思った。

サファイーネ。さっきも確かにそう言った。昨日まで“サファイーネさん”と呼んでいた筈だ。

「モニカ。」

呼び止める。

「はい、何でしょう、シユウ様？」

無邪気な笑顔で振り向くモニカ。

「・・・サファイネと、随分仲良くなったんですね。」

「ええ、仲間ですもの。サファイネも、モニカと呼んで下さいますのよ。でも、ライバルでもあられますから、油断はされませんわ。絶対に、負けないつもりに思われますの。」

「・・・ライバル？」

「あら、シユウ様、それは聞いてはいけない事でありましてよ。」
無邪気な笑顔から意味深なそれに変えて、モニカが笑う。

「では、お茶を淹れて参りますわ。」

くるりと踵を返し、軽やかに走り去る少女。その後姿を見送りながら、シユウは眉根に皺を寄せていた。

「・・・ライバル？」

いまいちピンと来ない言葉に首を傾げる。

その様子を机の上で見ていたチカは、ニヤニヤと楽しそうに笑っていた。

「・・・どうしました、チカ？」

「いえいえ、なんでもありませんよー、うふふー。いいな、いいな、あまずつばーい。」

チカの意味不明な言葉に、シユウの疑問は増えるばかりだった。

稼動していたブラックホールエンジンを止め、リンはコンピュータの画面を睨んだ。

ヒュッケバインから送られてきたデータを整理する。並んだ数字の大きさが示すのは、安定性の無さ。

随分と改良を加えた筈のこのエンジンですら、この数字。リンの表情は少し厳しい物になっていた。

「・・・ふむ、どうしたものか・・・。」

「あつれー、リンちゃん、こんなトコで何してんのー？」

後ろから聞こえた能天気な声に、リンは振り向きもせず応える。

「見てわかるだろう、イルム？ヒュッケバインのテストだ。元々、テスト起動する予定だった物ごとこつちに来てしまったからな。少しでもデータを取って帰りたい。」

「お仕事熱心です事。」

「悪いか？・・・自社製品が不名誉な渾名をいつまでも戴いたままとはいかんだろう。」

リンの眉根に皺が寄る。イルムは手を伸ばして、その皺を突付く。

「リーンちゃん、あんまり根詰めちゃ駄目だぜ。せつかくのキレイな顔が台無し。」

「ばっ・・・！な、何を戯けた事を言っている！？」

真っ赤な顔でイルムの腕を払う。この程度の事でいちいち照れる自分が恨めしかった。

「まあまあ、せつかく景色の良いトコに来たんだし、ちょっとは息抜きしようぜ。ほら、ケーキ買って来たんだ。」

「う・・・。」

差し出されたケーキの箱と、イルムの顔とを交互に見比べ、言葉に詰まる。

自分のイメージとかけ離れてるだろうから、と秘密にしてるのだが、リンは甘い物に目が無かった。

イルムの笑顔が忌々しい。その笑顔に見惚れてしまう自分が、もつと忌々しい。

「・・・もだ・・・。」

「ん？何、リンちゃん？」

「・・・こ、紅茶も・・・だ。・・・ケ、ケーキには紅茶・・・だろう・・・？」

それだけ言っのが精一杯で、リンは真っ赤にした顔を下に向けてしまふ。

「おっと、俺とした事が、そんな事も気付かないなんて！」

イルムは、そんなリンの様子をからかうでもなく、いつもの様に、ちよっと大げさな台詞を吐いてみせる。

「じゃあ、食堂に行こうぜ、リン。」

言って差し出されたイルムの手を、リンは躊躇いがちに取る。

こちらにも吹き荒れるは甘酸っぱい恋の嵐。

「いやー、皆さん乙女でいらっしやいますねー。」

「・・・だから、何の事です、チ力？」

「いえいえー、こっちのお話ですよー。うふふー、レモンの味ですねー。」

「それはファーストキスではありません事？」

「あれ、そーでした？まーどっちにしてもあまらずぱーい。あまらずぱーい。」

「うふふ、そうですわね。」

「・・・二人とも、一体何を言っているのでしょうか？」

悪戯好きの鴉

約束通り、きっかり二日でサフィーネは戻ってきた。

シュウの姿を認めるや否や、凄い勢いでウィーゾルから飛び降り、駆け寄って来る。

「シュウ様！モニカに変な事されませんでした！？」

開口一番に出た台詞に、シュウは顔を顰めた。

「いきなり何です？」

そんな二人の間に、モニカがずいっと割って入る。

「心外でしょ。変な事したいのは、サフィーネ、貴女でしょう？」

「あら、良い度胸じゃないの。」

乙女二人の背景に燃え盛る赤い炎。

その炎が見えているのかいないのか、シュウは我関せずといった風だ。当事者なのに。

「・・・ところで、サフィーネ。首尾は如何でしたか？」

「あ、ハイ！今、テリウス王子はバランタイン州のクサカ市にいます。どうします、強引に攫っちゃいますか？」

サフィーネから記録用の端末を受け取って、シュウは首を横に振った。

「いえ、あくまで彼が自主的について来てくれなくてはならないのです。ですからまず、彼と会って話をするのが先決ですね。」

「でしたら良い方法がありますね。彼は特定の時間に魔装機の操縦訓練を受けていますから、その時に私達が騒ぎを起こせば、“隠れ蓑”なり“隠行の術”なりで簡単に近づけると思います。」

「なるほど、良いアイデアです。ともあれ、今日はゆっくりと休んで下さい。お疲れ様でしたね、サフィーネ。」

「シュウ、少し良いか？」

部屋に戻る途中の廊下で、リンに呼び止められた。

「何でしょう、リン。」

「これを見て貰いたいのだが。」

差し出された用紙には、不規則に並んだ数字達。

「これは……。」

「ヒュツケバインに搭載されているブラックホールエンジンの出力だ。」

「安定がありませんね。」

「……そうなんだ。それでも随分とマシになった方なんだが……。」

シュウは小さく唸る。

「グランゾンのブラックホールエンジンは、“保存”の咒文によって安定させています。」

「咒文？」

「ええ、ですから、私以外が乗ってもまともには動作しません。今度はリンが唸り声を上げる。」

「……という事は、ヒュツケバインの出力を安定させるのは不可能なのか？」

「ブラックホールエンジンの出力をフルに使おうとすれば、安定させるのは難しいでしょうね。出力を犠牲にすれば、不可能ではありませんよ。」

「本当か!？」

リンの声に喜色が混じる。シュウは軽く頷いて見せた。

「要は、ブラックホールが大きさが常に一定であれば良いのです。高出力にしようとすれば、ブレもまた大きく成らざるを得ません。」

「なるほど……。」

「安定する数値を見つけて、必要であればリミッターを付ける事ですね。」

「分かった、感謝する。」

柔らかい表情に戻ったリンを見て、シュウも少し笑う。

「良ければ後でサフィーネに見させましょうか？彼女はメカニックとしての腕も中々の物ですよ。」

「それは助かる。早く“凶鳥”からただの悪戯好きの鴉に戻って欲しいからな。」

「鴉は賢い鳥ですから、きっと解ってくれますよ。」

「そうだな。」

顔を見合わせて笑う。

廊下の窓からは柔らかい光が差し込んでくる。冬とはいえ、その光は暖かい。

「あ、こんな所にいたんですか、ご主人様！モニカ様達が探してましたよ！」

「ええ、今行きますよ。それでは、リン、また後で。」

「ああ、時間を取らせてすまなかった。」

お互いに簡単な挨拶を交わし、別れる。

「ご主人様、リン様と何話してたんですか？」

道すがらチカが聞いてくる。シユウは笑って答えた。

「悪戯鴉が不整脈で困っているそうですので、簡単な診察をして差し上げていたですよ。」

「あらま、かわいそうなカラスさんです事！同じ鳥として同情しますわー。」

意味を分かっているのかいないのか、チカはいつもの軽い調子だった。

グナイン

テリウス「グラン」ビルセイアは暇を持て余していた。

正確には暇ではないのだが、課された課題のどれ一つを取ってもやる気を出せないでいる。

そんなテリウスの様子を見て、教育係を任されたミラ「ザニア」ライオネスは密かに溜息を吐いた。

「王子、課題は進みましたか？」

耐えかねて声をかけてみても、やる気の無い声が返ってくるだけだ。
「ミラか……。これが進んでるように見えるかい？」

白紙のノートをこれ見よがしに広げる。積み上がった本には手を触れた形跡すらない。

「……王子、貴方は未来のラングランを背負って立つお方です。もっとしつかりなさって下さい。」

「なんでぼくなのさ。兄さんがいるだろ？」

「カークス將軍が、貴方の方が適任だと判断なされたのです。」

テリウスはミラの言葉を鼻で笑う。

「……そりゃ、カークスにとっちゃぼくのが適任だろうさ。彼が欲しいのは思い通りになる王様だろ。」

「王子！」

ミラが声を荒げる。カークスは彼女にとって、例え何を企んでいようと、立派な上官だ。侮辱は許されない。それでもテリウスは続けた。

「違うなんて言わせないよ。まあ、何でも良いさ。ぼくに選択権なんか無いんだから。」

不貞腐れた様に、真っ白なノートを投げ捨てる。

「こんな事したって無駄だろ？ぼくは何をするでもないんだ。ただ玉座に座らされるだけの人形さ。」

「……そんな事はありません、王子は……。」

ミラの言葉を鬱陶しそうに手で遮り、テリウスはソファに寝そべった。

「昼寝する。魔装機訓練の時間になったら起こしてよ。」

「魔装機の訓練は受けて下さるのですね。」

「・・・外に出れるからね。」

「テリウス様・・・。」

「眠いんだ。さっさと出てってくれよ。」

ごろりと背を向けてしまったテリウスに、それでも一礼をして、ミラは部屋を出る。

伏せた臉が見せる赤黒い闇の中で、テリウスは扉が閉まる音を聞いていた。

シウウにより“グナイン”と名付けられた移動要塞はバランタイン州の程近くに來ていた。

ブリーフィングルームに集まった全員の顔を一通り見回して、シウウは口を開いた。

「今回、皆さんにお願いしたいのは陽動です。」

シウウが右手を掲げると、その場にうつすらと地図が浮かび上がる。

「目的地はクサカ市、その近くにあるカークス軍本陣の注意を、一時的にで構いませんので、引いて下さい。」

「質問。」

イルムが軽く右手を挙げる。

「どうぞ。」

「開始時間と終了時間は？」

「開始時間は今から一時間後、機体のメンテナンスは既に終わっていますのでご心配なく。申し訳ないですが、終了時間は分かりません。なるべく短時間で済ませますが、もし私が戻る前でも、危なくなったらいつでも退いて頂いて結構です。」

「了解。」

「では、各人の健闘を祈ります。」

一時間後、グナインはクサカ市のすぐ近くにある森にその身を隠していた。小柄な体躯と、外装に施された迷彩の魔法によって、その姿はよつぽど注意深く視なければ認められない程だった。

格納庫で各々が機体の最終チェックを行う。

全員のチェックが終了したのを確かめて、サフィーネはシュウに通信を入れる。

「それではシュウ様、私達は先に出撃いたしますわ。」

「気をつけて下さい。くれぐれも無理をしないように。貴方々は、大事な私の仲間なのですから。」

返ってきたその言葉に、サフィーネの顔が赤らむ。

「そんな・・・勿体無いお言葉・・・。」

大事な。シュウにそう言われ、表面上は何とか平静を装ったサフィーネだが、その内面は踊り出さんばかりの喜びようだ。

「・・・大事な・・・私の大事な・・・ですって！きゃー！もー、シュウ様あ！！！！！」

通信が切れた事を確認した後、サフィーネはしばらくコクピットの中で悶えていた。・・・多分、モニカも。

「よつしゃー！キッチリいったろーか！」

サフィーネは気合一発、カークス軍本陣の真っ只中に砲弾を撃ち込んだ。

「ま、お下品。」

クスクスと笑いながら、同じように戦闘態勢を整えるモニカ。

「作戦時間が分からない以上、あんまりド派手にはやりたくないね。」

「そう言った所で、注意を引かねばならんのだから、多少は派手に暴れねばなるまい。」

「そーなんだけどねー。」

「せっかくブラックホールエンジンを改良して貰ったんだ、良いデータを取りたいものだ。」

計器の全てが正常値なのを確かめて、リンは満足そうに笑った。

「お、おいでなすったぜい。」

突然の襲撃に、多少動揺しながらも、次々と現れる魔装機達。幸いにも、地上の兵器と魔装機神は居ないようだった。

「さあ、仔猫ちゃん達、この紅蓮のサファイアーネが相手よ！精々、楽しませて頂戴！！」

「シユウ様、大丈夫かしら・・・。」

「さーて、一発かますとするか！」

「・・・行くぞ！」

四機が同時に地を蹴った。

テリウス

本陣の方から煙が上がっているのが見えた。

テリウスは興味がなさそうだったが、ミラにとっては気が気でなかった。

その方角から来たルジャーノールを、だからミラはすぐに見つけた。声を張り上げる。

「どうした、何があった？」

「て、敵襲です！」

息を切らせながら、兵士は叫んだ。

「敵襲だと？バカな、シュテドニアがここまで来れる筈は無いだろう！」

バランタイン州はラングラン王国国土の丁度中央辺りに位置する。

シュテドニアスからもバゴニアからも距離があるこの州は、だから要人を保護するに当たって打ってつけの場所だった。

「い・・・いえ、それが・・・シュテドニアスではありません！」

兵士が言い淀む。ミラに続きを促されて、震える声でようやくその名を吐き出した。

「ぐ、紅蓮のサファイーネです!!」

「サファイーネだと!？」

ミラの声にも驚きの色が混じる。

「・・・どういう事だ・・・まあ、良い、私もすぐに行く！」

その返事を聞き、兵士は慌てて戦線に戻って行く。

ミラは、後ろで退屈そうに空を見ていたテリウスに深々と一礼する。

「申し訳ありません、王子。しばらくここを離れます。くれぐれも、ここをお離れになりませんよう。すぐ戻りますので。」

テリウスはミラに見向きもせず手を振った。

「・・・いつてらっしゃい。ゆつくりしてて良いよ。」

走り去っていく靴音だけを聞いて、テリウスは宛がわれた魔装機が

デIFOールの足元に寝転がった。

欠伸を一つ。

「ふん・・・毎回無意味な事やらせて、何になるんだか・・・。ど
ーせ、ぼくは飾り物の王位に就けられるだけなのに。」

ぼんやりと眺める空には雲が風に運ばれている。なす術もなく流さ
れる雲は、周囲の成すが儘にされいる自分に、何処か似ていた。

「・・・思えば、昔からそうだ・・・。」

自分がアルザールの子だと知ったのは、母親が死んだ時だった。母
親の遺書に、私が死んだら父親を頼りなさい、という言葉と共に添
えられた指輪。その指輪に刻まれていたのはビルセイア王家の紋章。
他に身寄りも無かったので、そのまま王宮暮らしをする事になった
彼は、事ある毎に腹違いの兄と比べられる羽目になった。

フェイルロード様は。フェイルロード様なら。フェイルロード様の
様に。

結局、誰一人として“テリウス”という人間を見てくれはしなかつ
た。

「どうせぼくは役立たずさ。」

何てつまらない人生。

本当に？

当然さ。

本当にそう思っているのですか？

だって、ぼくには取り柄がない。

「本当に、そう思っているのですか、テリウス？」

「え？」

突然耳に届いた言葉に、テリウスは飛び起きた。

「貴方に取り柄が無いなど、本当に思っているのですか？」

傍で語りかけられている。声の近さで分かる。周囲を見渡す。人影
は、無い。

「だ、誰だ！？」

叫ぶテリウスの目の前に、ゆっくりと景色が歪んで、濃紺の機影が

現れる。徐々に輪郭を見せるその機影は、魔装機では無い直線的なフォルム。

血色の掌に佇む人物がこちらに言葉を向けている。その人物に、テリウスは見覚えがあった。

「私ですよ、テリウス。」

「クリストフ!？」

紫紺の機体が跪き、その手を大地に下ろす。掌から軽やかに、彼の従兄弟は降り立った。

「久しぶりですね、テリウス。」

「び、びつくりしたじゃないか！一体いつの間に!？」

「貴方が此方に居ると聞いて、顔が見たくなりましたので。」

「・・・今のぼくを笑いにでも来たのかい？」

すっかりとやさぐれた様子のテリウスを見て、シュウは苦笑した。

「随分と苦勞をしているみたいですね。」

シュウの言葉を肯定するようにテリウスは溜息を吐いた。佇むガデイフォールの足を背凭れに寄りかかる。

「見ての通りさ。」

肩を竦めて自嘲気味に笑う。

「テリウス、貴方は今の儘で良いんですか？」

シュウはテリウスの目を見つめ、真っ直ぐに問いかけてきた。

「いつも誰かの言いなりになって、自分自身の事ですら、自分で決められない。・・・それで、満足ですか？」

「君に・・・君に何が分かるって言っただ!？」

思わず叫んだ。魔力もあり、知力もあり、幼くして城の中の誰よりも剣術、魔術ともに優れていた従兄弟。

能力全てに恵まれた人物に、自分の惨めさなど分かるものか。そう思った。

「・・・全て、分かりますよ。」

返って来た応えに、テリウスははっとした。彼の出生を、思い出したからだ。

地上人を母に持つが故に、秀でた能力を持ちながら、疎まれ続けた従兄弟。

感情の読み取れない彼の、しかし、内に渦巻いているそれはいかなるものなのか。

バツが悪そうに視線を逸らし、テリウスは呟いた。

「・・・悪かったよ。・・・でも、仕方ないだろう。ぼくは、君やフェイル兄さんみたいに魔力が高いわけでも、頭が良いわけでもない。・・・魔装機だつてろくに扱えやしない。」

「・・・それで、何もかも諦めた・・・そう言いたいのですか？」
「だったら、どうだって言うのさ？」

視線の先に、ガディフォールの爪先がある。真新しいその輝きは、どこか毒々しさすら漂わせた。

「テリウス、貴方は自分で自分を型に嵌めているだけです。努力もせずに、自分の殻を打ち破る事などできませんよ。」

シュウの言葉に、テリウスはかつとなる。努力していないと思われたのが癪だった。

「努力はしたさ！でも、ぼくには才能なんてないんだ！！君や兄さんとは違う！！！」

叫んでから、気付いた。こんなに感情的になったのは、一体いつ以来なんだろう、と。彼は、自分を“フェイルロードの弟”ではなく“テリウス”として扱ってくれているのではないか、と。

「テリウス、貴方に才能が無いなどと、本当に思っているのですか？」

「・・・クリストフ、ぼくは・・・。」

「貴方の力が、私には必要なですよ、テリウス。ビルセイアの血ではなく、テリウスという個人の力が。」

テリウスは息を呑んだ。

必要。自分が。身分ではなく、個人として。

「・・・ぼくに、君の仲間になれって言うのかい。破壊神ヴォルクスを奉じ、背教者になれって言うのかい？」

気持ちには、傾き始めていた。それでも、破壊神を崇める気持ちは湧かない。そんなテリウスの気持ちを察したのか、シユウは首を横に振った。

「破壊神を奉じる必要などありませんよ。ただ、私に力を貸して欲しいだけです。」

「……君の言う力が何か分からないけど、ぼくにそんなモノは無いと思うよ……。」

「貴方自身が気付いていないだけです。私なら、貴方の眠った才能を引き出して差し上げられますよ。」

どこまでも平凡だと思っていた自分を、しかし、彼は才能があると言う。非凡な彼が。そして、必要だと言う。

「……言っただろ、ぼくに才能なんて、無いよ。」
呟く彼の言葉は弱々しかった。

一個人として、自分を必要としてくれている。今、周りに居る連中とは違い、人形としてではなく人間として扱ってくれる。そんな人物の傍に行く。それはもしかして、物凄く魅力的な事なのではないか。

「ぼくに……才能なんて……。」

誘惑を断ち切るように、もう一度呟いた。いつそ強引に攫ってくれれば、頑なに拒む事も出来たのに。そんな事を思った。

「分かりました。」

シユウは頷いた。自分の言葉に、失望した風でもなければ、期待通りという感じでも無い。ただ在るが儘を受け入れた、そんな雰囲気だった。

「今日は、もう帰りましょう。……ただ、これだけは覚えていて下さい。貴方が自分の意志で行動すれば、必ず道は開けます。まずは、自分から動かなければ、世界もまた動かないのですよ。」
優しく、子供に言い聞かせる様な穏やかな声。

「……自分で……動く……ぼくの、意志で……。」

「貴方が目覚めるのを、待っていますよ。では、また会いましょう。」

「再会を確信しているその声。別れを惜しむでもなく、彼は背を向ける。」

主人に跪いたままだった機兵の掌に乗り、最後にもう一度、テリウスに向かって微笑みかけた。

「クリストフ・・・ぼくはっ・・・!!」

テリウスの言葉に構う事なく、紫紺の機兵はその姿を消した。後に残るのは自分の声の残照と、そよぐ風。

「・・・ぼくは・・・。」

自分の手を見つめ、呟く。

ぼくは。

何をしたいのだろう。

ぼくは。

何ができるのだろう。

ぼくは・・・。

テリウス、貴方は私の、自慢の息子なのよ。

幼い頃、母親から貰った言葉。

「ぼくは。」

そっと空を仰ぐ彼の瞳は、強い光を湛えていた。

其々の戦

バーニアペダルを踏み込む。

加速は幾分悪くなった気がする。それでも、後方に見えるゲシユペ
ンストとの距離からそれなりのスピードが出ている事が分かった。
各計器、いたって正常。

敵陣の真っ只中に突っ込む。狙いを付けずにミサイルランチャーを
射出。着弾と同時に爆発。舞い上がる土煙に紛れて右手のプラズマ
ソードを振るう。

切り離された腕が、ずしゃりと重い音を立てて地に落ちる。そのま
ま敵機の頭を掴み、手近な機影に投げつける。纏れ合って倒れる二
機に向かい、リープ・スラッシャーを撃ち出した。

未だ収まらぬ土煙に隠れて、リープ・スラッシャーは標的を両断し
た。

誠に以って重畳。

リンは笑った。

敵陣真っ只中に単機突撃して行った相方を、イルムは苦笑いと共に
見ていた。

本人は否定するのだが、彼女は意外と好戦的だ。

出会ったのは、とある仕官学校で、その頃は酷い男嫌いだった。口
癖は“男に出来て、女に出来ない訳が無いだろう”。結局、彼女は
その学校を主席で卒業した。

そんな彼女に、おそらく、生まれて初めての敗北を味わわせたのが
自分だった。

仮想空間での擬似戦。

当時、学友の中で、イルムは飛びぬけた実力の持ち主だった。それ
を聞きつけたリンが、果たし状を突きつけてきたのだ。

結果は、イルムの辛勝。報酬は、デート一回。

その後も何度か模擬戦を行うのだが、結果は辛勝と惜敗が半々。自分が勝てばデートに付き合って貰う。リンが勝てば食事を奢る。そついう名目で何度か一緒に出かける内に、段々と打ち解けてくれる彼女が可愛かった。

そして、十年。すれ違いも多いが、言外で通じ合える事も多くなった。自分の背中を託せる人物は彼女しかいないだろうし、彼女の背中を護るのは自分しかない。そんな自負がある。

もうもうと立ち込める土煙に向かつて、ニュートロンビームを撃ち込む。魔装機とやらの足の装甲を抉り取り、撃ち出したそれは地面に着弾した。

「当たったらどうしてくれるつもりだ。」

リンから、苦情の通信が入った。イルムは唇の端を歪めて見せる。

「当たる気なんか、無いくせに。」

「フン、当然だろう。」

軽く目配せし合い、同時に笑う。

ゲシュペンストを走らせ、土煙に突っ込む。

目指すは、愛しい愛しい彼女の背中。

「さあ、死にたいヤツからかかってきな！」

後ろから衝撃があった。

見れば、量産型のギルドーラが銃口をこちらに向けている。

「あら、イキナリ後ろからだなんて、大胆なボウヤねえ。」

振り向いた赤い悪魔に恐怖したのか、二度、三度と狙いの定まらない射撃をしてくるギルドーラに、サフィーネは嗤った。

「ダメよ、ボウヤ。そんなんじゃ、私はイかせられなくてよ！」

コントロールクリスタルからの意志を受け、ウィーゾルが走る。ロズカッターと名付けられた、鞭状のそれを打ち振るう。まずは左足。片足を切り落とされ、バランスを崩した機体の、更に右足を打

ち据える。

無様に天を仰ぐギルドーラの頭を踏みつけた。

「おーほほほー！！ほら、私の靴をお舐め！」女王様、お許し下さい”って言ってご覧なさいな！！”

踏みつける足に、力を込める。金属が拉げる音がした。

脱出装置が作動して、乗っていた兵士が逃げ出すのが分かった。

「・・・何よ、もうお仕舞い？・・・つまらないの。」

興醒めだとばかりに、足の下にある金属の塊を蹴り飛ばす。

宙を舞うその塊が、地面に落ちる瞬間に真正面からレールガンが跳んで来る。咄嗟に取った回避行動のお陰で、クリーンヒットこそ免れた物の、肩の装甲を持っていたいかれた。

「ああん！いいわぁ・・・。そうよ、そうでなくっちゃ！さあ、もっと楽しませてえ！！”

悦びに打ち震えながら、ウィーゾルは更なる獲物を求めて舞った。

「まさか、貴女と共に戦場へ赴く事になるうとは、思いもしませんでしたわね、ノルス。」

目の前の戦闘をのんびりと眺めながら、モニカは呟いた。応える様に、コントロールクリスタルが淡く光る。

「ねえ、聞いて下さる、ノルス？」

こちらの存在に気付いたレンファがガトリング・ガンを構えるのが見えた。

「私、決めましたの。」

撃ち出される弾を、ノルスは踊る様なステップでかわす。

「今まで、私は常に護られる立場におられましたわ。それが当然と思われてましたの。」

ノルスの、澄んだ泉の水を思わせる、エメラルドグリーンの装甲が輝いた。胸部にあしらわれた宝石に光が集まり、そこからまた両手に集約する。

「・・・でも、もう護られるのなんてご免被りたいのです。王子様が助けに来てくれるまで、お城で黙って待つてゐるなんて、もう出来ませんの。」

突き出したその両手から、光が迸る。それは害意を具現化した魔力。害意が圧力となり、レンファの装甲を軋ませる。

「あの方の、シユウ様のお傍に居る為でしたら、どんな事でも致すつもりが御座いますわ。」

圧力の前にその歩みを阻まれるレンファと距離を縮める。どこか優雅で、それでも確かな凶暴性を内に秘めて、ノルスがその爪を振るう。

「・・・例え、この手を汚す事になろうとも！」

オリハルコニウムの爪が、レンファの装甲を剥ぎ、骨組みを軋ませ、ケーブルを引き裂く。剥き出しになったその内部に、モニカは自身の魔力を物理的な力に換えて叩き込む。狙うは心臓部、永久機関。手応えを感じて、モニカは機体を引く。見計らった様なタイミングで、レンファの肢体は弾け飛んだ。

「・・・貴女にも、一緒に汚れて頂く事になれますわ。地獄まで、ご一緒下さいまし。」

自らの手で引き裂いた初めての犠牲者を、モニカはどこか冷たい眼で見つめていた。

シユウが戻りついた時には、もう随分の数の魔装機が、その身を地面に横たえていた。

「これは・・・お見事ですな。」

シユウの言葉にモニカとサフィーネは上機嫌だった。

リンは改良したブラックホールエンジンの調子に満足そうだったし、そんな彼女の様子にイルムも満更ではなさそうだ。

「シユウ様、テリウスはいかがであられましたか？」

「権力争いに巻き込まれて随分と苦労しているみたいでしたよ。」

以前会った時に比べ、やさぐれ具合に磨きがかかっていた従兄弟を思い出して、シュウは少し笑った。

「・・・では、テリウス王子は同行しなかったのですか!？」

サフィーネが信じられないと言った感じの声を上げる。

「テリウスったら、相変わらずなんだから・・・」

溜息と共に、異母弟への不満を漏らすモニカ。

二人共、テリウスがシュウに誘われた事を羨んでいるのだ。

「良いですよ。彼が自主的に動かなければ意味がないのですから。」

そんな二人を宥める様に、シュウが笑う。

「それに、手応えはありました。彼は動きますよ。」

シュウが確信している以上、二人に異論がある筈もなく、基より異論の挟みよりの無い二人を加えて、五機はグナインへと帰還して行った。

其々の戦場を後にして。

説着曹操 曹操就到

背後を振り返り降り帰り、テリウスはガディフォールを駆った。少しでも遠くへ、一歩でも前へ。

未だ慣れない魔装機の操縦。プラーナの配分方法も、機体の詳しいスペックも分からない。

それでも、前へ。遠くへ。

彼の許へ。

夜も明け切らない仄暗い空を、一機の鷹が疾走する。

喘ぎ声が聞こえた。自分の声だ。

疲弊していくのが分かる。だが、それがどうしたと言うのか。今は、少しでも、自分を閉じ込めたあの籠から離れたかった。

グナインの食堂で、五人は朝食後のコーヒーを楽しんでいた。

いつも食後はモニカの紅茶なのだが、今日はシュウの要望でコーヒーが用意されている。

生豆から丁寧に焙煎され、挽き立てを丹念にドリップしたそれは、紅茶に劣らぬ芳醇な香りがある。

普段余りコーヒーを飲まないモニカは、サフィーネに細々とした事を聞いていた。

「皮がクセモノなのよ。焙煎する段階で、丁寧に取らなきゃ良い香りは出せないのよ。」

サフィーネは、ご自慢の一杯が皆の賞賛を浴びた為か、ご満悦だった。

全員が二杯目に取り掛かった辺りで、モニカが口を開く。

「そつえば、シュウ様。何故テリウスをお誘いになられましたの？あの子が何かの役に立つとも思えないのですが……。」

さらりと弟を罵倒する姉。彼女の記憶に残る彼は、セニアにからかわれ、兄に泣きついてる姿ばかり。とても想い人の力になれるとは思えない。

その姿を知っているシュウは、コーヒーを飲み干し、少し笑った。

「周囲の環境と、本人の思い込みの所為もあるでしょうね。彼のあの性格は。」

「そんなに酷い性格なのか？」

余りの言われ様にリンが興味本位で口を挟む。

「・・・なんと言われましようか、自分から何かをしよう、という気持ちが無い子なのですわ。無気力というか・・・。」

「おやおや、それはいけないな。男は自分から積極的に行かないとね、リンちゃん。」

「お前と足して2で割ってやれ。」

下らない話題を肴に皆でコーヒーを啜る。

BGM代わりにつけていたクリスタルヴィジョンが“緊急速報”の四文字を映し出した。

次いで映し出された映像は、王都ラングランにある祭儀用の神殿。シュウの視線が、クリスタルヴィジョンに向く。つられて全員がそちらを見る格好になった。

『・・・日に予定されておりましたテリウス殿下の戴冠式が、予定を早めまして、本日行われる事になりました・・・。』

原稿を読み上げるアナウンサーの言葉に、シュウは疑問符を浮かべる。

「・・・妙ですね・・・。何故今更戴冠式を、しかもこんな時間からわざわざ早めて行う必要があるのでしょうか？」

注意深く映像を見る。祭儀用の神殿に設えられた祭壇。その前に立つ大神官とテリウス。貴賓席には、カークスと遠戚達。

「・・・フェイルロードが出席していませんね・・・。」

「え？お兄様がお出席なされていませんか？」

「変ねえ。ラングラン国民に正当性を訴えかけるなら、フェイルが

出席した方が好都合でしょうに・・・。」

それぞれが不審がる目の前で、クリスタルヴィジョンは淡々と映像を送り出し続ける。

『・・・厳かな雰囲気の中、今、ラングラン王国第288代国王、テリウスⅡグランⅡビルセイア様の戴冠の儀が行われようとしています。大神官ザボト卿の即位宣言が、しじまの中に木霊しています』アナウンサーが決まりきった文句を吐き出し、映像は誇張された幻想的な景色をこれ見よがしに流す。

『……において、精霊の祝福とともにあり、そなたが母、ナタリアⅡゾラムⅡラクシュミーとそなたが父、アルザールⅡグランⅡビルセイアの……』

大神官の前に傳くテリウスに、違和感を覚えたのはその瞬間だった。

「・・・ゾラム・・・？」

「シユウ様、どうなされました？」

怪訝そうな顔をするモニカに、シユウは確認する様に問う。

「モニカ、昔、テリウスが大暴れた時の事を覚えていますか？」

「ええ、覚えておられますわ。あの子があんなに怒った事など、後にも先にもあれだけでしたもの・・・。あら・・・？」

そこまで言つて、モニカも気付いたのか眉根を寄せた。

兄も弟も、あの時の原因については詳しく話そうとはしなかった。

だからこそ、モニカは不思議に思い、独自に調べたのだ。おそらく、シユウもそうなのだろう。

「その時の原因。誰しもが口を噤んだその話題は、テリウスの母親に関して・・・でしたね？」

「そう・・・ですわ。あの子、母親を侮辱する方に対して決して許そうとはなさらない子でした。あの時も・・・母親を馬鹿にされたから・・・でしたわ。」

「シユウ様、どういう事ですか？」

サフィーネが割って入る。事情を知らない他の三人は話題に着いて行けずにいた。

「・・・先程、大神官がテリウスの母親をナタリア「ゾラム」ラクシュミーと言いましたね？」

「え、ええ・・・。」

「ラングランに於いては、ミドルネームがその人物の階級を表します。“ゾラム”が表すのは女貴族です。しかし、テリウスの母親はノーランザー族の出。出自だけ見れば立派な王族なのですよ。」

シュウの言葉を継ぐようにモニカが喋り出す。

「テリウスはナタリア様がお亡くなりになるまでお二人で過ごされました。父親を知らずに育った彼の、唯一の誇りは母親が王族の出身という事でしたわ。・・・でも、ノーランザは“呪われた一族”と噂され、事情を知る者以外は王族と認めたがりませんの。」

モニカが哀しそうに瞳を伏せる。

「事情を知り、母の出自に誇りを持っている息子が、それを否定する呼び名を許す筈が無い・・・というわけか。」

リンが呟き、シュウとモニカが頷く。

「なるほどね・・・。っつゝ事はだ、あそこに居る王子様はニセモノな可能性が高いわけだ。」

イルムの言葉を肯定する様に、チカが甲高い声を上げながら飛び込んで来た。

「ニユース、ニユース！いやあ、噂をすればなんとやら！中国風に言えば“ツアオツアオ”の話をするとツアオツアオがやって来る”ですね！今朝、テリウス王子が出奔したそうですよー！！」

チカの言葉を聞き終わる前に、シュウは席を立った。

「動きましたね。今彼は何処ですか？」

足早に歩きながら続きを促す。他の四人も、慌てて彼の後を追った。

「ブルクセン州だそうですよ！」

「では、向かいましょう。皆さん、機体のチェックをお願いします。」

その言葉が合図だったように、各々が持ち場に散って行く。

「チカ、グランゾンに火を入れておいて下さい。」

自身は操舵室に向かいながら、使い魔に指示を出す。

「いえっさー！ところで、ご主人様、お聞きしたい事があるんですが。」

「何でしょう？」

真面目な声のチカに、シュウも真顔で応える。

「ツアオツアオって・・・何ですか？」

・・・・・・・・・・。

暫し、二人（？）の間を沈黙が支配したのだった。

産声

見つかった。いや、自分にしてはよく逃げた方か。

でも、大人しく籠の中に戻るつもりも無い。

目の前に迫る三機のガディフォールにレールガンの照準を合わせた。

「く、来るな！」

声が震えているのが分かる。疲労か、それとも恐怖か。

「お止めなさい、テリウス殿下！」

隊長機から鋭い声が飛ぶ。ラテルだ。

後ろの二機はミラと、見た事の無い禿頭の男。

ラテル機がゆっくりと歩み寄って来る。

「来るなって言うてるだろ！！！」

悲鳴に近い声を上げて、テリウスはトリガーを引く。撃ち出されたレールガンはガディフォールを掠めもせず虚空に消えた。

「テリウス殿下！・・・それ以上抵抗なさるのでしたら、我々も非常手段を取ります。」

幾分低い声で囁かれたそれは決して脅迫だけではない響きを含んでいる。

「こ、こつちに来るな！！！」

怯えた様に一歩後ずさるテリウスに、ラテルはやれやれと溜息を吐いた。そして、禿頭の男に耳打ちする。

「・・・レスリー、影縛りの用意はできたか？」

レスリーと呼ばれた男は陰険そうに唇を歪める。

「あと二分、頂けますか。」

「一分だ。」

言い放ってラテルは更にテリウスとの距離を詰めた。

「そ、それ以上近付くなっ！ば、ばくは本気だぞ！！！」

震える手でレールガンを構え直す。定まらない照準を、合わせようと焦れば焦る程、手の震えは増すばかりだ。

「いいですか、テリウス殿下。我らは殿下を無事連れて帰ることを望んでいるのです。命令では生死は問わぬといわれていますが・・・無論、我らはそのようなことは望みません。」

軽い衝撃がテリウスを襲う。“生死を問わず”。カークスはそう言ったのか。信賴していた訳ではないが、こつもあつさり切り捨てられるのはショックだった。

「しかし、これ以上ダダをこねられるようでしたら・・・。」

そこまでラテルが言った所で、リーダーを見ていたミラが声を上げた。

「アクロス少佐！フェイルロード軍です！！」

ミラの報告に、ラテルは露骨に舌打ちをする。

「・・・来たか。思ったより早かったな。ライオネス少尉、本陣に救援を呼べ！」

ラテルからの指示を受け、ミラが慌てて本陣と連絡を取り始める。

状況が飲み込めないテリウスは、急に慌しくなった三人の様子を見て動揺していた。

「なんだ？なにが・・・？」

何が起ったのか。理解するのに少しかかった。モニターが眩い光に包まれたと思ったら、次の瞬間には、身体が自由が利かなくなっていた。何かで縛られたかの様に。

卑屈そうな笑い声が聞こえて来る。

「・・・影縛り、完了しました。・・・如何ですか、テリウス殿下。例え殿下でも、この術は破れますまい。大人しくなさつて下さい。」

癪に障る笑い声が、コクピットの中に木霊する。

テリウスは、黙って奥歯を噛み締めるしか出来なかった。

「貴方々はカークス軍の部隊ですね。私はフェイルロード軍のテュッティ＝ノールバックと申します。」

叫んだ。

無我夢中で叫んだ。

死にたくない。

そう思った。

何かが、テリウスの中で弾けた。

「・・・ほう。」

グランゾンの中で一人様子を見守っていたシュウは小さく驚嘆の声を漏らした。

いや、彼だけではなく、その場にいたほぼ全ての人間がその出来事に驚きを示していた。

特に驚いたのはレスリーだ。

「バ・・・バカな・・・。私の・・・私の術を破るなど・・・。」

自身が配した魔法陣の上から自力で逃げ出したテリウスを、まるでバケモノでも見るような目で、レスリーは見つめていた。

レスリー程では無いが、ラテルもミラも、そしてマサキとテュツイでさえ、その光景を信じられないといった様子で見ている。

そんな彼らに向かって、テリウスは叫んだ。

「ぼくは！」

肩で息をしながら、言葉も切れ切れに、それでも彼は叫んだ。

「ぼくは、もう嫌だ！！他人の言いなりに動くのなんて、もう嫌だ！！」

それは、十九年目にして上げた彼の産声。

母が死んで以来、初めて口にした自分の意志。

シュウは笑った。

彼は動いた。

自分の意志で。

ならば、応えてやらねばならない。

仲間以待機を命じ、シュウは自身の隠れ蓑を取り去った。

「その力、私がお預かりしましょう。」

突如その場に現れた濃紺の機体に、全員の視線が集まった。最初に反応を示したのはやはりマサキだった。

「シュウ!?・・・手前エ、いつの間に!？」

相変わらずな言葉しか言わないマサキを一瞥し、シュウはテリウスに視線を向けた。その視線に気付いたのか、テリウスが弱々しく向き直る。

「ク・・・クリストフ・・・。」

テリウスの言葉には何処か喜色が含まれていた。来てくれたのか。そんな感じだった。

「テリウス、貴方の力、見せて頂きましたよ。それだけの力があれば、何も脅える事などないですよ。」

優しく微笑む従兄弟。自分に諭してくれたあの時の様に。

そつとその赤い手が差し出される。

「さあ、私の元にお出でなさい。」

グランゾンはその以上動かない。ただそこでテリウスを待っていた。

「ぼ、ぼくが?ぼくなんかの力が・・・?」

差し出された手。そのの、なんと魅力的な事が。

「ええ、そうですよ、テリウス。貴方のその力が、私には必要なのです。」

必要。一度拒んだ自分を、彼はまだ必要だと言っている。

「ぼくは・・・。」

「テリウス、貴方の意志が一番大事です。無理強いはいしません。」

手を差し出す以上の事を、彼はしようとしなかった。そして、それ以上誘おうともしていない。

ただ黙って自分の答えを待っている。

「・・・ぼくは、ぼくは今まで、いつも誰かの陰に隠れていたような気がする・・・。」

自分で決めず、自分で動かず、自分の意志をいつも隠していた。その結果が、今の自分なのだ。だから。だけど。

彼は顔を上げた。憔悴しきっていた筈のその目には生氣が漲っている。

「・・・クリストフ、ぼくを、ぼくを連れてつてくれ!!」

手を伸ばす。ガディフォールの、爪を模した指が、グランゾンの赤い掌に触れようとする。

「だああああああ！待て待て待て!!」

神妙な空気を破ったのはやっぱりマサキだ。

「手前エ！何勝手に話を進めてやがるんだ！テリウス！お前もお前だ！！簡単に騙されやがって!!」

「君にぼくの何が分かる!?」

「!?!」

予期しなかった答えに、マサキは一瞬たじろいだ。

「誰もぼくを見ようとしなかった！誰もぼくを人間としてなんか扱ってくれなかった!!君は、ぼくを必要としてくれたかい!?違うだろ！誰も“テリウス”なんて必要としてくれなかった!!」

今まで隠して来たであろう感情を、全てぶちまけるかのようなテリウスの叫び。

全てに決別をする様に背を向け、テリウスは今度こそ、しっかりとシュウの手を取った。

「クリストフ、ぼくを連れてつて。」

微塵も迷いを含まないその声に、シュウは優しく応える。

「分かりました、おいでなさい。」

赤い手が、金色の爪を握る。

「テリウス!!」

マサキの声が聞こえた。

「ぼくは、クリストフと一緒に行く。もう決めたんだ、邪魔しないでくれ、マサキ!!」

振り向こうともしないテリウスに、マサキは舌を打った。

「さて、そうと決まればこんな所にいつまでもいる必要はありませんね。行きましよう、テリウス。」

シューが言い終わると同時に、突風がその場所を突き抜けた。砂埃が舞い、リーダーすらもノイズが支配する。

「・・・それでは皆さん、御機嫌よう。」

砂埃が治まった後には、もうグランゾンもガディフォルも存在していなかった。

姉弟

這々の体でグナインに辿り着いたテリウスを待っていたのは、異母姉からの強烈なビンタだった。

気持ち良い程の乾いた音が格納庫に響く。

「モ、モニカ姉さん！？何でここに？」

痛む頬を押さえ、テリウスは目を瞬かせた。

「貴方には関係ございませんでしょう、テリウス。」

不機嫌そうに言い放たれた言葉。姉の変わりように目を見張る間もなく、テリウスは胸倉を掴まれた。

「大体、何よ、貴方、シユウ様に誘われていながら、随分グズグズなさってたらしいじゃありませんこと！男ならシャキつとなさいな！！」

「・・・嫉妬ですね、分かります。」

「お、落ち着いてくれよ、姉さん。シユウって誰さ！？」

「まあ、誘われておきながら！もう、本当に呆れましてよ！」

「・・・ん？ああ、クリストフの地上での名前か。」

文脈から察して納得したのも束の間。

「その名はお止めなさい！！」

鬼の様な形相で怒られた。テリウスはただただぼかんとするばかり。

「シユウ様は、もうその名を棄てておいでにおられますのよ！」

「・・・いや、姉さん、文法が変だよ。」

それだけ呟くのが精一杯だった。

食事の席で、テリウスは地上の二人に紹介された。

「初めまして、王子様。イルムガルトⅡカザハラだ。」

「リンⅡマオだ。」

人懐っこそうな男と、正反対な女。

「・・・テリウスⅡグランビルセイアだよ。よろしく。」

簡単な自己紹介の後に、サフィーネが料理を運んでくる。

「ハイハイ、ご挨拶も良いケド、ちよつと手伝ってくれない？」

「サフィーネ、私が手伝おう。」

リンが笑う。こうして見ると最初に受けた冷たそうな印象が嘘のようだ。人見知りなのだろうか。

「可愛いだろ？」

テリウスの考えを読んだかのようなタイミングで、イルムが囁いた。

「ん、まあ、キレイな人だとは思うけど・・・。」

「俺のモンだぜ。手を出してくれるなよ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべるイルムに、テリウスは何だか親近感を覚えた。何とも人間臭い人物だ。そう思った。

「何の話をしている？」

サラダの入った大皿を抱えながら、リンが首を傾げている。イルムはリンから皿を受け取ると、意味ありげに笑って見せた。

「なあに、男同士の込み入った話さ。」

「馬鹿言っていないで、お前も手伝え。」

「はいはい。」

冗談を一蹴され、イルムが肩を竦める。

「サフィーネちゃん、今日のメインディッシュは何ー？」

厨房の奥で、エプロンを着けたサフィーネが顔を出す。

「ビーフシチューよ。冷めない内に運んでもらえる？」

「いえっさー。」

テリウスにウインク一つして、イルムも厨房の奥へ消えて行った。

「それで、テリウス王子が何の役に立つんですの？」

食事のテーブルを整え、全員が席に着いた所でサフィーネが切り出した。

「魔力ですよ。」

静かにシチューを口に運んでいたシュウが答える。

「魔力？ぼくのかい？ウソだろ、ぼくの魔力なんて、君はフェイル兄さんに比べたら、大した事ないよ。」

シュウの言葉に驚きながら、食事の手を止めようとしなないテリウス。手近にあったバケットを手で千切って口に放り込む。

「そうですか？・・・私は兎も角として、フェイルロードなどよりはよっぽど素質は高いと思います。」

「本当に、ぼくが？」

「ええ、でも、今のままでは駄目ですね。もう少し、修練を積まないと。」

食事の手が止まっているシュウに、モニカがナイフでカットしたバケットを差し出した。礼を言って、パンを受け取る。一口大のそれをシチューに浸して口に運んだ。

丁寧咀嚼して、飲み込む。

「まあ、何にせよ、今日は疲れたでしょうから、ゆっくりと休んで下さい。後でモニカに部屋を案内させましょう。」

「うふふ、一番遠い部屋をご用意いたしましたよ、テリウス。」

冗談半分に微笑む姉に、テリウスは溜息を吐いた。

「カンベンしてくれよ、姉さん・・・。」

そんな姉弟の遣り取りを、全員笑顔で見守っていた。

こんな賑やかな食卓はいつ以来だろう。

ふと目を伏せたテリウスの脳裏に、母親の笑顔が浮かんで消えた。

コーヒーとオムレッツ

大きな欠伸をしながら、テリウスは廊下を歩いていた。

「よっ、お早う王子様。」

後ろから声がかかる。

「その呼び方、止めてくれよ。それが嫌で飛び出して来たんだから。」

「おお、そりゃあ悪かった、テリウス。」

豪快に笑いながら、イルムはテリウスの横に並ぶ。

食堂の扉を潜ると、既にシュウとリンは指定の席に着いており、コーヒーのマグカップを片手に何やら専門用語が飛び交う話をしていた。

「おはようさん。」

壁際に置いてあるコーヒーメーカーから自分のマグにコーヒーを注ぎ、イルムは二人の話に混じっていく。

「おや、お早う御座います。」

「お早う。」

テリウスは少し迷った後、コーヒーメーカーを指して聞いた。

「これ、飲んで良いの？」

「ええ、ご自由にどうぞ。カップは・・・厨房の棚に仕舞ってあるはずですよ。持ってきてみましょうか？」

「んにゃ、自分で取りに行くよ。」

三人の難解な話を背中に、テリウスは厨房へと入って行く。

「あら、お早う御座いますわ、テリウス。」

「グッモーニン、テリウス。女の聖域に何か御用？」

白いエプロンを着けたモニカが、顔を出す。その隣には同じくエプロンを着けたサフィーネ。

「おはよ、姉さん、サフィーネ。コーヒーカップってどこ？」

「そこの棚の三番目に入っていたと思われれますわ。」

ボウルを抱えながら、冷蔵庫横の棚を指差すモニカ。

「それで、この後どうされればよろしいのでしょうか、サフィーネ？」
モニカの抱えるボウルには割り入れた卵。そこにサフィーネが計量カップに入った牛乳と溶かしたバターを加える。

「んで、ざっとで良いから混ぜて頂戴。」

「分かりましたわ。」

「・・・何、姉さん、料理教わってるの？」

棚を漁りながら、テリウスが呟く。

「ええ、そうよ。立派なお嫁さんになれるには、不可欠でありますでしょう？」

「・・・その前に、文法の勉強した方が良いと思うけど。」

お目当てのカップを見つける。

「あ、塩一つまみ入れると卵がほぐれやすいわよ。で、あんまり長い時間混ぜちゃダメ。コシが無くなっちゃうから。」

見かけに寄らず料理に詳しいサフィーネと、眉間に皺を寄せ一生懸命に卵を混ぜるモニカ。そんな二人の姿をなんだか微笑ましく思いながら、テリウスはカップ片手に厨房を後にする。朝食はもう少しかかりそうだ。

カップにコーヒーを注ぎ入れ、テリウスも席に着く。ミルクとシュガーポットが載ったトレイを引き寄せ、それぞれを適当にコーヒーの中に入れた。

「テリウス。」

話題に区切りがついたのか、こちらを見ながらシュウが呼びかけてくる。

「ん、何？」

ちよっと砂糖を入れ過ぎたのか、甘ったるくなったコーヒーを啜りながら応えた。

「朝食が終わったら、私の部屋まで来て下さい。」

シュウの意味ありげな笑顔に、何か不穏なモノを感じながらもテリウスは頷く。

「お待たされいたしましたわ。」

チグハグな言葉と共に現れたモニカの手には、ちよつと不恰好なオムレツを載せたお皿が握られていた。

特訓

「あー、もう！何でこんな事になってるんだよ！！」

見慣れぬ森の中を全力疾走しながら、テリウスは声を限りに叫んだ。返ってくるのは空しい木霊と自身の足音のみ。

人はおるか、動物の気配すらしない。

ある気配といえば、唯一つ。

ちらり、と後ろを見る。

小さな赤い光が四つ、その四つを目玉だとも言いたそうな位置に貼り付けた土塊が、音も無くテリウスの後を追いかけていた。

それはデモンゴーレムと呼ばれる召喚物。

普通のデモンゴーレムと違うのは、どうやら実体が無いのだという事。

ただ、気配だけは酷く濃厚で、間違いなくそれはそこに存在するのだと、テリウスに訴えかけてくる。

そして、これに捕まってはいけないという事も。

「ちつくしょー！どーしろって言うんだよー！！」

叫ぶテリウスの脳裏には、「頑張つて下さいね。」と、爽やかな笑顔で彼の背中を押したシュウの姿が浮かんでいた。

時を遡る事一時間。

嫌な予感を引きずりながらも、テリウスは言われた通りにシュウの部屋を訪れた。

ノックを二回。中から返事がある。

「開いていますよ、入って下さい。」

「・・・邪魔するよ。」

部屋に足を踏み入れた瞬間、テリウスの悪い予感はいよいよ強くなる。

「どうしました、テリウス？ 顔色が優れませんよ。」

テリウスの心情を読んだかのように、シュウが悪戯っぽく笑う。

「・・・いや、君が部屋に來いって言うから、嫌な予感がしたんだよね・・・。」

テリウスの視線は一点に注がれていた。

部屋の中央。

広げられた羊皮紙の上に金色で描かれた魔方陣。 焚き込められた香は龍涎香。

「・・・シュウ、まさかとは思うけど・・・特訓、とか・・・？」

「そのとおりっ！！」

恐る恐るの問いに答えたのはシュウではなく、チカ。 どっから出てきたんだ、コイツは。

「テリウス様、貴方はですねえ魔術の素質はあるけど、ぜんっぜん磨いてませんか？ 力不足なのですよねー、ハッキリ言っちゃうと。 つつーワケで、こりやもうお約束！ 特訓！ でございますよ！ とつくーん！！！」

「ご心配無く、テリウス。 貴方の為に特別プログラムを用意しましたから。・・・絶対にサボれないプログラムを、ね。」

とりあえず、笑顔が怖いと感じたのは始めてだ、とだけ思った。 こんなに爽やかな笑顔なのに・・・。

「え、ちょ、ちよつと待つてくれよ！！！」

テリウスの静止の声など聞かず、シュウは、とん、と彼の背を押した。

「それでは、頑張つて下さいね。」

「ちよつと、お、おい、シュウ！」

振り向くと、すでにシュウの姿は無く、部屋だった筈のそこは木々が生い茂るばかりの森になっていた。

「ウソだろ！？ カンベンしてくれよ・・・。」

呆然と立ち尽くす彼の目の前に、突然気配が降って湧く。 凶悪な光を宿した四つの目玉。

咄嗟に逃げ出すテリウス。

「あー、もう！何でこんな事になってるんだよ！！」
至、現在。

「うわっ！！」

木の根に躓き、派手に転んだ。

見上げたテリウスの視線に、デモンゴーレムの巨大な掌が迫る。
その掌がテリウスに触れようとした瞬間だった。

「・・・まだまだですねえ。」

呆れた様な声。

「あ、あれ？」

慌てて辺りを見回す。そこは森ではなく、シユウの部屋。

「あらあら、テリウス様つてば、ゲームオーバーですか？情けないなー。」

チ力が嘲笑うようにテリウスの周りを飛び回る。

「い、いや、アレ無理だって！！あんなのどーすりやいいのさ！？」

「デモンゴーレムがいたでしょう？」

「・・・そりゃ、いたけど・・・。」

「倒そうとは思わなかったんですか？」

「思わないよ！！」

シユウは深々と溜息を吐く。

「・・・やれやれ、もう少し続けないと駄目ですね。」

「げっ、まだやるの！？」

「今日は結構ですよ。また明日、同じ時間に来て下さい。」

微笑むシユウに、テリウスはがつくりと肩を落とす。

「・・・もう、やだよ・・・。」

搾り出すように呟いた言葉を、しかし、聞き入れて貰えそうにはなかった。

喜劇にしかない悲劇

今日も今日とてシユウの特訓を受ける為、テリウスは廊下を歩いていた。

しよくれた様な背中をいきなり誰かに叩かれる。

「痛っ！！」

振り向くと、書類の束と小さな紙袋を抱えたサフィーネが小さく舌を出していた。

「はい、テリウス。これからまた特訓？」

「・・・不本意ながら、ね。」

「あらあら、疲れた顔しちゃって。」

からかい半分に笑うサフィーネを軽く睨み付け、テリウスは溜息を吐く。

「・・・そりゃあ、疲れるに決まってるだろう。」

「ダメねえ。そんな事で疲れてちゃ、いざって時に女を満足させられなくてよ？」

「・・・何で君はすぐそっちの方向に話を持っていくかな・・・。」

「いつか、アンタが好い男になったら相手したげるわよ。」

「・・・遠慮しとくよ・・・。」

「ま、失礼ね。」

言いながら、サフィーネは目的地である扉を軽く叩く。

いつもと同じ返事があり、いつもと同じ挨拶をしながら扉を潜る。

「おや、今日は二人一緒なのですね。」

珍しい同時の来訪に、シユウは好ましそくに微笑む。

「ええ、そこで会いましたの。これからまた特訓だって不貞腐れながら歩いてましたわ。」

持っていた書類の束をシユウに手渡し、部屋の隅にあるコーヒーマーカールに向かうサフィーネ。

「誰が不貞腐れてただよ。ちよっと疲れてるだけだよ、全く。」

テリウスの反論も特に意に介さず、小さな紙袋から今朝煎ったばかりの豆を出しミルで挽く。この瞬間の香りがサフィーネの一番のお気に入りだった。

「ま、頑張つて頂戴。今晚は精が付きそうなメニューにしてあげるから。」

「では、テリウス、用意は良いですか？始めますよ。」

魔方陣の前に立ち、シュウが呪文を唱え始める。

面倒臭そうに魔方陣の中央に立ったテリウスが、思い出した様に振り向いた。

「あ、サフィーネ。」

「なあに、テリウス？」

「夕飯は唐揚げが良いな。」

「はいはい、分かったわよ。」

サフィーネが返事をするのと、テリウスの姿が掻き消えたのはほぼ同時だった。

それを見届けてから、サフィーネは口を開く。

「・・・シュウ様、シュテドニアスがカークス・フェイル連合軍に敗れ、撤退しているとの情報が・・・。」

「そうですね・・・思ったよりも脆かったですね。」

「どうなさいますか？」

サフィーネから受け取った書類の束に目を通す。

テリウスの出奔が表沙汰になり、即位がうやむやになった事、その事により、国民はもとより兵士達にまでカークスに対する不信感が募っている事。そして、フェイルロードの側にも不審な動きがある事などが書かれていた。

「計画に変更はありません。それ程慌てずとも、しばらく混乱が続きますよ。」

「しかし、カークス軍とフェイル軍とでは戦力に違いがあり過ぎませんか？このままですと、あっさりフェイル軍が勝って終わってしまいそうですが。」

「先日、ルオゾールから連絡がありまして、カークスと密かに会って来たそうです。戦力の差はカークスも承知している様で、力を欲していたそうですよ。」

そこまで言って、シュウの脳裏に一人の人物が浮かぶ。サイフィスが選んだ、風の寵児。

「・・・それに、マサキ・・・でしたか、彼が、あのフェイルロードにいつまでも従っているとも思えません。」

シュウの言葉に、さも意外そうな顔をするサフィーネ。

「どうしてですか？あのボウヤがフェイルの敵になるとは考え難いですが・・・。」

「フェイルロードの正義とマサキの正義は違うのですよ。」

その結末を思い浮かべて、シュウは瞳を伏せる。

フェイルロードはきっかけがあればすぐにでも動くだろう。それを、おそらくマサキは許しはしない筈だ。袂を分かった両者の衝突はそうそう遅くはなるまい。

カークスも、道を誤った。力に傾倒した彼が辿り着くのは破滅だ。

それも、遠くはない気がする。

様々な事が収束しつつある。

全てに用意された結末は、おそらく、喜劇にしかない悲劇。皆が皆、望んで破滅に突き進む。

シュウのデスクに、淹れたてのコーヒーが置かれる。

「・・・全てが収束する前に、こちらもケリを付けておきたい所ですね。」

落としたばかりのコーヒーは程好く澄んで、その表面に自身の顔を映し出していた。

この表情が表す感情は何なのだろう？

そんな事を考えながら、シュウはそっとコーヒーに口を付けた。

この実体の無いデモンゴーレムとの戦いは、一体何回目になるのだろうか。

じりじりと相手の間合いを計りながらテリウスは思った。

一度目は、何もさせて貰えないまま、無様な負けを被った。

二度目は、何回か相手の攻撃を避ける事ができた。

三度目は、相手の攻撃にパターンらしき物がある事に気付き始めた。その後、何度か戦う内に、攻撃パターンは読めてきた。

しかし、攻撃をかわした所で、確たる攻撃手段を持たないテリウスには勝ち目など無いに等しい。

結局は、いつも体力が尽きてゲームオーバー（チ力談）になるのだった。

「一つ、ヒントを差し上げましょう。」

シウウの言葉を思い出す。

「貴方も魔術の勉強をしたのであれば、錬金術の基本は覚えていいますね？」

それ位の事なら覚えている。理解、分解、再構築だ。

「あれを倒すのに必要なのは、それだけですよ。」

理解。この実体の無いデモンゴーレムを理解する。

理解するのは分かる。敵を知れ、と言う事だ。

では、分解と再構築は。

何に分解し、何に再構築すれば良いのか。

あれを理解すればそれも分かるのだろうか。

様々な考えを巡らせながら、テリウスはその相手を睨み付けた。

「ごっしゅじんさまー。ホントにテリウス様はあれ、倒せるんですか？」

暇を持て余しているのか、チカが部屋の中を忙しく飛び回りながら疑問を口にする。

「倒せますよ。いえ、倒して貰わなければ困ります。」

差し出された紅茶を簡単な礼を言って受け取る。紅茶に浮かんだ輪切りのオレンジを見て、シュウは口元を綻ばせた。

「シャリマティーですか。良いですね。」

「ええ、昨日お買い物に行かれましたら、お嬢さんが可愛いから、と八百屋のご主人から大層おまけを頂かれました。」

につこりと上機嫌に笑うモニカ。

「お陰で消費するのが大変じゃないの、全く！もつと料理に使えそうな物貰って来なさいよ！」

お手製のオレンジピールとジャムが入ったケーキを不機嫌そうにカットしているのはサフィーネ。

「まあまあ、いーじゃないのサフィーネちゃん。オレンジは美容に良いんだぜ？」

「柚子湯・・・ならぬオレンジ湯、というのも有りかも知れないな。」

ソファに腰掛、紅茶を啜っているイルムとリン。

今、グナインに乗っているほぼ全ての面子が、シュウの部屋に揃っていた。

「・・・皆様・・・ヒマなんですか、ヒマなんですね？」

その様子を見たチカは、誰にとも無く呟く。一人、苦労しているであろうテリウスに思いを馳せながら。

「・・・っこの！」

手近にあった石を掴んで投げつける。

石は放物線を描き、半透明のデモンゴレムを通り過ぎ、地面に落ちた。

「やっぱりダメか・・・。クソッ！どうすりゃ良いのさ！！！」

肩で息をしながらテリウスは悪態を吐く。

理解、分解、再構築。あれを倒すのに必要なのはそれだけですよ。シユウの言葉が頭を過ぎる。

「・・・理解しろって？あんな実体の無いバケモンを・・・。」
言って、気付いた。

辺りを見回す。いつもと変わらない、静かな森。
何一つ変わっていない、いつもの森。

「・・・実体が・・・無い・・・？」

そう、初めから解っていた。解っていた、筈だった。

実体は、無い。存在感だけが、在る。

デモンゴーレムが拳を振り上げるのが見えた。

それがテリウスに向かって振り下ろされる。

しかし、テリウスは微動だにしない。する必要が無い事に、ようやく気付いた。

拳はテリウスをすり抜け、地面に何一つ痕跡を残す事無く、そのまま振り抜かれる。

「・・・何だ、簡単な事じゃないか・・・。」

拍子抜けしたように呟く。

そう、実体が無いのなら、自分に触れられる筈もないのだ。

存在感が余りにも濃厚なので、存在していると思い込んでいた。存在などしていないモノを。

そして、殴られたと思い込み、その部分が傷むと思い込んだ。

結局はどこまでも一人相撲。勝てる筈も無い。そもそも相手がいないのだから。

理解は出来た。後はこれを分解して、再構築するだけだ。

「え、ええつと・・・確か・・・で、『天の理、地の理・・・逆しに行えば逆しに生ず。冥府の怨み・・・煉獄の焰、血をもちて盟す。闇に依りて盟す』・・・そ、それから・・・『アク・サマダ・ビシス・カンダク』！」

自分でもよく覚えていたものだと半ば感心しながら、咒文の詠唱を

終える。

大地がせり上がり、人の様な形を取る。存在感だけが存在していたゴーレムをその中に容れた。

実体を手に入れたゴーレムが、テリウスの前に傳く。凶悪な光を纏っていた四つの目玉は穏やかに輝き、主の命令を待っている。

「め、命令・・・すれば良いんだよね？」

独り言が知らず知らず疑問系になる。命令を下さなければその内また本能に則って暴れただけだ。深呼吸をして、ゆっくりゴーレムに近づく。

「この世界での戒めを解き放ち、元の世界に還れ！」

ぱきん、と何かが割れる様な音がした。

ゴーレムの赤い瞳にひびが入り、やがてぼろぼろと崩れ落ちる。

瞳を失ったそれはただの土塊になり、風に吹かれ大地へと還っていた。

最後の土が砂埃として舞った後、ゴーレムが居た場所には小さなオリハルコニウムの塊が残った。これが正体だった訳か、と納得して拾い上げる。

「頑張りましたね、テリウス。」

労いの言葉に振り向くと、そこはすでにシュウの部屋だった。

モニカが紅茶を持って近づいてくる。

「はい、お疲れ様テリウス。頑張ったのね、見直されましてよ。」

モニカの肩に落ち着いていたチカが紅茶と一緒にテリウスの手に移る。

「ねー、スゴイじゃないですか、テリウス様！！レベル25くらいになったんじゃないですか！？」

チカの言葉に、一瞬、部屋を沈黙が支配した。
レベルって何だ。

チカを除く全員の頭に、同じ疑問が浮かんでいたのだった。

五分の三

その男は、ある日、なんの前触れも無く少年の前に現れた。

「お初にお目にかかります。」そう言つて恭しく頭を垂れるその男に、何故か少年は既視感を覚えた。

何処かで会つた事がある。少年には確信めいたものがあつたが、ついぞそれを思い出す事は叶わなかつた。傷跡が痛む。

「・・・何方でしょうか？」

目一杯の警戒心を込めて、少年が呟く。

「貴方様のお力を見込んで、少々お話が御座いまして・・・。」

男は、しわがれた声で囁く様に言葉を紡ぐ。酷く癪に障る喋り方だつた。

「・・・わざわざ来て頂いて恐縮ですが、今貴方とお話をしている時間はありません。重要な話でしたら、後日然るべき手続きを踏んだ後にいらして下さい。」

突き放す様な、歳不相応の落ち着き払つた冷たい様子に、しかし男は満足そうに唇を歪める。

「おお、左様で御座いましたか。それは、失礼を致しました。では、後日、改めてお伺いさせて頂きます。」

再び深々と頭を下げる男に一瞥すらくれず、少年は踵を返した。

男は愉快そうに笑っている。その声が、酷く不快だつた。

早足で進む少年の背中に、男の声がかかる。随分離れた筈だが、その声は耳元で囁かれている様な感じがした。

「言い忘れておりました、私めの名前は・・・。」

「ルオゾール様から通信ですよ、ご主人様！」

「・・・こちらに回して下さい。」

程なくして、通信機のもニタが切り替わった。

「シュウ様、モニカ王女は巧く連れ出せましたかな？」

瘤に障るしわがれた声が、通信機を通して部屋に響く。

「ええ、こちらは万事滞りなく進んでいますよ。ルオゾール、其方はどうです？」

「・・・思わぬ邪魔が入りましてな、イブンめの始末は失敗致しました。ですが、ソラティス神殿の封印は破壊してまいりましたでな、御心配は無用です。」

邪魔が入るであろう事位、少し考えれば分かりそうなモノだが。そう思ったが、シュウは何も言わなかった。

「・・・これで、五大封印のうち、三つを開放致しました。残るは、ティーバとトロイアの封印のみ・・・。」

間もなく邪神の復活が叶う。その歡喜を隠そうともせず、ルオゾールは口元を歪めた。

「では、私はティーバの封印を解放しましょう。貴方はトロイアに向かつて下さい。こちらが済み次第、合流します。」

「分かりました、御武運を。」

通信が切れる。何故かその通信機を投げ棄てたい衝動に、一瞬駆られた。

「・・・シュウ、どうしたの？」

異変を察したのか、眉根に皺を寄せながらテリウスが問いかけてくる。

「ああ・・・いえ、何でもありませんよ。」

軽く首を振って、忌々しい考えを振り払う。

「・・・それより、何か御用ですかテリウス？」

「ん、いや、そういえば、まだ礼を言って無かったなって思ってた。」

照れくさそうに頭を掻きながら、テリウスは答えた。

「・・・君の特訓は、そりゃ辛かったけど、随分僕に力をくれたよ。」

「・・・その、ありがとう。」

言われ慣れない言葉に少しの戸惑いを見せながら、シュウは少し笑う。

「わざわざ、そんな事を言いに来たのですか・・・私は、貴方の力を利用しようとしているのですよ？」

「でも、僕に力をくれたのは事実さ。だから、ありがとう。」

戸惑いからくるのであるう冷たい言葉を、否定もせずに、テリウスは真っ直ぐに視線をむけた。

「んで、ちよつと聞きたい事があるんだけど、良いかな？」

「・・・何でしょう？」

「僕は何をすれば良いのか、まだ聞いてなかったからさ。」

ああ、とシュウは小さく声を出す。

「ヴォルクルス様の復活を手伝って頂きます。」

テリウスは、やっぱりな、と呟き、特に驚いた様子は見せなかった。

「おや、驚かないのですね。」

「僕だって馬鹿じゃないさ。」

ひよい、と小さく肩を竦める。

「・・・でも、シュウ。そんな事したら僕等だって・・・。」

無事では済まないだろう。そんな気持ちも表情に出てきたのか、テリウスの顔が強張る。

「おや、怖いのですか？」

挑発じみたシュウの言葉に、テリウスはまた肩を竦めた。

「そりゃあ、怖いね。死ぬかもしれないんだろ？・・・でも、何でだろうな・・・ちよつとワクワクするような・・・そんな気もする。」

子供が未知のモノとい相對した時の様な、そんな好奇心。久しく感じる事の無かった高揚感。そんなモノを少なからず感じて、テリウスは困った様に笑う。

世界の命運なぞより、目の前の男が仕出かす事の方が、よっぽどテリウスの興味を掻き立てた。

彼が世界を滅ぼすと言うならば、その世界の最後の一人になって結末を見届けたい。そう思った。

ジハード

こんなものか、と敗走する軍の中で、アハマドⅡハムディは思った。思ったよりもずっと下らない結末だ。

シユテドニアスを追い出したラングランは、早速二つに別れ、対立を始め、初戦でカークス軍が大敗を被った。

アハマド自身は前線に立つことすら儘ならなかった。それ程までに、決着は早かった。

結局、カークスには運と力が足りなかったのだらう。

リユーネとヤンロンは途中でカークスの思想に反発し袂を別った。

だが、それが大きな敗因だとは思わない。

やはり、あの男か。

アハマドの脳裏に浮かんだ一人の男。

誰の言葉を持ってしても、自ら動こうとしなかったテリウスを、動かしてしまったあの男。

シユウⅡシラカワ。

あの男が現れてから、全ての歯車が狂いだした。

まるで、あの男がラ・ギアスをチェス盤にゲームをしている様だ。

誰を相手にかは知らないが。

自分がどちら側の駒なのかは分からないが、どうせなら、最前線に出してもらいたかったと思う。

強い者と戦いたい。

死が隣合う、ギリギリの戦いにこそ生はその存在感を増すのだ。

戦う事こそが、命を賭して戦う事こそが、彼にとっては神に対する祈りだった。

命と言う名の原石を削り、最後の最後に磨き抜かれた宝石となったそれを、神に献上する。

それこそが、アハマドにとってのジハードだった。

グナインは、真の大地を西北西へとひた走っていた。

ティーバ市へは、後おおよそ五十キロメートルといった所だろうか。操舵室ではチカとサフィーネ、そしてシュウが雑談を交わしていた。

「それにしても、シュウ様の言われた通りになりましたわね。カークスとフェイルが、あんなに早く対立するなんて、ちょっと意外でしたわ。」

「しかも、しかも！カークス將軍つてば、初戦でフェイル王子にコテンパンにのされちゃったって話ですよ！！」

「フェイルロード軍の強さは、少し意外でしたね。もう少し、良い勝負になると思ったのですが・・・。」

「カークス側の助っ人が、途中で彼の元を離れたからでしょうか？」初めて聞く情報に、シュウは、ほう、と小さく声を出す。

「ヤンロンと・・・そう、リユーネでしたね。」

地上の兵器と、魔装機神を失ったのは確かに大きいだろうが、それだけがカークスの敗因とは思えなかった。

ルオゾールも、表向きではないとはいえ、協力はしていた筈だし、テリウスの件で士気が下がっていたとはいえ、カークス軍の兵士はフェイルロードのそれよりも精鋭が多かった筈だ。

もっと、何か大きな原因があった筈だ。おそらくは、フェイルロードの側に。

そう、今回、フェイルロードの動きが余りにも早かった。それにカークス側が意表を突かれた部分もあっただろう。

フェイルロードを動かしたきっかけ、それこそがカークスの敗因であり、フェイルロードの勝因である気がした。

操舵室の扉が開く。

ティーセットの乗ったワゴンを押し、モニカが入って来た。

「お疲れ様ですわ、皆さん。何のお話をなさっておられましたの？」

「カークス軍がフェイル軍にあっさり負けちゃいましたーってなお

話をしとりましたですよー!!」

大好きなお菓子の匂いを嗅ぎ取って、チカがワゴンに飛び移る。

「あら、そうでしたの。・・・そう言えば、セニアは今お兄様の所に居られるのでしたわね。お元気になさっているかしら?」

ティーポットからカップに紅茶を注ぎながら、モニカは独り言の様に呟く。

「そうそう、セニアったら、地上の兵器を見て大はしゃぎなさってましたのよ。早速デュラクシールの設計図を書き直さなくっちゃ、なんて。」

「デュラクシール?」

モニカの言葉に、聞き慣れぬ単語を見つけ、シュウは問い返す。

「ええ、セニアは御自分で魔装機的设计をこつそりなさってましたの。それがデュラクシールですわ。十六体の魔装機全てのデータを参考にして、最高の機体にするんだって張り切っておりますのよ。お兄様に使って頂くんだった。」

「・・・なるほど。」

合点がいった。フェイルロードの手に、そのデュラクシールがもたらされた訳だ。

「ティーバ市に戦術クラスのプラーナ反応です、ご主人様!!」

シュウの思考を分断する様に、チカの声が響いた。

「あら、こんな所に?・・・フェイル軍じゃあないわよね?」

サフィーネがリーダーを覗き込み、確認する。

「・・・識別信号、無し、と。シュウ様、如何なさいます?」

「大方、カークス軍の残党でしょう。・・・さて、どうしたものでしょうね。要はこの地の封印さえ解ければ良いのですから、彼らと戦う必要など無いのですが・・・。」

思案顔のシュウに、サフィーネは意気揚々と答える。

「やってしまいましょよ!」

モニカは少し不満そうだ。

「無駄な争いは好まれませんわ。」

騒ぎを聞きつけたのか、いつの間にか操舵室に残りの三人も集まって来ていた。

「何々？何の話してるの？」

チ力が簡単な説明をする。

「・・・私はモニカの意見に賛成だな。」

「俺はどっちでも。」

「僕も姉さんの意見に賛成。面倒臭いし。」

ほぼ全員に反対され、サフィーネは少し機嫌を損ねた様子だった。

「・・・確かに、無駄に戦力を消耗する事もないでしょう。」

「えー、やらないんですの？」

シュウにまで意見を棄却され、思わず不満が口をつく。

「あちらに交戦の意志が無ければ、ですね。一先ず私が出て、話をしてみましよう。万が一に備えて、準備だけはしておいて下さい。」
そう言つて、シュウは踵を返した。

正義と狂気

「グランゾン!?」

突如現れた紫紺の機影に、ラテルは驚きの声を上げた。

すぐ後ろにいるミラも、声こそ上げないものの、驚きを隠せないでいた。

「何故、こんな所に・・・。」

隣では苦虫を噛み潰した様な顔でレスリーが、やはり驚きの声を上げている。

「ほう、グランゾンか。」

魔装機ソルガディのコクピット内で、どこか喜色さえ含んだ声を出したのはアハマド。

グランゾンから、静かな声が響く。

「聞こえますか?こちらに交戦の意志はありません。大人しくここから立ち去りなさい。そうすれば、貴方々に危害は加えません。」

いつぞや又エツト海で聞いたその穏やかな声に、ラテルは少し安心したように息を吐いた。

「そうか・・・ならば、これ以上無駄な争いは避ける事にしよう。」

ラテルの言葉にミラはすぐさま賛同する。

「そうですね。もう戦いには疲れましたわ。」

「・・・納得いきませんな。」

一人、異を唱えたのはレスリー「ラシッドだ。」

「何だと、ラシッド中尉?」

せつかく戦闘を避ける事ができそうなのに、それをふいにしかねない言葉。ラテルの語気は厳しかった。

「我々がこのような境遇にいるのも、元はといえばあの男がテリウス殿下を攫って行ったからですぞ。到底、許すわには参りません。」

それでは単なる八つ当たりではないか。ラテルはそう思った。戦争なのだ。個人を恨んで何になると言うのか。

「馬鹿な、もう終わった事だ。第一、あのグランゾン相手に、その戦力で敵う訳があるまい。」

もうこれ以上、部下を失うのもご免だった。諭す様に、ラテルは叫んだ。

そんな上官を、レスリーは鼻で笑う。

「さて、どうでしょうな。やってみもせずに、その様な事を言われるとは、少佐も弱気になられたもの……。」

その自信はどこからやってくるのか、彼はラテルを見下したような様子さえ見せる。

「それに、相手はあのグランゾン……背教者クリストフ王子です。ならば、正義は我らに在ります。正義を行うのに、何を躊躇う事があります?」

「正義と無謀とを混同するな! 貴様の言っている事は、兵士に死ねと命令しているに等しいんだぞ!」

いつまでも折れようとしなないレスリーに、ついにラテルは声を荒げる。そんな上官の様子すら一笑に附し、レスリーは続けた。

「犠牲を恐れてどうします? 正義に犠牲は付き物。少佐、敵前逃亡は極刑に値しますぞ。最早、アクロス少佐、貴方に指揮官の権利はありません。この部隊の指揮は、私が取ります。」

「何を勝手な事を……!」

激昂するミラを諫め、ラテルは吐き捨てる様に言い放つ。

「もういい! 良いだろう、ラシッド中尉。勝手にしろ! 貴様一人で正義とやらを貫けば良い! 撤退するぞ!」

「了解しました。」

ミラが応える。

ミラだけが、応える。

他の兵士達の反応が無い。異変を感じ、ラテルは必死に呼びかける。
「……どうした、お前達!? 撤退するぞ! こんな所で死ぬ事は無い!」

「どうしたというの、皆? カラフ! ショーク! エイリィ! 返事をし

て!!」

ミラも同様に異変に気付き、仲間達に声をかける。返事は、無い。

「ふふふ・・・無駄ですよ。既に兵士全員、我が術中にあります。」
顔に暗い陰を落とし、レスリーが嗤う。

「まさか・・・仲間に・・・術を・・・？」

ミラが驚愕に目を見開いて呟く。ラテルは怒りに拳を震わせた。

「・・・ラシッド、貴様あ!!」

彼の怒りすらも、レスリーは笑い飛ばし、酷く陶醉しきった様子を見せる。「これも、正義の為。」

何が正義か。ラテルは思い切りガディフォールのコントロールクリスタルに拳を叩き付けた。

「アクロス少佐・・・。」

ミラが弱々しい声を出す。ラテルは歯噛みした。

「・・・く・・・どうしようも無いのか・・・？」

その言葉には絶望がこびり付いていた。

ラテル達が揉めているのは外から見ても明らかだった。

「なーんか、揉めてますねえ。」

シユウの肩の上でチ力が呟く。

「嫌な空気が漂っていますね。・・・大方、あの術者がお仲間にごアスでもかけたのでしょうか。」

レスリーの乗るガディフォールに軽蔑の眼差しを送りながらシユウが答えた。

「えー、仲間にですかー!？」

信じられないといった感じでチ力が驚く。

「ゲアスってあの強制魔法ですよ。あれって、かけられた側の負担が半端無いんじゃないでしたっけ？」

「ええ、その名の通り、強制的に動かされる訳ですから。精神的にも肉体的にも、非常に大きな負担を強います。」

シュウは何やらコンソールを弄っていたが、やがてスピーカーからノイズ混じりの遣り取りが流れ始めた。

「……で正義とやら……ば良い……。」

「……だです……いん、我が術中に……。」

「……なか……つを……。」

途切れ途切れの通信を繋げると、やはり、一人が仲間に術をかけ、かからなかった二人と揉めている様子だった。

正義の名の下、狂気を振りかざすレスリー。

驚愕と恐怖に打ち震えるミラ。

仲間を救えぬ絶望を、呪わしげに呟くラテル。

それぞれの言葉を拾いながら、シュウは尚もコンソールを叩き、マイクに向かって語りかける。

「……ラテルⅡザンⅡアクロス、聞こえますか？」

「……！？」

スピーカー越しに、彼の動揺が伝わって来た。

「聞こえていますね、ラテル？」

もう一度、確認の為に語りかける。

「……あ、ああ、聞こえている……。」

酷く沈んだ声が、スピーカーから返って来る。それを聞いて、シュウは満足そうに続けた。

「貴方に一つ、借りがあつたのを思い出しました。今、それをお返ししたいのですが。如何でしょうか？」

「借り……だと？」

「ええ、借りです。又エツト海で、貴方は私の願いを聞き入れてくれましたね。そのお礼と言っては何ですが、貴方の願いを一つ叶えて差し上げたいですよ。」

しばし、スピーカーから沈黙が流れた。

「……もし……もし、可能であれば……仲間を、救って貰えるだろうか……？」

やや遠慮がちに、しかし、はっきりと告げられたその願い。

「勿論です。」
シュウは笑った。

目には目を

グナインに残った全員にシュウから通信が入った。

全員がほぼ同時にそれを繋ぐ。

「皆さんに手伝って頂きたい事が出来ました。今から指示する所へ、各自向かって欲しいのですが、宜しいですか？」

サフィーネとモニカが真っ先に頷き、テリウスも同意を示す。リンとイルムも無言で指示を待っていた。

各機のメインモニタ右下に小さく地図が表示される。其々が行くべき場所に赤い点が光っていた。

「指定地点に着くまでは隠れ蓑を使用して下さい。合図を送りますので、それまで待機をお願いします。」

シュウの指示に、五者五様の返事が返される。

彼はゆっくりとグランゾンを進ませた。レスリーが身構えたのが分かる。それに構う事もせず、グランゾンは敵のど真ん中で立ち止まった。

全員が指定の場所に着いたのを確認し、シュウは合図を送った。

突然に現れた五つの機影に、レスリーは驚きを見せたものの、さして動いた様子も無く、酷く興奮気味に傀儡達に命令を下す。

「さあ、行け！私の兵士達よ、悪魔を倒すのだ！！」

彼の傀儡は、彼の命令に従い、彼の敵に襲い掛かる、筈だった。

「・・・どうした！早く行け！命令だぞ！！アイツを殺せ！！殺すんだ！！！！」

興奮に輪をかけ、彼は叫び散らす。

その声は空しくその場に響き渡るだけで、何一つ、効力を発揮しやうとしなかった。

「どうした、何があった！？」

ぴくりとも動こうとしない兵士達に、今度はレスリーが声をかける番となった。

必死になつて喚き散らす彼の耳に、酷く冷淡な笑い声が聞こえて来る。

「ククク・・・どうしました、何か異変でも起きましたか？」

空寒くなるような声だった。先程のラテルとの会話を、彼がもし聞いていたならおおよそ同一人物の声などとは信じられなかったであろう、そんな声。

「気付きませんか、貴方が私の術中に居る事に。」

言われてから、慌ててモニタを見つめた。

現れた五機が形作るそれは、五芒星。中心は、グランゾン。いつの間にか、その右手にはグランワームソードが握られている。

大剣の切先でカバラ式の十字を切りながら、シュウは呟いた。

「『アター・マルクト・ヴェ・ゲブラー・ヴェ・ゲドウラー・レ・オラーム・エイメン』」

そのまま大地に剣を突き立てる。

「『大地の支え、諸々の深淵。穿ち、満たせし汝。眼に見えぬ王。地に依りて讃え、光に依りて盟す。』」

隊を囲むその五機を頂点としたペンタグラムが現れる。

「『アドナイ・ハ・アレツツ』」

剣を引き抜く。空気が微かに震えた気がした。

霧が晴れる様に、シュウが“嫌な空気”と称したそれが薄れる。

糸が切れた傀儡の目に、生気が戻り始める。しかし、短時間とはいえゲアスの影響下にあったその顔は、どれも疲労の色が濃かった。

「・・・さて、皆さん、命惜しくばお逃げなさい。」

狂気に喰われる前に。

まるでその言葉が合図だったかのようになり、兵士達が撤退を始める。いや、逃げ惑い始めたと言ふべきか。

皆が皆、どこへ逃げるのかすら分からないまま、闇雲に、しかしその場からとにかく離れたい一心で、動き出した。

「さあ、御自慢の兵隊さんはもういらっしやいませんよ。どうなさいます？」

先程にも増して冷たい笑いをレスリーに浴びせかけ、シユウは彼に向き直る。

レスリーは術を破られた悔しさに齒噛みしていたが、やがて思い出したように笑い始めた。

「ふ、ふふふ、そうだ、あんな奴らなどいなくとも、我が術さえあればクリストフとて赤子も同然・・・見よ、我が術の力を！！」

彼は狂った様に嗤い、叫んだ。

「『天の理、地の理、逆しに行えば逆しに生ず。冥府の怨み、煉獄の焰、血をもちて盟す。闇に依りて盟す。アク・サマダ・ビス・カンダク』！！」

高らかに唱えられた咒文に呼应し、大地からデモンゴーレムが湧き出して来る。その数は、正確には分からないが三十は下らないだろう。

「見たか、我が術の力を！！」

ゴーレムの大群を背に、レスリーは得意満面に嗤い続けた。

「・・・うわぁ。」

グランゾン内部から様子を窺っていたチカが小馬鹿にした声を出す。

「だっせーっ！！何アレ！？あんな初歩の術で随分といきがっちゃってるけど！」

「ばっかみたい。」

同じく、やや遠くから見ていたサフィーネも呆れた声を出した。

「調和の結界が崩壊して以来、こういった暗黒系魔術は力が強くなってますからね。彼は、それを自分の力と勘違いしたのでしょう。」

愚かな・・・。」

「お可哀相な方ですね。」

シユウとモニカの声には、哀れみの色すら漂う。

「残念ですが、この地は今私の手の内にあるのですよ。」

「黙れ！悪魔の戯言など、聞く耳持たぬわ！！」

もはや、すっかり狂気に取り込まれたレスリーは自棄になった様に喚いた。

「・・・ご主人様、ありや思いつきり叩きのめさないとダメですよ。」

「仕方ありませんね。『この地に刻まれた五芒星の記号に依りて、退け、怨霊共よ。我を煩わすな。』」

グランゾンの眼が魔術的な力を持って輝く。射竦められたゴーレム達は、次々と、自ら大地へと還っていった。

「な！ば・・・馬鹿な！正義が！この私が！敗れる筈は無い！間違いだ！何かの・・・！」

「・・・もう良いでしょう、そろそろ御仕舞いにしますよ？」

「ま、まだだ！まだ！私は！負けてなど・・・！！」

「・・・目には目を。貴方にはお似合いの最期をプレゼント致しますよう。」

シウウが、静かに嗤う。狂気すら吞み込む、闇の様に。

レスリーは異変に気付く。何の命令も下していないガディフォールが、ひとりでに動き出した。帯刀していた細身の剣を抜き放ち、自らの胸部に宛がう。そこにあるのは、コクピット。

「ま、待て！止めろ！！」

主人の制止の声も聞く事なく、そのまま自らの心臓部を刺し貫いた。

狂気に駆られた男の、余りにも、呆気ない最期だった。

竜巻

事の一部始終を、アハマドは上空から見ていた。

「・・・フン、何ともまあ、馬鹿馬鹿しい結果だ。」

呆れ半分に呟いたが、どこか清々した気持ちもある。

これで、自分を捉えるモノは無くなった訳だ。

思う存分、私情に走れる。

彼は竜巻。何かを破壊せずには存在できない。

我は竜巻。真っ直ぐに、己の道を突き進むのみ。

空を舞う蒼い鷹に気付いた。

ガディフォルに酷似したそのフォルム。いや、正確に言えば、ガディフォルがそれに似せて作られたのだが。

竜巻の精霊ソレイドが守護するその魔装機。渾名は、ソルガディ。

ソルガディが、剣を振りかざし、急降下してくる。

歪曲フィールドではなく、手にした大剣で、その一撃を受けた。速度を乗せた剣は重く、僅かにではあるが、グランゾンを押し動かす。続け様に繰り出されるその剣は、洗練されたそれではなく、荒々しく打ち振るわれる、まるで暴風。

時には避け、時には剣で受け流し、シュウは暴風をしのぐ。

「やはり、強いな！そうでなくては面白くない！！」

嬉しそうに、アハマドは叫んだ。ぴりぴりと肌を刺す緊張感が心地

良い。

乱打が止んだ後の、僅かな隙を狙い、グランゾンが歪みを撃ち出す。すんでの所でソルガディは上空に逃げた。脚の装甲を幾らか持つて行かれたが、アハマドは気にしなかった。

両肩に装備されたレールガンで乱射する。グランゾンが左手を掲げるのが見えた。この攻撃でダメージを与える事が出来ないのは承知済みだ。両翼を畳み、自らが撃ち出した弾に紛れてグランゾンとの距離を詰める。

チカは歪曲フィールドでレールガンを阻むのに一生懸命だった。

以前はヴォルクルスの魔力で賄われていたそれは、今では何故か全て主人の魔力とプラーナ、各エンジンからのエネルギーに動力が切り替わっており、常に全てを覆ってはられない。

アハマドがそれを知っていた訳では無いだろうが、結果的にはそれを利用する形の攻撃になった。

グランゾンがレールガンの防御にまわっている隙に、それに乗じて左脇腹付近にすれ違い様の一撃を見舞う。

コクピットにまで届いた衝撃に、シュウは口元を歪めた。

「ほう……。良い攻撃ですね。」

愛機に傷が付いたのは久しぶりだ。

「あわわわわ、すすすすみません！歪曲フィールドが間に合いませんでした！」

チカが慌てて謝罪するが、主は特に気にした様子も無い。

「構いませんよ。……ソルガディのパイロットは、アハマド〃ハムディでしたか……。」

「え、ええ、そうです。ハイ。」

アハマド〃ハムディ。パレスチナ出身のムスリム。イスラム過激派の一派に所属していた経験もあった筈だ。

なるほど、とシュウはひとりごちた。

また、レールガンの雨が降って来る。チカがフィールドを慌しく展開し始めた。

レールガンの弾数は限りがある。ならば、今度は急所を狙って来るだろう。シュウ自身も身構えた。レールガンの閃光の中に蒼い鷹を見付ける。切先を追うことだけに集中した。鋭い衝撃がグランゾンとソルガディを襲う。グランワームソードとデイスカッターとが互いに火花を散らしていた。地力に勝るグランゾンが、鏑迫り合いを制する。弾き返されたソルガディは、地面に叩きつけられたが、すぐに体勢を立て直し上空に舞った。

誰の目にも、アハマドの劣勢は明らかだが、彼自身に焦りの色はない。反対に、楽しくて仕方が無かった。

背中に感じる死神の息吹すら、彼にとっては心地良いものだった。

「・・・楽しそうですね、アハマド」ハムディ。」

「やはり、シュウ」シラカワか。ふふふ、楽しいな。こんなに心躍るのは久しぶりだ。お前程強い相手と戦える機会など、そうはあるまい。」

二度、三度と剣を合わせる。その度に少しずつ押されながらも、ソルガディは尚も喰らい付いてくる。

「強い相手と戦うのが好きなのですか？」

「勿論だ。だから今、お前とこうして戦っている。」

グランゾンの右足を狙い、アトカノンを射出した。挟まれた地面が、グランゾンの足をさらう。体勢を立て直される前に、背後を取った。

ソルガディが駆る。竜巻の様に。全てを刻む刃を携え、猛然と突き進む。

グランゾンまで後数歩。

突然、ソルガディが壁にぶつかる。その壁が、地面だと気付くのは少しかかった。背中を、何か途轍もない質量の物に押さえつけられているような感覚。

鷹が、地に伏せる。翼が拉げる音がした。

「・・・俺の負け、か。」

機動性に代わり装甲を犠牲にしたその機体では、グラビトロンカノ

ンの重力に耐え切る事は出来ず、無残な姿を晒していた。地に伏したまま、アハマドは溜息を吐く。

「アハマドハムディ。もっと戦いたくはありませんか、強い相手と。もっと、命を懸けるに相応しい相手と。」

「・・・何だと？」

敗者として、死すら覚悟していたアハマドに、しかし、届いた言葉は余りにも甘い誘惑。

「お嫌でしたら結構です。今の言葉は忘れて下さい。」

彼の沈黙を、否定と受け取ったのか、シュウはあっさりと話題を打ち切り、背を向ける。

「待て！」

無残な姿を晒して尚、立ち上がろうとするソルガディ。

戦いたい。もっと。

右の翼がもげ落ちた。それがどうしたというのか。両の腕は辛うじて動く。ならば、戦える。まだ、戦える。

「・・・この命、くれてやろう。」

戦えるのならば。まだ、戦えるのであれば。

戦場へ。

戦場こそが、彼の帰るべき家なのだから。

小さな恋

「・・・これは、フラモスで廃棄処分になる筈だった戦艦か。よく動かせたモノだな。」

ひっそりと静まり返った廊下を歩きながら、ラテルはどこか感慨深そうに呟いた。

「この程度の戦艦のOSプログラムでしたら、そんなに難しい物ではありませんからね。」

「それは恐れ入る。」

ラテル、ミラ、アハマドの三人が通されたのはブリーフィングルーム。

既に他のメンバーも全員集まっていた。

「テリウス王子!？」

ミラが驚きの声を上げる。

「ああ、ミラか。君には随分世話になったね。」

カークス軍に居たときの扱いを思い出して、テリウスは苦笑いした。

「少し、遅しくなられた様ですわね。」

テリウスの成長を見て取ったのか、ミラが笑う。テリウスは苦笑いした顔のまま、肩を竦めて見せた。

「そりゃあ、ね。」

ちらとシユウを見遣るが、彼は何処吹く風といった感じだ。

「モニカ王女、テリウス王子、ご無事で何よりです。」

ラテルが深々と頭を下げる。

「まあ、ラテル、私もご無事で何よりと感じていると思われそうですわ。」

相変わらずの言葉遣いに、ラテルは少し笑った。

「皆さん、積もる話も在るでしょうが、一先ずおかけ下さい。サフィーネ、皆さんに何か飲み物を。」

小さく返事をして、サフィーネが席を立つ。すぐに全員分のコーヒ

―が用意された。

「さて、これからアハマドには一緒に来て頂く事になりましたが・・。そちらのお二人は今後どうされるおつもりで？」

シウウの疑問に、ラテルとミラは一瞬顔を見合わせる。

「・・・こうなった以上、カークス軍に戻る事は出来ないだろうな・・。」

「かと言つて、フェイル王子の下へ行く事も、やはり気が進みませんわ。」

二人の答えに、シウウは二、三度頷いた。

「では、身の振り方が決まるまで、ご一緒に如何ですか？」

「良いのか？私達は・・。」

「構いませんよ。」

まるで一切の疑問を打ち切るように、シウウは微笑む。

「モニカ、皆さんをお部屋へ案内してあげて下さい。」

「はい、シウウ様。皆様、こちらで御座いますわ。お付きになつて来て下さいませ。」 立ち上がつて、モニカはにっこりと笑った。

通された部屋で、ミラは一人落ち着かずにいた。

何故気分が落ち着かないのか、それすら分からない事に少し苛立つ。上官に相談しよう。そう思つて席を立つた。

ラテルに会えると思つた途端、不思議と気分が落ち着くを感じる。モニカの配慮なのか、部屋はすぐ隣だった。扉の前に立ち、遠慮がちにノックをする。

がたがたと部屋の中から音がして、間もなくラテルが顔を出した。

「はい・・・ああ、ライオネス少尉じゃないか。どうしたんだ？」

「あ、いえ・・・その、ご相談したい事がありまして・・。」

ラテルの顔を真っ直ぐに見るのが、どういう訳か気恥ずかしくなり、ミラは少し俯く。

「今後の事か？まあ、とりあえず入ってくれ。」

扉を手で押さえたまま、身体を半歩ずらして通路を譲る。そつと、やはり遠慮がちに、ミラが部屋の中に入って来た。

「ここには、どの部屋にもコーヒーマーカーとティーセットが備え付けてあるんだな。まるで、ちょっとした貴族の別荘だ。」

「ええ、そうですね。軍の物とは大違いですわ。」

「何か飲むか？」

「あ、では、私がご用意しますわ、アクロス少佐。」

微笑んで、ミラがティーポットを手に取る。

「すまん、ライオネス少尉。」

言ってから、何かに気付いた様にラテルが笑い始めた。

「もう、軍に居場所も無いだろうに……。我々はまだ軍人気取りなのだな。」

「そう、ですわね。」

ミラもどこか可笑しそうに笑う。ティーポットに茶葉とお湯を入れて砂時計をひっくり返した。さらさらと、鮮やかな色の砂が落ちる。「・・・では、何とお呼びしたら良いでしょう？」

少し悪戯心を起こしたような、ミラの笑顔。軍人としてではない、女性の顔。

さらさらと、砂が落ちていく。

ミラの視線はすぐに砂時計に移ってしまった。表情が見られたのは、ほんの一瞬。ラテルには、それが酷く惜しい事に思われた。

十も歳の離れた女性に何を思っているのだろうか、ラテルは軽く頭を振る。彼女はまだ二十七。あの表情を見せるに相応しい相手はその内きつと現れる筈だ。

「どうなさいました？」

ミラが、また悪戯っぽい笑顔を向けてくる。素直に、美しいと思うそれだけに、自分には相応しくない様に感じた。今度はラテルの方から目を逸らす。

さらさらと、最後の砂が硝子の坂を滑り落ちて行った。かちやりと小さな音がして、ティーカップが差し出される。

「どうぞ・・・ラテル・・・さん。」

「あ・・・。」

思わず顔を上げた。ミラと目が合う。彼女は、少しはにかんだ。

「す、すまない・・・ミラ・・・。」

慌ててカップを受け取り、目を逸らす。二人きりになった事など今まで無かった事に、今更思い当たった。

彼女から差し出された紅茶が、何か特別な物に感じられ、ラテルは慎重に口へ運ぶ。

「・・・美味しいな。」

意図せずこぼれた言葉。

ミラが、笑った。

嬉しそうに。本当に、嬉しそうに。

彼女は、彼の気持ちに気付いていただろうか。

彼は、彼女の気持ちに気付いていただろうか。

お互い十も歳が離れている事を気にしながら、しかし、確実に同じ事を願っていた事に、気付いただろうか。

小さな、小さな、美しい恋が、ここにも一つ。

前夜

悪い夢に追い出されるように、少年は目を覚ました。

傍らに見覚えのある男が立っている。しかし、その男以外、見覚えのあるモノは無く、状況の呑み込めない少年は困惑した。

永い永い眠りから覚めた様な気分だった。記憶は酷く朧げで、身体は思うように動かない。

ぼんやりとした意識の中、一つだけ、はっきりとしたものがあつた。それは、ようやく、解き放たれたのだという事。

自身を閉じ込めていた檻が、絡め取っていた鎖が、無くなったのだという事。

止まっていた時間が、ようやく、動き出した。

「シュウ、ちょっと良いかい？」

後ろからかかった声に、シュウはキーボードを打つ手を止めて振り返った。

「テリウスですか。・・・どうしました？」

テリウスは落ちつか無そうにきよきよと周囲を見回す。自分達以外誰もいない事を確かめて、口を開いた。

「・・・声が・・・聞こえるんだ。」

「ほう。」

少し脅えた様子のテリウスに、シュウは微笑んで見せる。

「・・・それは、どんな声ですか？」

「うーん、何て言うんだろ・・・。何か、呼んでる気がする。地の

底から響いてくるような、不気味な声だよ。」

「地の底から響いてくる……とはいって得て妙ですね。」
愉快そうに声を出して笑う。

「実際に、ここの地下に眠っている、怨霊共の喚き声ですよ。彼等の眠りを覚ます事が出来る程、貴方の魔力が上がった、と言う事でしょう。」

「って事は……これ、ヴォルクルスの声なのかい?!」
ぎょっとして飛び退くテリウスに、シュウは苦笑した。

「とは言っても、分身の一つに過ぎませんから、心配せずとも大丈夫ですよ。」

「でででも、あ、明日僕達、コレ、起こすんだよね?」
「そうですね。」

「……そうですねって、そんなあつさり……。」

「ふふふ、また怖くなってきましたか?」

「そりゃ、当たり前だろ! 声なんか聞いちゃったから、余計だよ! 三割増し位だよ!」

「では、姿を見ようものなら五割増しですね。」

冗談めかしたシュウの言葉に、テリウスは肩を落とす。

「……いや、まあ、うん……。そう、かもね……。」

「特訓で使ったデモンゴーレムと同じ様なモノですよ。」

「お陰様で、僕デモンゴーレム恐怖症になりそうだよ……。」

「おや、それは失礼しました。」

また声を出して笑うシュウに、テリウスは溜息を返した。

先刻まで感じていた恐怖が、すっかり失せてしまっているのに気付いたのは、彼が部屋に戻ってからだった。

すっかりボロボロになったソルガディを前に、サフィーネは溜息を吐く。

「あー、もう！何よ、コレ?!」

機体の各部をチェックする度に、悲鳴に近い声が上がった。

「よくこんなんで動いてたわね、この機体!・・・ちよつと、アハマド!!」

「・・・何だ?」

動作チェックに付き合わされたアハマドが、面倒臭そうに応える。

「カークスの所の整備士は何してたのよ?!オリハルコニウムなんて、不純物だらけだし!!永久機関だって、碌に整備されてないじゃない!!」

「・・・俺に言うな。動けば何でも良い。」

「ソレイドは何も文句言わないワケ?!」

「俺と同じだ。戦場に出れば細かい所には拘らん。」

「そこは拘りなさいよ!!」

「・・・煩い女だ。」

「誰のせいだと思ってるのよ!」

アハマドの溜息と、サフィーネの絶叫が、格納庫に響き渡った。

「どうかしましたか?」

近くを通りかかったのであろうミラが、叫び声を聞きつけてか顔を出す。

「ああ、えつと、ミラ、だっけ?ちよつと聞いてよ!」

事の顛末を、尾鰭に背鰭、おまけに胸鰭まで付けて話すサフィーネ。事ある毎に入るアハマドの静かな突っ込みも交えつつ、話し終わる頃には随分と時計の針が進んでいた。

「・・・まあ、それで。」

「随分と余計な話が混じったな。」

「誰のせいだっつーのよ?!」

「えつと・・・サフィーネ、さん。」

ミラの他人行儀な呼び方に、サフィーネは軽く手を振る。

「呼び捨てで良いわよ。」

「あ、はい。では、サフィーネ。ソルガディの修理でしたら、私の

ガディフォルを使って下さい。形状は殆ど同じですから、そのまま使えると思いますわ。」

「あら、良いの？アンタは？」

「少し、戦場から離れてみようと思いますわ。ラテルさんも、その方が良いでしょう。」

「ふうん……。」

サフィーネは意味ありげに笑うと、そつとミラに耳打ちした。

「……ラテルと何かあったの？」

「！？」

顔を真っ赤にして、ミラが俯く。

「い、いえ、その、なな何も、ありませんわ。そ、その、ラテルさんとは上司と部下で、だから、あの、と、歳も離れてますし……そんな、か、関係では……！」

あまりにも慌てふためくミラを見て、サフィーネは笑った。

「そんな事一言も言っていないわよ。何かあったか聞いただけじゃない。」

「あ……。」

真っ赤な顔を更に赤らめて、ミラは一回り位小さくなる。

女性陣の遣り取りを興味無さそうに眺めていたアハマドが、また溜息を吐いた。

「……下らんな。用が無いのなら、俺はもう行くぞ。」

「ああ、行って良いわよ。アンタが居ても、面白くないし。」

野良犬でも追っ払う様な仕草と共にアハマドの背中を送り出し、サフィーネはミラに向き直る。

「……で、どうなの？好きなの？あ、歳の差なんて理由にしちゃダメよ！愛があれば、そんなの関係ないんだから！」

盛り上がるサフィーネ。萎縮するミラ。

「だから、これからの時代は、女から積極的に……。」

そんなこんなで、昼過ぎから始まったソルガディの整備が終わったのは、もう日も変わろうかという時間になってからだった。

歪な筋書き

彼女が生まれたのは、調和の結界の加護も薄い僻地の寒村だった。一説によると、ヴォルクルスが最初に現れた地とも言われていた。そこは、精霊信仰が大半を占めるラ・ギアスにしては珍しく、独自の宗教を確立していた。

信仰対象は、勿論、サーヴァ・ヴォルクルス。

その地を治めていた領主も、代々ヴォルクルスを崇めており、外からは“闇の貴族”とさえ呼ばれていた。

戦士の家系に生まれた彼女は、幼い頃から戦う事を仕込まれた。

武術、魔術は勿論の事、拷問の方法、その耐え方、果ては房中術に至るまで。

元々才能があつたのか、彼女の歳が二桁になる頃には、村では右に出る者が居なくなっていた。

丁度その頃からだったろうか。ラングラン王国で、ある脅威が予言され、政府が躍起になって対策を練り始めたのは。そして、領主がある目的の為、独自に機体の開発を始めたのは。

領主の機体が出来上がってくるに連れ、村の周りにはキナ臭さが漂い出した。

そもそも、破壊神を信仰するこの村は、政府にずっと危険因子扱いされてきた。

少しでも脅威の種を取り除きたい政府が、それを長い時間放って置く事は無く、ある日、それは突然実行に移された。

最初に異変に気付いたのは母だった。

真夜中、草木ですら眠る時間。彼女は激しいノックの音に起こされる。

寝惚け眼で扉を開けた彼女の前には、すっかりと身支度を整えた母親の姿。初めて見る、戦士としての姿だった。

「村はもう囲まれているわ。でも、貴女一人であれば、逃げ延びら

れる筈。急ぎなさい。」

共に戦うと言った彼女を制して、母は言った。訓練の時にすら見た事が無いほど、厳しい顔だった。

やがて、母と同じ様に身支度を整えた父親もやって来た。

父は何も言わず、ただ彼女の髪を撫でただけだった。

「じゃあね、サフィーネ。」

それが親子の交わした最後の言葉。

全てが終わった後、彼女が見たのは、血と炎とで真っ赤に染まった村と、夥しい数の死体。

そして、それらの上に、亡霊の様に佇む、不気味な機影だった。

「・・・どうしました、サフィーネ？」

怪訝そうな色が含まれる想い人の声で、サフィーネは我に返った。

「あ、シュウ様・・・。いえ、何でもありませんわ。」

二、三度首を振り、笑顔を作る。

何故、今になってあんな事を思い出したのか、分からなかった。

いよいよ、ヴォルクルス神の復活が間近に迫っていると言っのに、この胸騒ぎは何なのだろう。

全ての不安な思いを打ち消す様に、サフィーネはシュウを見つめる。

「大丈夫ですよ、サフィーネ。」

まるで、彼女の考えを解っているかのような、その言葉。

ふと、シュウが柔らかく微笑む。

心臓が高鳴った。

この人の傍に居て、何を不安に思う事があるのか。

「・・・そろそろ、朝食の準備をして参りますわ。」

「ええ、よろしく願います。」

深々と一礼し、サフィーネはシュウの部屋を後にする。

「・・・大丈夫・・・そう、大丈夫よ。・・・私には・・・シュウ様が居るじゃない・・・。」

自分に言い聞かせるよう呟いて、彼女は廊下を駆けて行った。

鬱陶しい位重苦しい空気の中、私とあの人は出会った。

一目見た瞬間、息が詰まるかと思う位、胸が苦しくなったのを、覚えてる。

あの事件以来、独りになった私は、身体を売るか、人を殺す事で生を繋いでいた。

蔑む様な眼差しを向けられる事も慣れたし、乱暴に扱われる事にも慣れた。血の臭いも慣れた。人を殺した時の罪悪感なんて、とつくに忘れた。

笑顔も、いつからか、すっかり忘れていた。

もしかしたら、他の感情も忘れていたのかも知れない。

そんな私に、どこか虚ろな目で、空々しく微笑みながら、あの人は簡単な自己紹介をした。

ラ・ギアスでは聞かない発音の名前だった。

地上の人間なのかと聞いたら、静かに否定された。

では、ラ・ギアスの人間なのか、と言ったら、これもまた否定された。

「・・・どちらでも、無いのですよ、私は。」

後でルオゾールに聞いたら、彼は両方の血を引いているのだと言った。

「・・・お互い、居場所が無い者同士ですね・・・。」

何度目かに会った時、何でかそんな言葉が口を突いて出た。

「・・・ええ、ですから、壊してしまおうと思います。全て。」

そう言つて、あの人は、そっと目を伏せた。その姿が、酷く儚く、弱々しくすら見えた。それが、無性に愛しかった。

「ええ・・・ええ！そうですとも、壊してしましましょう！全部！全部を！」

自分を否定してきた世界を壊す。

ああ、何て魅力的な提案なのか。

あの人が、そつと手を伸ばしてくる。

髪を、撫でられる。

お父さんが、最期にそうしてくれた様に。

そして、優しく、微笑む。

「手伝つて、くれますね・・・サフィーネ？」

「ええ！ええ！勿論・・・勿論ですとも、シュウ様！！」

私も、笑っていた。

そして、泣いていた。

沢山お金を貰つても、どんな美味しい物を食べても、綺麗なドレスを贈られても、浮かばなかった笑顔。

真つ赤な村を見ても、男共に乱暴に扱われようとも、何度返り血を浴びようとも、流れなかった涙。

一度に、全てを取り戻してくれた、あの人。

笑顔は消えず、涙は止まらない。

きつと、酷い顔をしていたと思う。

それでも、あの人はもう一度、私の髪を撫でてくれた。

小さな子供をあやす様に。

荒れ果てた寒村に、独り取り残されて泣いている、子供を、あやす様に。

「さあ、泣くのはもうお止めなさい。行きましょう、私達の居場所を作る為に。」

白い手が、差し出された。

縋り付く様に、その手を取った。

「はい！どこまでも・・・この命在る限り、お供致します！」

その瞬間、誓った。

決して、この言葉に違ふまい、と。

私を救ってくれたのは、神様では無く、この男なのだという事を忘れない、と。

居場所

ティーバ市からたいして離れてもない森の中、場違いなほど大きな洞窟が、その口を開けていた。

この場所は、地元の間人は気味悪がつて近づかず、何も知らぬ人間が迷い込んでみずく恐怖に顔を引きつらせ逃げ帰って来るといふ。グナインが平気で入り込めるその大きさは、そこに潜んでいるものの巨大さも、同時に物語っていた。

吹き込む風が、怨霊の呻き声ともつかぬ音を立てて過ぎ去って行く。奥へ進むにつれ、空気も淀んできている気がした。

鬱陶しい位重苦しい空気。ここの雰囲気伝えるには、そんな言葉がぴったりと合う。

「地獄行ったら、こんな感じなのかね？」

相変わらず、緊張感の無い面持ちでイルムが呟いた。

「見てきたいなら送ってやるぞ。・・・生憎、片道切符しかないが。」

「

強ち冗談でも無さそうに思える程、殺気を放つリンが応える。

「・・・リンちゃん・・・もしかして、昨日俺がミラちゃん口説いた事・・・怒ってる・・・？」

「さあ、何の事だかな。」

素気なく言つて、ぷいと顔を背ける。この仕草は、リンが妬いている時のモノだと知っていた。

イルムは苦笑して、顔を背けたままのリンを見遣る。

「リン。」

「何だ？」

「お前が本当に、俺を殺したいと思ってるなら、俺は喜んで死ぬぜ。」

「

「っ！バカ！！冗談でも、そんな事は言うんじゃない！！」

リンの本当に怒った声。

周囲も思わず水を打った様に静まり返る。

「・・・あ。」

沈黙と視線とに耐え切れなくなつてか、リンが俯く。

「・・・と、兎に角、勝手に死ぬ事は許さんぞ・・・。」

ようやく小声で呟くと、逃げる様に格納庫へ駆けて行ってしまった。

「あらま、盛大にノロケられちゃったわねえ。」

サフィーネが楽しそうに笑う。

「仲がよろしいようで、羨ましい限りと思われそうですわ。」

「姉さん、また文法おかしいって。」

いつもの遣り取りを繰り返すビルセイア姉弟。

そのちよつと後ろで、ラテルとミラが並んで立っていた。

「あー、その・・・イルム殿に口説かれたのか、ミラ？」

「え、ええ。あの、一段落着いたら街に出かけて行って、その、お茶でもしないか、と。」

「そ、そうか。」

「勿論、お断りしましたけれど・・・。」

「そうか。」

何故か、ほつとしたように息を吐くラテル。

しばらく思案顔をしていたかと思うと、やおら身体ごとミラに向き直った。

「わ、私が同じ事を言ったら・・・やはり断るか、ミラ？」

「・・・え？」

きよとんとした顔をラテルに向ける。彼は、やや緊張した表情でミラの答えを待っていた。

「あ・・・その・・・。」

ようやく意味を理解して、ミラが頬を赤らめる。

「・・・喜んで・・・お受けします・・・。」

消え入りそうな声で、答えた。

「ひゅう。やるじゃん、ラテル。」

テリウスが茶化す様に口笛を吹く。

「二人がそんな仲だったとはねえ。知らなかったよ。」

「テ、テリウス王子！」

慌てるラテルに、テリウスは意地悪く笑って見せた。

「良いじゃん。お似合いだよ、とても。あーあ、僕にも素敵な女性が現れないかなあ。」

「ガ、ガディフォールの様子を見に行つて来ます。行くぞ、ミラ！」

「……は、はい……。」

さり気無くミラの手を取って、ラテルは足早に部屋を出ていつてしまった。

「ふーん、なるほどねえ。道理で昨日素気ないと思つたら、お相手がもう居た訳か。」

「君も居るだろ、イルム。」

「まあねえ。ほら、俺って色男じゃん？」

「……自分で言うのは、どうかと思うよ。」

テリウスが溜息混じりに呟く。

「まー、何ですね。はっきり言える事は、この一団が、破壊神の封印を解きに向かつてる集団には、とても見えないって事ですかねえ。」

「……でも、重苦しい空気よりずっと良いですよ。ねー、ご主人様？」

「……そう、ですね。」

急に話を振られたシュウが、少し困った様に笑った。

「ずっと緊張感が無いままでは困りますが……。たまには、良いかも知れませんね。」

「ですよー！」

チ力は嬉しそうに主人に擦り寄って行く。

「何だかね、ご主人様。アタクシ、ここに居場所を感じるんですよ。」

「ご主人様は、感じませんか？」

「・・・さあ、どうでしょうね。」

曖昧な主人の言葉に、チカが、嬉しそうな顔をした。

是とも非ともつかない応えが返ってくるのは、殆どの場合、肯定を意味しているのだと、知っていたから。

封印

洞窟の最奥である、巨大な広間に辿り着いた。

グナインと、それに搭載された全ての機体を置いても、まだ広さを感じるその広間は、ティーバの地下に存在していた。

風の音ではない、はつきりとした呻き声が聞こえてくる。

怨霊が、この場所の邪氣に中てられ、集っているのだろう。

「さて、ここが最も封印の力が強いようですね。」

グナインのブリーフィングルームに集まった全員が、シュウの言葉を聞いていた。

「こ、この下に、ヴォルクスルが眠っているのかい？」

「あら、テリウス、声が震えてしましてよ。」

「そ、そりゃあ、そうさ。姉さんは、平気なのかよ？」

弟の言葉に、モニカは意外だとはかりに頬を膨らませる。

「シュウ様のお傍に居る限り、私に怖いものなんて無きにしも御座いません事よ。」

「・・・姉さん、それ、使い方違う。」

相変わらずな姉に溜息を吐くテリウス。どさくさに紛れて、シュウの腕を掴むモニカ。それを目敏く見付けるサフィーネ。

「ちよつと、モニカ！アンタ、シュウ様にくつつき過ぎよ、離れなさい！！」

「嫌ですわ！」

「・・・遊んでいないで、準備を始めますよ。」

シュウに寤められ、モニカとサフィーネが同時に返事をする。

「テリウス、モニカ、これを。」

シュウから渡されたのは、小さなプレート状のオリハルコニウム。

「シュウ、これは？」

「咒文記憶素子です。その中には封印を破る為の咒文が入れてありますので、それを扱える魔力さえあれば誰でも使えます。とは言え、

一回きりの使い捨てですが。」

「テリウスが珍しそうにそれを見つめる。『へえ、こんな便利な物が開発されてるなんて、知らなかったよ。これがあれば、わざわざ長つたらしい呪文覚えなくて良いんだろ。アカデミーの連中って、いつも秘密主義だよなあ。』」

「これは、アカデミーで開発された物ではありませんよ。」

「あれ、そうなの？」

「ええ、地上の技術を参考に、私が作った物ですから。」

「流石はシユウ様ですわ、魔術以外でも、何でもお出来になられますのね！」

「いやあ、姉さん、これまたスゴイ言葉遣いを……。」

「感嘆の声を上げるモニカに、テリウスはまたもや呆れる。やはり、何度注意したところで姉の素つ頓狂な敬語は直らなそうだった。」

「まあ、ウエアレベリングの点で、まだまだ改良の余地がある物ですが……。今回はこれで充分でしょう。」

「で、コレ、どうやって使うのさ、シユウ？」

「持っているだけで大丈夫ですよ。」

「……あの、シユウ様。……私に、何かお手伝い出来る事は？おずおずと、サフィーネが声をかけてくる。そんな彼女に、シユウは静かに告げた。」

「今はまだ、結構ですよ。」

今は。

まだ。

シユウの言葉に微かな疑問が浮かぶが、すぐサフィーネの頭からは消え失せる。

彼のする事に、間違いがある訳無いのだから。そう思った。

「……シユウ、別に何も起こらないけど？」

「テリウスの声が聞こえた。そう、もうすぐ封印が解けるのだ。願いが、もうすぐ叶う。そう思うと胸が高鳴った。」

『『煉獄変断章』第六段、レギウスがマナクの親子に投げかけた言

葉は？」

シュウの、静かで、厳かな雰囲気を纏った声が響く。儀式の始まりを告げる言葉だ。

「そんなモノ、知るワケ……。」

テリウスが不平を漏らそうとした瞬間、手にしたプレートが淡い光を放つ。

「『光強ければ、また闇も深く、遍く光照らさば、遍く闇に覆われん。』」

喉が勝手に言葉を発する。何とも奇妙な感覚だった。

「な、何、コレ!？」

「これが、咒文記憶素子の力ですよ。では、続けます。モ二力、『煉獄変断章』第二段。」

「『我が神に比ぶるモノ無し、我、唯一にして、全て也……。』」
三人が静かに儀式を行う様子を、サフィーネは感心しながら見つめていた。

「スゴいわね……。こんな高度な咒文がすらすら出てくるなんて。」

「咒文には、言霊が宿る。魔力が高く、また、その意味を十分に心得ていなければ、言霊は音に宿る事を拒み、空しく喉を通り過ぎるだけで終わる。」

「テリウス、続きを。」

滞り無く、進んでいる、筈だった。

「『その名を讃えよ、我が神の名を。畏れよ、その名を……。』」
その咒文を聞いた瞬間、サフィーネの顔色が変わる。はっきりと、息を呑むのが分かった。

「……これは……。シュウ様！違います！！これは、第二段では無く、第十二段……。っ！！」

悲鳴に近いその叫び。それを最後まで言い終わる事無く、サフィーネが恐れていた事が起こった。

遠くから、獣に似た咆哮が聞こえる。

その声が、段々近づいて来るのが分かった。
ずん、と大きく地面が揺れる。

「シユウ様っ！今の咒文は・・・！！」

近づいて来るモノの正体を、シユウとサフィーネだけは理解していた。

「・・・すみません、皆さん。私のミスです。」

グナインの目の前にある地面を割って、巨大な腕がそこから現れた。サフィーネが、ああ、と絶望にも似た声を漏らす。

腕、肩、そして、その上半身。やがて、その全身がずりりと、穴から這い出して来た。

有機物と無機物を、出鱈目に混ぜた様な、その姿。何度か、文献で見た、その姿。

空気が震える程の咆哮を、“それ”が上げる。

蜥蜴に似た口を持つ下半身に、蜘蛛の物とも思える脚を付けて、ぽっかりと穴の空いた腹からは、蛇のような触手が何本も伸びていた。そして、両肩には表情の無い、無機質な顔。金属そのものの光を纏って輝く鋭利な翼。

ゆっくりと、その首が、獲物に、グナインに向く。

何処までも無慈悲な、仮面のようなその顔が。

死と破壊を司る、神。

サーヴァ「ヴォルクルス」。

「どうやら、封印を解いた上に、分身まで呼び出してしまったようですね。」

淡々と述べるシユウに、戸惑った様子は無い。どこまでも落ち着いた、いつもの彼。

彼を除く全員が、息を呑んだ。

「・・・どうやら、道を塞がれたようだな。」

「通せんぼってヤツだな。退かさない事にゃあ、帰してくれそうにないねえ。」

リンとイルムが、諦めた様な声で呟く。

「そうですね・・・仕方ありません。」

シユウの言葉に驚愕し、サフィーネは叫ぶ。

「シユウ様！？ま、まさか、ヴォルクルス様を！？」

「此処で死ぬ訳にはいきませんからね。」

静かな静かな、その声。

「し、しかし、ヴォルクルス様を・・・手にかけるなんて・・・。」

サフィーネは、あくまでも抵抗した。成人を迎える前に独りになつてしまった為、正式な契約はこそしていないものの、彼女はヴォルクルスに忠誠を誓った僕。

主に刃を向ける事など、そう簡単に出来る筈は無かった。

「シユウ様、サフィーネなんか、当てにしてはダメですよ。私達だけで、やりましょう！」

語気を荒げて、モニカが駆け出す。向かう先は勿論、格納庫。

「ああ、僕もやるよ。こんな薄暗い所で死ぬなんて、ゴメンだからね。」

相変わらずやる気は無さそうだったが、それでも自発的に、テリウスは姉の後に続く。

「俺もやるぜ。何たって、リンちゃんと死なない約束しちやったからさ。好い男ってーのは、約束は守るモンだからな。」

「・・・お前一人では力不足だろう。私も行く。」

二人離れたって、イルムとリンも格納庫へ向かった。

「ふふ・・・コイツは手応えがありそうだ。アッラーの他に神は無く、ムハンマドは神の使徒なり！」

道中、全く喋ろうとしなかったアハマドが、嬉々として飛び出して行く。

「・・・ラテル・・・さん。」

「ミラ、心配は無用だ。必ず無事に戻ってくると約束しよう。」

「・・・はい。あの、コクピットまで、お見送りに着いて行っても構いませんか？」

「勿論だ。とても、嬉しく思う・・・。」

ぴしりと背筋を伸ばして、まるで初陣へと出向く兵士の様に歩くテル。

その三歩ほど後ろを、そつと着いて行くミラ。

そして、ブリーフィングルームに残ったのは、二人。

サフィーネと、シュウ。

仲間

音が聞こえた。

銃声、破裂音、咆哮、何かにぶつかるとような鈍い音。
時折、振動も伝わって来る。

「・・・シュウ様・・・。」

沈黙を破ったのは、サフィーネだった。

「・・・シュウ様、本当に・・・その、ヴォルクルス様を・・・。」
そこまで言って、口を噤んでしまう。

瞳には、迷いの色が浮かんだまま。それでも、シュウを見つめていた。

「できませんか?・・・私の、頼みでも。」

その言葉に、サフィーネの瞳が揺れる。

「・・・シュウ様の・・・頼み・・・。」

愛しい人の、お願い。

神に誓った忠誠と、この男への思慕の念とがサフィーネの中でせめぎあう。

「サフィーネ、無理はしなくても良いですよ。戦いたくないのであれば・・・。」

「わ、私、は・・・。」

一度、瞳を伏せる。

思い出した、在りし日の誓い。

ゆっくり深呼吸をし、伏せた瞼を上げた。紅い瞳が、輝く。

「・・・私は!・・・ヴォルクルス様の僕である以上に、シュウ様、貴方の、貴方様の部下です!」

きつぱりと、言い切る。瞳に浮かんでいた迷いは、消えていた。

あの日、二人で言葉を交わしたあの日、誓ったのだ。神に誓った忠誠よりも、強く。

「私も、戦います!シュウ様と共に、戦わせて下さい!」

神は、私を救ってはくれなかった。

救ってくれたのは、目の前に居る、あの人。

「有難う・・・貴女は部下などでは、ありませんよ。」

そっと、シュウが手を伸ばし、彼女の紅い髪を、撫でる。

「サフィーネ・・・貴女は私の・・・仲間です。」

優しく、微笑む。あの日の様に。

「・・・シュウ・・・様・・・。」

サフィーネは、少し戸惑ってから、そっと、一歩踏み出した。

今まで、この人の部下として、決して出すぎないよう、常に一歩引いていた。

でも、部下でないなら。

仲間であるなら。

構わないだろうか。この一歩を縮めても。

「・・・シュウ様・・・私、今のお言葉、決して・・・決して忘れません・・・。」

お互いの鼓動すら、聞こえてきそうな距離。

本当は、思い切り抱きつきたかった。抱き締めて貰いたかった。

それでも、彼女に出来たのは、遠慮がちに、その胸に顔を寄せる事だけだった。

シュウは、拒絶する事も受け入れる事もせず、静かに立っている。

ゆっくりと、顔を上げた。

こんなに間近に、あの人が居る。

少し困った様に、それでも笑って。

目は強い意志を湛え、笑顔に空々しさの欠片も無く。

今なら分かる。

これが、これこそが、あの人なのだと。

「私は・・・シュウ様の、為ならば・・・。」

サフィーネがそこまで言った時、強い衝撃がグナインを襲った。

「・・・苦戦しているようですね。」

すっと、シュウがサフィーネから離れる。

「あ……。」

名残惜しそうに、サフィーネが小さな声を上げた。

その彼女に差し出される、白い手。

「行きましよう。皆が待っていますよ。」

仲間が、待っている。

「……はい！」

手を伸ばした。

縋る様には無く、包み込むように、あの人の手を取る。

暖かい、と思った。

絆

「あー、もう！どうなってんだよ、コイツ！？」

通信機越しに、イルムが文句を言うのが聞こえた。

「知らん。私に聞くな。」

リン自身、先刻から何度も不平不満を囓殺している。

とにかく出鱈目な相手だった。

脚を撃ち抜いて体勢を崩そうとすれば空中に逃げ、翼を切り落とせば瞬時に再生させる。

攻撃パターンこそ、原始的で単純ではあったが、広間のいたる所に残る痕を見れば、その威力の高さは窺い知れた。

「おい、ヤツの気を逸らせ。」

言い放つて、アハマドが単身、バケモノもといヴォルクルスの分身に突っ込んで行く。

「ちょ、ちよつと、アハマド！・・・ったく、知らないよ！！」

テリウスが、アハマドの行動に戸惑いながら、それでもヴォルクルスの気を逸らそうとレールガンを乱射した。

何発かが命中し、仮面の様な顔がこちらに向く。

「・・・やっば。」

気を逸らす事には成功したようだが、すっかり自分がターゲットになつてしまっているらしい。

腹から生えた無数の蛇が、一斉にテリウスを睨む。何匹かが、その牙を剥いて飛び掛つて来た。

「うわっ！！」

蛇の顔が目の前に迫る。

「テリウス！」

後ろから、モニカの声が聞こえた。

ばしん、と乾いた音がして、蛇が見えない何かにぶつかる。モニカの張った結界だろう。

「何をばーつとしてらっしやいますの！」

思いつきり怒られるが、あの蛇に咬まれるよりはずっとマシだった。
「モニカ王女、テリウス王子！ご無事ですか！？」

結界に咬みついている蛇を一匹ずつ、ラテルが撃落としていく。

「もう、死ぬかと思ったよ！アハマドはどこにいったのさ！」

「ここだ。」

その言葉と同時にヴォルクルスの額が割れ、体液（と思しき物）で濡れた刃が突き出てきた。

「この程度で死を覚悟するなど、まだまだ甘いな、お前は。」

楽しそうに言葉が続けながら、アハマドは剣を横に薙ぐ。風を切る音がして、ヴォルクルスの顔が二つに割れた。

流石のヴォルクルスも、何箇所かを同時に再生させる事は出来ないように、動きは確実に鈍くなっていた。

これを好機と、アハマドは更に刃を突き立てる。

「アハマド、後ろ！！」

誰かの声が聞こえた。妙に切迫した声に、振り返る。鋭い爪が、目の前にあった。

「っちい！」

舌打ちして、回避行動に移る。それでも、遅い。直撃は免れないな、と思った。

鞭のしなる音がした。次いで、目の前まで迫っていた爪が叩き落される。

「アナタもまだまだ甘くてよ、アハマド。」

紅い機体が浮いていた。サフィーネのウィーゾルだ。

「ふん、やっと来たか。」

「サフィーネ、遅いじゃありません事！？グズグズしすぎですわ！
！」

「やっぱり、来たんだね、サフィーネ。ま、そんな気がしてたけど。
」

「全く、遅かったから、心配したぞ。」

「サフィーネちゃん、待ってたぜー！」

口々に、迎えてくれる、仲間達。

大切な、仲間。

私の、大切な。

「お待たせー！」

大声で叫んだ。

嬉しかった。

「私も、居ますよ。」

後ろからも、声がした。静かで落ち着いた、愛しい声。

ああ、そうだ。私には、この人が居る。

「サフィーネ、参りますわ！」

もう迷うまい。

そう決意して、地を蹴った。

人の子

グランゾンとウィーゾルが出てきてから、勝負はあつという間だった。

ブラックホールクラスターの残照を眺めながら、テリウスは安堵の溜息を吐く。

「・・・終わった・・・よね？」

「ええ、ご迷惑をおかけしました。」

ちつとも悪びれないシュウの言葉に、これが予定していた事なのでは無いかとすら思えて来る。

「はあ・・・。まあ、良いや。僕ら、先に戻ってるよ。」

グナインへと帰還していく仲間達を見送りながら、シュウはウィーゾルに通信を入れた。

「サフィーネ、お疲れ様でした。」

「あ、シュウ様・・・。シュウ様の為ですもの。」

先刻のグナインでの遣り取りを思い出し、頬を染めるサフィーネ。

「有難う御座います。・・・もう一つ、頼み事をして構いませんか？」

「はい、何なりと。」

「では、今回の件はルオゾールに黙っていて下さい。彼の性格は知っているでしょう？また、お説教をされる破目になりますからね。」

「・・・ええ、勿論ですわ。」

苦笑混じりに紡がれる言葉。サフィーネは迷う事なく頷いた。

「チカ、貴女ですよ。」

「うー・・・ストレス溜まるなあ・・・。」

お前にストレスなんか溜まるのか。と他に人が居れば、突っ込みが入っただろうが、残念ながら、今はサフィーネとシュウしか居なかった。

「よっし、こんな時はストレス解消に限ります！ちょっと失礼しま

すよ。」

二、三回咳払いをすると、大きく息を吸い込む。

「王様の耳はロバの耳いー！！！」

虚空に向かって大絶叫。

「ふいー、スツキリしたー。」

「・・・チカ、それは穴に向かって言う言葉では無いのですか？」

白河先生、突っ込みの方向が違います。

全ての機体を収容し、グナインはトロイアへの道を走り出した。

サフィーネとリン、イルムはメンテナンス作業に追われ、アハマドは礼拝の時間だと言って、メツカの方角探りに右往左往。

ラテルとミラ、そしてモニカは夕食の当番を買って出た為、その準備にかかりきりだった。

シュウと言えば、グランゾンから引つ張ってきたデータを、自身のコンピュータに保存してある、他のデータと照らし合わせている最中だった。

概ね、予想していた通りの数字が出たのか、シュウの表情は満足そうだった。

「・・・何か、良い事でもあったのかい？」

少し躊躇ってから、テリウスは声をかけた。

「おや、ノックも無しに他人の部屋へ入るとは、感心しませんね。」

言葉では非難しているが、余程機嫌が良いのか、表情は柔らかい。

「ああ、それは悪かった。謝るよ。・・・で、何か良い事でもあったの？」

シュウとは対照的に、テリウスの表情は何処か固い物だった。緊張しているのかも知れない。

「・・・良い事、ですか・・・。さあ、どうでしょう。」

はぐらかす様な答えに、テリウスはもう少し思い切った質問をぶつ

ける事にした。

何度か言い淀んだ後、それでも、はつきりと、テリウスは言う。

「今日の失敗……。あれ、本当に、ミスだったのかい？」

「ええ、私のミスですよ。」

思った以上にあっさりと、その答えは返された。

相手の目をじっと見つめる。いつもと変わらない、静かな目。

余りに変化がなすぎて、釈然としない。

分身とはいえ、奉じる神に刃を向けた後なのに、だ。

「……君が、あんな単純なミスなんて、らしくないなって思ってます。」

「おや、随分と買い被って頂いていますね。ですが、私とて、人の子ですよ。」

「……そう。……なら、良いんだ。君も、ぼくらと一緒に人間なんだもんね。たまにはミスもするよね。」

「勿論です。」

しばしの沈黙。先に口を開いたのは、やはりテリウスだった。

「ぼくは、別に君が何をしようが構わないよ。ただ、騙されるのはゴメンだって、そう思っただけさ。」

「そうですか。肝に銘じておきましょう。……話は、それでお仕事舞いですか？」

「ああ……。」

「では、すみませんが、一人にして頂けますか。少し、考えたい事がありますので。」

「……分かったよ。」

半ば追い出される様に、テリウスは部屋を出た。やはり、釈然としない思いは残ったままだった。

「……少し、浮かれ過ぎましたか。」

誰も居なくなつた部屋で、シュウはそう呟いた。

「私も、人の子・・・ですね。」

自嘲気味に笑う。

そして、呟いた言葉に、違和感を感じた。
子供。

誰の？

勿論、両親の。

父親と、母親の・・・。

母親の・・・？

頭痛がした。

酷く鈍い痛み。

思考が霧消する。

瞳を閉じる直前、一面に広がる赤を見た気がした。

闇の檻

僕は青い鳥を探している。
逃げてしまった、僕の鳥。

思い出の国に行った。老人が、青い鳥をくれた。
帰って来たら、鳥は黒くなっていた。これでは幸せを運んでくれない。

闇の国に青い鳥がいるらしい。噂を聞いて、僕は急いだ。
沢山の青い鳥が群れを成して飛んでいた。一羽捕まえて、鳥籠に入れた。
意気揚々と、帰る途中で、青い鳥は死んでしまった。これでは幸せを運んでくれない。

落ち込んだ気分のまま、僕は歩いた。
未来の国に着いた。

青い鳥の事を聞いたら、近くの森にいと教えてくれた。
青い鳥を見つけた。

でも、その鳥は、次々と色が変わってしまつて、青のままでいてくれなかった。
これでは、幸せを運んでくれない……。

こんなに遠くまで来たのに。
青い鳥は見つからない。

逃げてしまった青い鳥。

どうか、それを見つけたあなた、僕の所へ返して下さい。

それは、いつか幸せになる為に、僕に必要なモノなのです。

笑い声が聞こえた。

くすくすと、嘲笑うような声。

アンタには、何も無いのね。そう、何も無い。

思い出も無い。だって、アンタには、祈りを捧げる相手もない。

くすくす、くすくす。

癪に障る笑い声。

石はみんな宝石だけど、アンタの世界には、一粒の石だって落ちちゃあいない。

だから、アンタには何も無い。

くすくすくすくす。
くすくすくすくす。

光は全てを見守ってくれているけれど、
アンタの世界にや、闇し
かない。
だから、アンタには、何も無い。

煩い。

どんなに遠くへ行ったって、
青い鳥なんて、見つけられる筈が
無いのさ。

煩い。黙れ。

だって、アンタは

煩い。黙れ。喋るな。

耳を塞ぐ。

聞きたくなかった。

それでも、声ははつきりと、
僕に告げる。

だって、アンタは、檻の中にいるんだから。

高らかに響いた嘲笑が、僕の耳を打った。

真っ暗な闇の中に居る事に、その時初めて気付いた。

ルオゾール

その男は、いつでも暗く重い空気を纏って現れる。
亡霊の様な愛機と共に。

貴族の出身でありながら、破壊神ヴォルクルスを奉じ、尚且つ、自らの足でもって地に立つその男。

“魔神官”、“闇の貴族”。

いつしか、人々は男の事をそう呼び始めた。

男の名は、ルオゾールⅡゾランⅡロイエル。

「シユウ様、如何でしたかな？」

卑屈そうに腰を屈めて、ルオゾールはしわがれた声を出す。

「封印の解放は終わりました。これで、残るはここだけです。貴方の方は？」

素気なく答えて、シユウは辺りを見回した。

封印を解放したにしては、ヴォルクルスの気配が薄い。

そんなシユウの様子に気付いてか、ルオゾールは言い繕う様に続けた。

「は・・・それが、サイバスターに邪魔され、完全に封印を解くまでには至りませなんだ。誠に以って、お恥ずかしい次第です。」

ルオゾールの後ろには、“咒霊機”ナグツアートが、亡霊の様に佇んでいる。

アストラル界にその半身を置き、残留思惟を喰らって活動する特異な機体。

オリハルコニウムでは無く、賢者の石とエクトプラズムとで構成された装甲。

どんよりと濁った色の外装は、脚の無い形状と伴って、不気味さをより引き立てていた。

「でも、もうサイバスターは居ないんでしょう。何で封印をそのままに？」

シユウに寄り添っていたサフィーネが口を挟む。

「封印の解き方が不完全だったのと、サイバスターめがヴォルクルス様の分身を打ち倒しおりましたな……。神殿内には邪気が渦巻き、デモンゴーレムが大量発生してしまったのです。もはや、私めにもコントロールできませんぬ。」

ルオゾールが忌々しげに神殿を見遣った。

目の前にある物なのに、手が届かない歯痒さでも感じているのだろうか。

「今は結界を張って、閉じ込めてはあるのですが、あの邪気の量では、あまり長くは持ちますまい……。」

「あら、でも、アナタにはあの“無敵モード”があるじゃない。それを使えばデモンゴーレムなんて、すぐじゃなくて？」

「その様な下衆な呼び名はやめて頂けますかな。あの術は魔力を使い過ぎますでな、しばらくは使えませぬ。」

「……肝心な時に、役に立たないのねえ。」

溜息混じりに、サフィーネはナグツアートを眺める。

戦う事を想定した魔装機と違い、咒霊機は魔術増幅機器の色合いが強い

。ルオゾールの魔力と咒文とで賄われているが、それ自体の攻撃手段は、意外な程少なかった。

「祭壇への道は通れるのですか？」

暫く神殿の様子を見ていたシユウが口を開く。

「それは、何とか……。大丈夫かと思われませんが……。」

「では、中の様子を見てきましょう。サフィーネ、テリウス、付いて来て下さい。」

言って、シユウは踵を返す。彼らの背後には、グランゾンを筆頭に、

全ての機体が居並んでいた。

「ぼくも行くの？」

ガディフォールの足元で、遣り取りを見ていたテリウスが、不満の声を上げる。

「つべこべ言わないの。」

すれ違い様、テリウスの肩を強かに叩き、サフィーネが笑った。

「・・・じゃ、じゃあ、アタクシも、ご主人様と一緒に・・・。」
嫌な予感を悟り、チ力が慌てて飛び去ろうとする。

そんなチ力を、ルオゾールは素手で捕まえた。

「お前は、聞きたい事があるでな、ここに残れ。」
予感的中。

チ力は冷や汗一杯に、渋々頷く。

「・・・な、何でございませよ・・・。」

「まずは、あれだ。」

手にした杖で、ノルスを指しながら、ルオゾールは続けた。

「何故、モニカ王女が魔装機などに乗っておる。生贄に、その様な物など、必要あるまい？」

「え、えーと・・・それは、ですね・・・えと、あの・・・。」
チ力がごによごによと言いついて、話題を聞きとがめたのか、モニカがつかつかと歩み寄ってくる。

「変な詮索はしないで下さいまし。私はただ、シユウ様のお役に立ちたいと思われただけですわ！シユウ様のお役に立たれるのですから、魔装機にも乗りますし、生贄にだってなります！！」

凄いい気迫でまくし立てるモニカ。言い終わると、ふんと顔を背け、ノルスの元へと戻って行ってしまった。

「ふむ・・・まあ、良いでしょう。」

若干、モニカの気迫に圧倒されながらも、ルオゾールは納得した様に呟く。

「・・・チカ、他に変わった事は無かったのか？」

チカが、ぎくりと、小さな身体を大きく震わせる。

「えっ!？」

チカの脳裏に、先日の“ヴォルクルス分身殺害(?)事件”が浮かぶ。

しかし、主人に口止めされてる以上、ルオゾールにはらす訳にもいかず、ももごと口箆った。

「何だ、変わった事はあったのか、無かったのか。はっきり言ってみよ。」

あれだけのリアクションをした以上、無かったですとも言えず、チカは右往左往する。

「え・・・っと、ですね・・・。こ、これは、ヒミツなんですけどね。絶対の、絶対に、ヒミツなんですけどね。・・・誰にも言っちゃダメですよ・・・。」

「だから何だ？」

ルオゾールの言葉に苛立ちが混じり始める。チカは主人がまだ戻って来ていない事を確認し、意を決した様に、ルオゾールの肩に飛び移った。

「実は・・・。その・・・。」

ごによごによと小さな声で何事かを呟く。何を言っているのか、聞き取るうと、ルオゾールが耳を寄せた瞬間。

「王様の耳はロバの耳ーっ!!!」

チカ、魂の絶叫。

ルオゾールが仰け反る。

しばらくその場を支配する、気まずい沈黙。

ゆっくりと、チカに顔を向けたルオゾールの額には、見事な青筋。

「・・・貴様は・・・いきなり何を言いだすかと思えば・・・。耳元ででかい声を出しおって・・・!」

怒りに拳を震わせるルオゾール。冷や汗全開のチカ。

「だって・・・だって・・・。」

泣きそうな声で弁解しようとするが、ルオゾールは最早聞く耳を持つていないようだった。

「チカ、大体貴様は使い魔のクセに自我を持ちすぎておるのだ！そのせいで余計な事を喋り過ぎる！！そもそも、使い魔と云う物はだな……。」

「……どうかしましたか、ルオゾール？」

ルオゾールのお説教がまさに始まる直前、チカにとっては救いの神の様に、シュウ達が戻って来る。

「おお、シュウ様。如何でしたかな、神殿内の様子は？」

「ええ、儀式を行う分には問題無さそうです。」

「左様で御座いましたか。では、急いでヴォルクルス様復活の儀式を始めましょうぞ。」

足早にナグツアートの元へ向かうルオゾールの背中を眺めながら、チカは安堵の溜息を吐いた。

「……助かったあ。ルオゾール様のお説教は長いんだもの……。」

「

紅茶

デモンゴーレムの呻き声を聞きながら、グナインはナグツアートの後に続いて神殿内を進んでいた。

例外も勿論あるが、ヴォルクルス神殿は基本的に全て巨大だ。ヴォルクルスが、古代ラ・ギアスに存在していた巨人族の怨霊と謂われている為かも知れない。

これも、殆どのヴォルクルス神殿に共通する事なのだが、装飾が極めて少なかった。洞窟に、申し訳程度の燭台と祭壇を設けただけという神殿も存在する。

「これが、ヴォルクルスの神殿？・・・思ったより、なんつか、味気ないな。」

だから、イルムのそんな感想も、当然といえば当然だった。

「まあ、どこもこんな感じですよ。祀っている神が神ですから。」

全員が集まった操舵室の中で、シュウは優雅に紅茶を飲んでいる。

その後ろには、紅茶を運んで来たモニカ。

そこだけを切り取って見たら、とてもこれから邪神復活の儀式に挑む様には見えなかった。

「皆さん、これからお忙しくなられるようですから、今のうちにお茶でもお飲みになって下さいまし。」

モニカが紅茶を配って歩く。

ヴォルクルスの神殿は、その巨大さ故に、最奥にある祭壇までかなりの距離がある。

紅茶を楽しむ時間は充分にありそうだった。

カップに注がれた紅茶の琥珀色を見つめながら、サフィーネは溜息を吐いた。

もうすぐ念願のヴォルクルス復活が叶うというのに、この憂鬱さは

何なのだろう。

ふと顔を上げたサフィーネの目に、地上人達と談笑をするモニカが映った。

「どうしました、サフィーネ？」

後ろからかかった声に振り向けば、思い描いた通りの愛しい人。

「・・・シユウ様。いえ、何でもありませんわ。」

サフィーネは、また紅茶に視線を戻すと、そつと一口飲んだ。

美味しいと思う。

紅茶を美味しいと思うのは、モニカが淹れた物を飲んだ時だけだった。

もう一度、モニカを見た。地上人達に加えて、いつの間にかラテルとミラ、テリウスも、会話の輪に参加している。

アハマドは、つまらなそうに操舵室から見える風景を目で追っていた。

全員が、別々の方向を向いて、別々の目的の為に、今ここに集まっている。

それを、不愉快だとは思わなかった。

「あの・・・シユウ様。モニカは、本当に生贄にはしないんですよね？」

自分でも、何故今更そんな事を聞いたのかは分からなかったが、何となく、聞かずにはいられなかった。

「ええ。モニカは生贄には不向きですから。」

少し冗談めかしたシユウの言葉に、サフィーネは安堵の溜息を吐く。そんな彼女の様子を見て、シユウは微笑んだ。

「安心しましたか？」

「え、あ、いえ、そんなんじや、ありませんのよ。」

慌てたサフィーネの声が聞こえたのか、モニカが振り向いて、不思議そうにこちらを見ていた。

「どうかなされましたの、サフィーネ？」

「何でもないわよ、モニカ。」

そう。と納得した様に、モニカは会話に戻る。

言葉の中に潜む、信頼。

男としか、関わりを持って来なかったサフィーネにとって、初めての女友達。

そんな事を思うと、何だかむず痒い気分になった。

カップに残った紅茶を飲み干す。

向けられた背中に漂うのは、親愛の情。

「モニカ。」

呼ばれたモニカが振り返って、ようやく自分が名前を呼んだ事に気付いた。

「あ、えーっと・・・紅茶、もう一杯貰える？」

慌てて言い繕って、空のカップを軽く振る。

「あら、それは気付きませんで、申し訳ありませんわ。」

紅茶のポットを持って、モニカが小走りに近付いて来た。

サフィーネのカップに紅茶を注ぎ、ついではかりに全員のカップへ紅茶を足しに行く。

揺れる彼女の琥珀色の髪が、紅茶の色によく似ていると思った。

邪神解放

ルオゾールは酷く不機嫌だった。

それというのも、ようやく崇拜している神が復活する為の儀式が、一向に始まる気配を見せないからだ。

始めのうちは順調だった。

祭壇を整え、燭台に灯りを入れ、さあ儀式が始まるといった段で、テリウスがいきなり「トイレに行つて来る。」と言つて駆けて行つた。

彼がやつと戻つて来て、改めて始めるぞと意気込んだ所で、モニカとサフィーネが「じゃあ私も。」と連れたつて用を足しに行つたものだから、その怒りも一人だった。

「むむむむ・・・揃いも揃つて、緊張感が欠けておる!!」

地団駄を踏まんばかりの怒りに、シュウは、「まあまあ。」と宥めにかかる。

「そんなに焦る必要はありませんよ、ルオゾール。」

そんなこんなで、結局儀式が始まったのは、それからたつぷりと一時間は後の事だった。

いつもの服ではなく、純白のドレスに身を包み、念入りに化粧をしたモニカが、ノルスを伴つて祭壇に登る。

「魔装機など要りませぬ!」

ノルスを祭壇に上げた事が気に食わないのか、ルオゾールが鋭い声を飛ばした。

「あら、ノルスは私の一部でしてよ。自分の一部を置いて行く事なんて、出来ません事でしょう?」

澄ました顔であつさりと返され、ルオゾールはいよいよ顔を赤くして怒り始める。

「こ……この……!」

わなわなと怒りに身を震わす彼を、シュウが静かな声で窘める。

「別に、それ位構わないでしょう?」

シュウに言われては、それ以上咎める訳にもいかず、ルオゾールは大きく息を吸い込んで、落ち着いて見せた。

「……良いでしょう。では、シュウ様、モニカ王女の前へ。」

全員が固唾を呑んで見守る中、シュウは厳かな空気を纏って祭壇に登る。

祭壇には、モニカとルオゾール、そしてシュウの三人が、小さな三角形を作る様に並んだ。

「これで良いですね。」

確認するシュウに、ルオゾールは満足気に頷く。

「大変結構。……では、煉獄変断章第4段。」

シュウは、懷から裝飾された短剣を取り出し、祈る様に掲げる。

「『全てに平等なるは、死と破壊……万物は無から生じ無へと還る……』」

言霊が神殿内に響き渡り、デモンゴーレム達の呻き声が強くなった。

「シュウ様、生贄に刃を。」

ルオゾールの囁れ声が、耳元で聞こえる。

花嫁の様に着飾ったモニカが、目の前で微笑む。

「痛くしないで下さいね、シュウ様。」

神妙な空気を嫌ってか、それまで黙って成り行きを見ていたサフィーネが一際明るい声を出した。

「あらあら、ガキねえ。私なんて、痛いのも好きよお。……それに、最初は痛くても、そのうちそれが……。」

「茶々を入れるでない、サフィーネ!」

ルオゾールに叱られて、サフィーネは肩を竦める。シュウが、モニカを生贄にはしないと言ったからには、彼女は犠牲にならないのだし、暗い空気になる必要など無いと思っていた。

「さあ、シュウ様!」

ルオゾールが急かす様に声を出す。シユウは「分かっていますよ。」とだけ返して、またモニカに向き直った。

「モニカ・・・ヴォルクス様の復活には、信頼していた者に裏切られた、絶望と悲しみが必要なのです。その感情が強ければ強い程・・・。」

シユウの言葉を、モニカは黙って聴いていた。口元には微笑みを浮かべたままで。

「貴女に解りますか、モニカ。信じていたモノが崩される時の、あの絶望が・・・。」

シユウの瞳に冷たい光が宿る。見る者を凍えさせる様な、その眼光の前ですら、彼女は笑顔のままだった。

「シユウ様、私には、その絶望は解りかねると存じます。何故なら、私の命はシユウ様の物ですから。」

モニカの言葉に、シユウも笑った。

「シユウ様、さあ！」

焦れた様な耳障りな声がした。「そうですね。」彼はそれだけ呟いた。

反逆

誰もが、一瞬何が起きたのか分からずにいた。

最初に声を上げたのは、サフィーネだった。

リンとイルム、そして、ミラとラテルは、何が起きたのか把握出来ないままぽかんとしていた。

アハマドは、下らなそうに、ちよつと鼻を鳴らしたただけだった。

テリウスは、突然の事態に、呆然としていた。

モニカは、聖母の様に、優しく微笑んだまま、ただその様子を見ていた。

シュウは、静かに、眼に冷たい光を宿したまま、笑っていた。

ルオゾールは、我が身に起きた事を理解しようと必死だった。

彼の胸からは、装飾された短剣の、柄の部分だけが生えていた。

「ルオゾール!？」

サフィーネの声が、止まっていた時を動かす。

「な、何が・・・一体・・・？」

自身の左胸から生えた短剣の柄と、目の前の男とを、何度も交互に

見遣り、ようやく搾り出すように、ルオゾールが呟いた。
熱を感じる左胸に手を遣れば、やたら粘つく感触と共に、赤い液体が伝う。

それが血だと理解するのに、随分と時間がかかった。

「シ・・・シユウ、様・・・？」

ぐらりと歪む視界の端で、名前を呼んだ男が笑っているのを見た。

「フフフ・・・どうですか、ルオゾール。信頼していた者に、裏切られる気分というのは。」

楽しそうな、心底楽しそうな、その声。

ルオゾールが、その場に崩れ落ちた。その場所を中心に、ゆっくりと赤い円が広がって行く。

「い・・・ったい・・・何、を・・・？」

「おや、まだ理解出来ていないのですか？」と、さも意外そうな顔をして、シユウはルオゾールの髪を掴んだ。

「せっかく、あれだけ信仰していたヴォルクルスの生贄にして差し上げたのですよ。もう少し、嬉しそうな顔をしたら如何ですか？」

凶悪な、それでいて、どこか無邪気な子供の様ですらある、シユウの笑顔。

全員が、言葉を発する事すら忘れて、その光景を見ていた。

一人、モニカだけが、酷く落ち着いた佇まいだった。

ルオゾールは驚愕に眼を見開いた。

「い、ま・・・ヴォルクルス様・・・の名、を・・・。」

「ああ、呼び捨てにした事ですか？」

何でも無い事のように、シユウが呟く。「それがどうかしましたか。」

「そんな・・・ヴォルクルス様、と・・・け、いやく・・・を結んだ以上・・・逆らう事な、ど・・・。」

「ええ、貴方の御蔭ですよ、ルオゾール。」

シユウの言葉に、ルオゾールはようやく気付く。

未完成だった蘇生術。

消えた記憶。

不可解な行動。

テリウスの存在。

「ま・・・さか・・・。」

「感謝していますよ、ルオゾール。何せ、私とヴォルクルスとの契約も、白紙に戻ったのですから。」

静かに呟くシュウの表情には、しかし、様々な感情が発露していた。今までに見た、どの表情よりも、なお人間らしい、その表情。

「ああ、安心して頂いて結構ですよ。ヴォルクルスはちゃんと復活させますので・・・貴方の命で、ね。」

「・・・ヴォルクルス様を・・・ふ、復活・・・させ・・・どう・・・と、い・・・だ・・・。」

言葉の合間に、時折血を吐きながら、ルオゾールは問い続ける。

それは、意識を保つ為の手段なのか、苦しみから、少しでも逃れようとする足掻きなのか。

そんなルオゾールに憐憫の情の欠片も見せず、シュウは淡々と答える。

「ヴォルクルスは私を操ろうとしました・・・私の性格は知っているでしょう。自由を愛し、何物も恐れない・・・それが、ようやく得た、私の誇りでした。」

ぎり、と奥歯を噛み締める音がした。

「それが・・・あの忌まわしいヴォルクルスとの契約で・・・私の自由は奪われ・・・この世界で、私に命令できるのは、私だけなのです！」

彼は高らかに謳う。十余年の時を経て、ようやく取り戻した“自分で”。

「・・・ヴォルクルス・・・許す事は出来ません。この手で復活させ・・・この手で、その存在を消し去って差し上げますよ！」

自分の意思で踏み出す、第一歩。遅れに遅れた彼の“誕生”。

「おお・・・お・・・れ・・・お、おい・・・そ・・・。」

息も絶え絶えに、最早言葉にすらならない声を吐き出す足元の男を、

何か汚らわしい物でも見る様に睨む。

「苦しいですか、ルオゾール。もう、碌に話も出来ない様ですね。」
そして、嗤う。

「そう、楽になど、死ねませんよ。貴方のその感情こそが、復活の鍵なのですからね。」

ルオゾールが、血に塗れた手を伸ばす。ソレを、シュウはあっさりと弾き落とした。

「服が汚れますので、触らないで頂けますか。」

「しゅ……うう……。」

喉から空気が漏れ出ているだけの様な、その声。癪に障る嘎れ声ですらないその音は、何処か滑稽でさえあったが、シュウは既に、彼の事など見ていなかった。

「テリウス！」

声が飛ぶ。

今まで呆然と成り行きを見守っていたテリウスは、突然呼ばれた声に驚いた。

「え！？」

同時に、何かが投げて寄越されたのを知って、慌てて受け取る。

小さなオリハルコニウムのプレート。咒文記憶素子。

「断章、第4段2行！」

「『……生きとし生けるもの、皆、その神により……』」

テリウスの詠唱とほぼ同時に、ルオゾールは事切れた。

魔神官と恐れられた男の、余りに呆気ない最期。

それが合図だった様に、怨霊達が、一斉に騒ぎ出す。瘴気が渦巻く。

大地が、その身を震わせた。

「来ましたね……。」

シュウが、満足そうに呟いた。

嘲笑

ああ、そうか。

彼女はやっと理解した。

自分はずっと、試され続けていたのだ、という事に。

封印解放の時から不思議だった。

完璧と言って差し支えない程の彼が、どうしてあんな凡ミスを犯したのか。

自分を試す為だけに、彼はわざわざヴォルクルスの分身まで呼び出した訳だ。

あの時、戦う事を拒んでいたら、どうなっていたのだろうか。

彼女は考える。

ルオゾールと同じ末路を辿ったのだろうか。

ああ、それでも。

彼女は、うつとりと彼に視線を向ける。

例えそうになっていたとて、何を構う事があっただろうか。

むしろ、光栄だったのではないのか。

これだけ、愛しく想う男に殺されるのであれば。

髪を撫でて貰った感触を思い出す。

神に逆らう決意に、必要だったのはそれだけだった。

「・・・サフィーネ！」

思索に耽っていた彼女を引き戻したのは、やはり彼の声。慌てて返事をすると同時に、非礼を詫びた。

「貴女は下がっていなさい、サフィーネ。」

「いえ・・・私も・・・私も戦いますわ！」

大気を振るわせる程の呻き声が聞こえた。

サフィーネは、ぎくりと身を硬くする。

呼ばれている気がした。

地の底から、引きずり込む様な声に。

「サフィーネ、貴女は正式ではないとは言え、ヴォルクルスと契約を結んだ身です。ヴォルクルスの本体を前に、正気を保っていられますか？」

彼が何かを言っている。

聞かなければ、と思う心と裏腹に、耳は違う声ばかりを拾う。

ワレハカミ

オマエノネガイヲカナエテヤロウ

煩い、煩い。

彼女は頭を振って、その声を追い払った。

何が神か、と。

私一人、助けられもしなかったくせに、と。

「シユウ様、私も戦わせて下さい！・・・ヴォルクルスの名は、今を限りに棄てましょう！」

響く声を打ち消す様に、叫ぶ。

彼が、笑った。

「・・・良いでしょう、サフィーネ。」

「シユウ様、もし・・・もし私が、ヴォルクルスに操られてしまった時は・・・。」

ワレノナヲヨビステルカヒトノコゴトキガ

「その時は、シュウ様の手で・・・殺して下さいまし。」
「・・・御約束しましょう。」

サカラエル モノ カ

ワレ ハ カミ

嘲笑う様な声が聞こえた。
ぎくりとして、振り向く。

真っ暗な闇が、辺りを包んで笑っていた。

破壊神顕現

思わず舌打ちをした。

冷静な時だったなら、我ながら品が無い、とても思ったのだろうか。それよりも何よりも、今、冷静さを欠いている事を驚いたかも知れない。

そう、確実に冷静さを欠いていた。

例え、傍目にはそう見えなくとも、だ。

ただならぬ事態が起きている事位しか、部外者には分からなかっただろう。

だから、何故、祭壇に男の死体が転がっているのかも、何故、サフイーネが震えているのかも分からなかったと思う。

酷い静寂。

その静寂すら、たいした時間は持たなかった。

地震。

次いで聞こえる、獣じみた咆哮。

背筋が凍る様な、その声。

その場に居る全員が、その声に聞き覚えがあった。

聞いたのはつい先日。

場所は、ティーバ市。

「き……ききき……来たっ！」

テリウスが叫ぶのと、ほぼ同時だったろうか。

神殿内に渦巻いていた瘴気の全てが、一箇所へと集まって行く。

祭壇のさらに奥、玉座とも見える装飾を施されたそこへと。

無機物と有機物とを、出鱈目に混ぜた様な、その姿。

もう実際に見るのも、2度目だ。

1度目と違う点といえば、そう、分身が間抜けにも穴を開けていたそこに、美しい、不自然な程に美しい、女性の上半身が生えていた、という事位だろうか。

女性は、ゆつくりと伏せていた瞳を開く。

明らかに人間のモノとは違う、爬虫類のそれを彷彿とさせる、その瞳で、女性は緩慢に周囲を見渡した。

「・・・とうとう、姿を現しましたね・・・サーヴァーヴォルクルス！」

完全に形を作ったそれを前に、シウウは喜びと憎しみとを吐き出す。それに気付いたのか、それともただ単に目に留まっただけなのか、女性 ヴォルクルスがその身を乗り出してきた。

シウウとヴォルクルスの視線がぶつかる。

途端、仮面のようなだったヴォルクルスの顔に、凶悪な、それでも、美しい、笑みが浮かぶ。

「・・・ワガ・・・ネムリ・・・ヲ・・・サマタゲ・・・ヨビオコ
シタ・・・ノハ・・・オエエ・・・タチ・・・力？」

私の正体を承知の上で、それでも求める、愚か者共。

「ハウビヲ、ヤラネバ・・・ナランナ・・・。」

求めるのならば、与えよう。

「オマエたちの・・・のぞむもの・・・。」

我が名はサーヴァ「ヴォルクルス。

「それは・・・。」

我は、神。

司るは・・・。

死だ！

「いやあああああああああああ！！！！」
悲鳴が聞こえた。」

感動的な光景

走っていた。
逃げていた。

何から？

闇から。

私の、闇から。

「サフィーネ！サフィーネ！しっかりなさって！」
素っ頓狂な言葉が聞こえる。

いつの間にかここまで下りてきたのだろうか。そんな下らない事を考えた。

「サフィーネ！！」

がくがくと、肩を揺すられる。いや、多分、ずっと揺すられていたのだろう。気が付いたのが、今だっただけで。

顔を上げる。心配そうに眉根を寄せるモニカが居た。

バカねえ。こんな事で、そんなに大騒ぎして。

そう、言おうとした。

目が合った。

アレと。

それが、笑う。

ネガイ ヲ カナエテ ヤロウカ？

アノ オトコ ガ スキ ナノダロウ ？

オマエ ダケ ノ モノ ニ シテヤロウカ ？

ぐらりと、何かが揺れた。

それは、もしかしたら、彼女の気持ち。

「・・・ヴォ、ヴォルクルス・・・こんな、事・・・で・・・！」
ソレは笑う。

天使の様に。悪魔の様に。

「駄目よ、サファイーネ！そんなのに、負けては駄目！！」

モニカの鋭い声が飛ぶ。

ナニ ヲ マヨウ ？

「貴女がいなくなれたら、シユウ様はどうなされますの！？私が貰われてしまいますわよ！？それでも良いの！？」

モニカが泣いていた。

自分は今、どんな顔をしているんだろう。

「・・・シユウ、様・・・。」

愛しい人の顔が見たかった。

意外に近く、その顔はあった。

長身と相まって、見下した様な、その視線。

オマエ ダケ ノ モノ ニ シテヤロウカ ？

「何をしているのですか、サファイーネ。」

予想以上の、冷たい声。

「シユウ様・・・？」

モニカが、不思議そうにシユウを見遣る。

「ヴォルクルスの僕である以上に、私の仲間でいてくれるのでは無かったのですか？」

ああ、そうだ。そう、誓った。

「・・・サファイネ。」

呼ばれる。

応える。

「・・・あの場所に、貴女の居場所は見つかりませんでしたか？」

貴女の求めていたモノが。

貴女の欲していたモノが。

あの場所には、ありませんでしたか。

問われる。

答える。

何を迷う。

迷う事など、一つだって、ありはしないのに。

アレは、変わらず、こちらを見ていた。

睨み付ける。

「・・・アンタなんか・・・アンタなんか、負けるモンですか・・・！！・・・私はッ！！シュウ様と・・・シュウ様と・・・っ！」

傍から見たら、とても、感動的な光景だった。

「シュウ様と・・・
するのよーっ！！」

この一言さえ、無ければ。

私闘

シユウは半ば感心したように、ほう、と声を漏らした。

「ヴォルクルスの支配を跳ね除けましたか。・・・頑張りましたね、サフィーネ。」

子供がテストで百点でも取ってきた様な褒め方。

それでも、サフィーネは満足そうだった。

荒く息を吐きながら「シユウ様の為ですもの、これ位・・・何でもありませんわ。」と笑う。

「サフィーネ様らしいなあ。」と、チ力が感心したやら呆れたやら分からない声を出し、モニ力は「お下品。」と完璧に呆れていた。

「おい。」

今まで、流れに完全に置いていかれていた外野から、低い声が聞こえる。

アハマドが、待ちくたびれたと言わんばかりに、一步前へ出た。

。「もう、茶番は良いのか。早くアレと戦わせろ。・・・その為に、俺を呼んだのだろう?」

先刻から、口の中がアドレナリンの味で一杯だ。

そう続ける。興奮しているのだと、素直に言わないのが、何とも彼らしい。

「ええ、もう結構ですよ。」

その言葉を聞くや否や、アハマドはさつさと愛機の元へと行ってしまった。

シユウは、そんな彼に構う事なく、残った外野陣を見渡す。

「さあ、皆さん。これは、完全に私の“私闘”です。参加するしないは各人にお任せ致します。本々、そう言う御約束でしたからね。」
ただし、と彼は言う。

「一緒に戦って頂けるのであれば・・・歓迎します。」
そう言って、笑った。

「つまり、アレだ。」

最初に口を開いたのは、イルムだった。

「お前さんは、アイツに操られて“あんな事”を仕出かしたワケだ。」

「ええ、そうなりますね。・・・多少、不本意ではありますが。」

あんな事。その括りの中に、どこまでの事が含まれるのかは分からなかったが、シユウは頷く。

「って事は、アレを倒しちまえば、地球にとっての脅威が一個、無くなるってー事だな。」

「おやおや、買被って頂いてますね。」

「出来るクセに。」

「否定はしませんよ。」

「なら、芽は摘んどくに限るな。何せ、俺とリンちゃんとの、ラブラブな生活がかかってるからな！」

なあ、リン。

そう言いながら、彼女の肩に手を回そうとするが、途中であっさり弾き落とされた。

「ありゃ、リンちゃん冷たい。」

おどける彼に、リンは冷ややかな視線を送る。

「日頃の行いが悪いからだ。」

ふんと背を向け、リンが歩き出す。

「ラブラブかどうかは、明日以降の生活態度にかかっているからな。」

言ってから、恥ずかしくでもなったのか、彼女は足早にヒュッケバインに乗り込んでしまった。

「・・・愛されてるねえ。」

「ほら、俺って色男じゃん？」

テリウスのからかい半分の言葉も軽く受け流し、イルムはゲシユペ

ンストのコクピットへと消える。

「さて、と。」

テリウスは、少し虚勢を張るように伸びをすると、サフィーネに視線を向けた。

「ね、今日の夕飯、メニュー決まってるの？」

「え？・・・まあ、まだ決まっているわけじゃあないけど・・・。」

「ハンバーグが食べたいな。」

サフィーネが吹き出した。

「ぷ・・・おちゃまねえ。仕方ないわ、トクベツよ？」

「ぼくのは大きめにしてくれよ。」

「それは、約束できないわねえ。」

「ちえっ。・・・ま、いつか。」

そう言つて、彼もまた、ガディフォールの操縦席へと向かって行く。

「やれやれ、皆さん物好きですね。」

悲嘆では無い溜息を漏らし、シユウは呟いた。

「・・・では、私達も、その物好き仲間に入らせてもらおうでしょう。」

「

ラテルが笑っていた。

傍らにミラを伴つて。

「ヴォルクルスは、ラ・ギアスの脅威だ。我が名に戴く戦士の称号にとつて、これ程名誉な戦もあるまい。」

「・・・あら、私はてつきり、彼女の為かと思つたケド・・・。」
意地悪そうに、サフィーネが呟く。

今の彼にとつて、世界だの名前だのは、おそらく二の次だろう。

大切なモノはすぐ近くに。

彼の傍らに。

「守る為の戦い。ならば、迷いません。」

答えたのは、ミラだった。

「・・・そうね。その通りだわ。」

二人は、一緒にガディフォールへと乗り込む。

とても微笑ましい光景だった。

「さあ。」

シュウが呼びかける。

言葉の先にはモニカとサフィーネ。

「私達も、行きましょうか。」

私“達”と言う。

当然の様に。

「ええ、勿論ですわ。」

「はい、行きましょう、シュウ様。」

二人が答える。

当然の様に。

「私達全員の、私闘ですわ。」

モニカが、そんな事を呟いた。

幕引き

我先にと、勇んで出撃したアハマドの機体は既にボロボロだった。それにも構わず突撃を繰り返す様子を見ては「修理する身にもなれ」とサファイーネは怒鳴りつける。

そんなサファイーネを宥めつつ、さり気無く口説き文句を口にするイルム。

それを聞きとがめて、リンは不機嫌そうに棘のある言葉を吐く。その場のノリで出撃してみたは良いものの、今ではすっかりやる気を無くして、申し訳程度の援護射撃をするテリウス。

弟をどやしつけながら、戦闘用ではない機体で突貫していくモニカ。もう傍で見ていて恥ずかしい位にイチャついてるミラとラテル。何ともふざけた戦場だ。

そう思つて、シュウは笑った。

「リン、サファイーネ、相手の腕を狙つて下さい。テリウスは二人の援護。モニカ、ソルガディに再生の咒文を。その間イルムとラテルは相手の注意をソルガディから逸らして下さい。」
シュウが指揮を執る。

思い思いの返事をしながら、全員がそれに従う。

「それにしても・・・。」と、今まですつと言葉を発するタイミングを逃していたチカが、思い出したように喋り始めた。

「何と言いますか、皆さん緊張感が無いですねー。相手はあの破壊神ヴォルクルスでございませよ。こんなノリで大丈夫なんですか、ご主人様？」

「フッフ、アレにしてみたら、こちらの方がずっとやり難い筈ですよ。」

「そーなんですか？」

「アレの糧は負の感情ですから。・・・本来、その顕現は恐怖と絶望とをもって迎えられるべきものなのです。」

「はー。とチカが感心した様な声を出す。

「そこまで計算してらっしゃったんですか、流石ご主人様ですね！」

「いえ、これは私にとっても意外でしたね。全く、愉快な方々が集まったものですよ。」

それでも、信頼に足る、仲間。

悪くない。

そう思った。

獣の様な咆哮と空気を切り裂く風の音。

金属同士がぶつかり合う硬い音、その合間を縫う様に砲撃の音。様々な音が入り混じる、戦闘の音。

「さて、御仕舞いにしましょうか・・・ヴォルクルス。」

呟いて、シュウは相手から大きく距離を取るようにグランゾンを引いた。

シュウの指が、コンソールの上を踊る。

チカが忙しなく動き回る。

「ブラックホールエンジン、出力全開っ！対消滅エンジン異常なっし！ご主人様、いつでもオッケーです！」

「・・・ブラックホールクラスター、発射。」

静かにトリガーを引く。

心臓部に集った闇が、標的を目掛け突き進む。

破壊神が闇に喰われている。

何とも奇妙な光景だった。

「終わった・・・のか？」 誰ともなく呟いた言葉に、シユウは首を横に振る。

「いいえ、まだですよ。」

グランゾンはゆつくりと、無残な姿を晒す破壊神の元へと近付いて行く。

方々を闇に喰い尽されたヴォルクルスは、それでもまだ肉体を再生させようと蠢いていた。

「・・・醜悪な。」

吐き棄てるように言い放って、シユウはグランズンを降りる。蠢く破片が再び集おうとしているその中心。

そこには不気味な程に美しい、女性の身体が転がっていた。女とシユウの視線がぶつかる。

不意に、シユウの思考が乱れた。

どこかで、会った事がある・・・？

酷い概視感。

どこまでも広がる様な青い空。美しい緑。咲き乱れる花。

その中心で、微笑む女性・・・。

ダメ！

耳元で叫ぶ様な声に、引き止められた、気がした。

今、思い出しては、ダメ。

「ご主人様！」

二つの声が重なって聞こえる。

「・・・チ・・・力？」

気が付けば、傍らには青い小鳥。

「もー！酷いじゃないですか、ご主人様！！勝手に降りて行っちゃうなんて！！」

「あ・・・ええ、そう、でしたね。いらっしやい、チ力。」

手を差し出す。小鳥が止まる。ちよいちよいと腕を伝って、小鳥は主人の肩へと納まった。

シユウはゆつくりと歩みを進める。もう、視線が合っても思考が乱

れる事は無かった。

「た・・・高が・・・人間の、分際で・・・。」

ヴォルクルスが、吐き出す様に言葉を紡ぐ。破壊神としての威厳は、既に失われていた。

シユウが懷から短刀を取り出す。儀式に使い、生贄に突き立てた、その短刀。

「殺す・・・つもりか・・・神である、この、私を・・・。」

「何が神です？太古に滅びた種族の亡霊風情が・・・。亡霊は亡霊らしく、大人しく冥府へと帰りなさい。」

言葉と共に、シユウは女の胸に短刀を突き立てる。

女が、奇妙な叫び声を上げた。

「わ、たし・・・ワタシは・・・死なん、ゾ・・・私ハ、オマエ達・・・なのダから・・・。お前たち、の・・・ミ・・・ライ・・・なの、だ・・・カラ・・・。」

事切れる刹那、ソレは確かに何処かを視て、そして、嗤った。

確認する余裕も無く、ゆつくりとソレは崩れ落ちる。

「・・・例え、本当の神であろうと、私を操ろうなどという存在は、決して許しませんよ。」

短刀の汚れを払い、シユウは破壊神の残骸を背にした。

「それでは、戻りましょう。私達の在るべき、空の下へ。」

カーテンコール

嫌な夢を見た。

真つ暗な闇の中で、何かの声に急ぎ立てられる夢。

早く、と。

声が急かす。

急いで、と。

ソレは私の手にナイフを握らせる。

さあ、早く。

ソレが囁く。

あの人を殺せ、と。

そうすれば。

ソレが呟く。

どこかあの人に似た、その顔で。

そうすれば、と。

夢見がちな少女の様に。

私はお家に帰れるのだから。

そう言つて、無邪気に笑つた。

確かに私を視て嗤つた。

あれは、夢。

でも、本当に夢だったのだろうか。

確証が持てない。

何故。

あれは夢だった筈。

夢で無ければいけない筈。

じゃあ何で。

私はナイフを握っているのかしら・・・。

不明瞭な未来

かちゃかちゃと、モニカが茶器を扱う音が室内に響いていた。彼女の横顔に浮かぶのは至福の微笑み。

視線の先には愛しい人。

彼の為を選んだ茶器。彼の為を選んだ茶葉。

ただ一人の為にだけに淹れる紅茶。

ひっくり返した砂時計が、穏やかに時を運んで行く。

最後の一粒が落ちるのを見届けて、モニカはそつと紅茶を注いだ。

「どうぞ、シュウ様。」

「ええ、有難う御座います。」

ガラステーブルを挟んで、相向かいのソファに、モニカは腰を下ろす。

「・・・良い香りですね。」

「シュウ様に良くお似合いになられると思ひまして、選ばれて頂きました。」

「モニカ、また文法が変ですよ。」

シュウが笑う。

それが嬉しくて、モニカも笑った。

「本当に、終わりましたのね。」

穏やかに流れる時間の中、ようやく実感したその事実を呟く。

「・・・シュウ様。これから、どうされるおつもりですか？」

そう聞かれて、シュウは一瞬、ほんの一瞬だが、酷く困惑した顔になった。

「・・・シュウ様？」

「え、ああ。そう、ですね・・・。この後の事など、特に考えていませんでしたよ。」

そう言つて、瞳を伏せる。

周囲に翻弄された幼少時代。

邪神の傀儡となつたその後の自分。

思考とは無関係に、全てが流れていった日々。

宙に浮いた自我の中、考えていたのは、鎖を引き千切る方法と、相手への復讐だけだつた。

そして、鎖は解け、復讐は叶つた。

この後、自分がすべき事は何なのだろう。

シユウは考える。

未だ完全ではない自身の記憶の中に、その答えはあるのだろうか。分からない。

非常に不明瞭な自身の未来。

でも、何故だろう。その不明瞭さが、シユウにはとても愛しく思えた。

「しばらくは、ゆっくりしましょうか。」

焦る事は無い。

時間はこれから山程あるのだ。

「ええ、私も、そうされたいと思われそうですわ。」

モニカが満面の笑みを浮かべた。

美しい午後の一時。

こうやって、のんびりと時間を過ごすのも悪くないかも知れない。そう思った。

絶叫

どうしてだろう。

何故なのだろう。

自分の行動が分からない。

どこかへ向かっている。

よく知っている道順。

ああ、向かっているのはあそこなんだ。

息が切れる。

胸が苦しい。

私は、泣いているのか。

どうしてだろう。

何故なのだろう。

分からない。分からない。

でも、一つだけ、確かに分かる事がある。

ずっと、声が、私にそう言い続けているから。

だから。

私は、あの人を殺しに向かっているんだ。

何の前触れも無く、扉が勢い良く開け放たれる。

崩れる様にして入って来た人物を見て、モニカとシュウは目を見開いた。

彼女は泣いていた。

いつもは美しく化粧された顔を、涙で汚して。

鮮血よりなお鮮やかな髪を振り乱しながら。

「サフィーネ！」

「いけません、モニカ！」

駆け寄ろうとするモニカを、シュウが手で制した。

「・・・あ、ああ・・・ああ・・・シュウ様・・・シュウ様・・・！」

縋る様な涙声と共に、サフィーネはよろよろと立ち上がる。

その手に、しっかりとナイフを握り締めて。

声がする。

声が聞こえる。

殺せ、と。あの人を殺せ、と。
だから。

「・・・シュウ様・・・お願いです・・・私を・・・！」

吞まれてしまう。

吞み込まれてしまう。

だから。
「私を、殺してええええええ！！！！！」

こころのいれもの

私は、知っている。

こんな光景を、私は、知っている。

でも、何故だろう。

思い出してはいけない気がする。

「サフィーネ！しっかりなさって、サフィーネ！！」

モニカの切迫した声が響く。

「・・・モ、ニ・・・力？」

サフィーネが緩慢な動きで顔を上げた。肩で息をしながら、虚ろな目でモニカを見つめる。

「そうよ、サフィーネ！一体、どうされましたの！？」

「私の・・・私の、中に・・・誰かがいるの！・・・シュウ様を・・・シュウ様を殺せて・・・！！」

そこで、シュウはたと気付く。

事切れる間際、何かを視ていたアレ。

確かに、アレは嗤った。何かを視て。

視線の先に居たのは、もしかして・・・。

そして、嗤った意味は・・・。

「・・・ヴォルクルス・・・。」

シュウが苦々しげに呟く。

「……どこまでも、人を虚仮にしてくれますね。」

呟く言葉に滲む感情は、怒り。そして、僅かばかりの、失望。

「……サフィーネ……やはり、抗いきれませんでしたか……。」

「

「あ……ああ！……し……シュウ様……は、早く……私を殺して！！」

叫ぶ彼女に、シュウはそつと近付く。

「分かりました、サフィーネ。……殺してあげますよ。」

「シュウ様！？」

モニカが驚きの声を上げた。

「……モニカ、ヴォルクルスに操られてしまった者の苦しみが、貴女に分かりますか？」

「でも、シュウ様……！」

「……死より恐ろしい事を知っていますか。……自分が自分で無くなる恐怖が分かりますか。徐々に蝕まれて行く恐怖が。それすら理解できなくなる、恐怖が。」

シュウが懷から、短剣を取り出す。躊躇い無く、鞘を払った。それとほぼ同時に、サフィーネが叫び声を上げながら、シュウに飛び掛る。

「サフィーネ……！」

モニカの声が合図だったように、二度、三度と二人の刃が交わる。

「サフィーネ！ダメよっ！シュウ様、私が取っちゃうわよ！！それでも良いの！？」

モニカが叫ぶ。二人の刃が交錯する。

「……モニカ……アンタになら……。」

そこまで言って、サフィーネが大きく目を剥いた。

絶叫が、室内に木霊する。

かくり、とまるで糸の切れた人形の様に、サフィーネがその場に崩れ落ちた。

一瞬の静寂。

「ふ、ふふふ・・・うふふふふ・・・。」

ゆらりと立ち上がった彼女を見て、シュウが奥歯を鳴らす。

「っ!・・・サフィーネ・・・完全に、操られましたか・・・。」

輝きを失った瞳が、ゆつくりと向けられた。口元には、歪な微笑み。

「・・・今、楽にしてあげましょう。」

「・・・シュウ・・・。ねえ、シュウ・・・。愁・・・。」

「

歪んだ口元から、言葉が漏れる。それに構う事無く、シュウはサフィーネとの距離を詰めた。

「ふふふ・・・ねえ、愁。」

その胸元に、短剣を突き立てようとした瞬間だった。

「生まれ変わったら、何になりたい?」

「っ!?!」

紡がれた言葉に、シュウはびくりと動きを止めた。

「ねえ、愁?」

可愛らしく小首を傾げながら、サフィーネはそつと手を伸ばす。驚愕の表情で固まっているシュウの頬に、指先が触れる。

「ああ、そうだったわね。・・・愁は、鳥になりたいんだったわよね。」

つつ、とその頬に汗が滑り落ちた。

「愁は、ここが好き?」

誰だ。

これは、誰だ。

思考が乱れる。

映像が飛び交う。

これは、誰だ。

頭の中で情報が交錯する。知っている。この言葉を、知っている。視界にサフィーネの赤い髪が映る。赤い瞳が映る。その手に握られ

たナイフが映る。虚ろなその笑顔が、映る。

私は、知っている。

こんな光景を、私は、知っている。

「私の為に、死んでくれるわね、愁。」

これは、誰だ。目の前で微笑む、この女は、誰だ。

視界が揺れた。一瞬後、景色が一変する。薄暗い洞窟。微かな松明の灯り。立っている男。目の前には、腰まで届く長い髪を揺らした女。

体が動かない。ここは何処だ。分からない。でも、知っている。

「さあ、私をお家へ帰して……。」

女が、ナイフを振りかざした。

こんな光景を私は知っている。何時、何処で、誰と。ずきり、と左胸が痛んだ。何故。何故、左胸が痛むのか。そこは心臓。振りかざす刃が狙うその場所。

こんな光景を私は知っている。知っている。知っている。知っている。

(……ダメ！)

過去。それは、多分、過去の出来事。

(今、思い出しては、ダメ！)

ばさり、と青い翼が舞った。

あおいとり

「シュウ様！シュウ様！！」

シュウが動きを止めてから、モニカはずっと彼の名を呼び続けた。しかし、何度呼ぼうと彼は一向に反応を示さない。

まるで映画のワンシーンをスローモーションで見ている様に、サフィーネがゆっくりとナイフを振りかざす。何かを呟きながら。その言葉が、モニカには聞き取れなかった。

「サフィーネ！目を覚まして！！」

思わず手を伸ばす。もう何度目かになるその動作。その度に、見えない力に阻まれて、彼女の手は決して彼らに届く事は無い。

自らの無力さに、モニカは唇を噛み締めた。口腔に、僅かな血の味が広がる。

（・・・モニカ・・・）

「・・・え・・・？」

一瞬、誰かに呼ばれた気がして、モニカは周囲を見渡した。

（・・・貴女は、あの子を、愛してあげられる？）

今度は、はつきりと、声が聞こえる。

（あの子が、過去にどんな罪を犯していても、未来にどんな過ちを犯そうとも・・・貴女は、あの子を愛してあげられる？）

誰の声だかは分からなかった。それでも、優しいような女性の声だった。強いて言うならば、母の声に近いかもしれない。モニカはそう思った。

「愚問ですわ。」

強い口調で、モニカは言い放った。

「過去も未来も、関係御座いません。私は、常に、今この瞬間のあなたの方を、愛しております。」

（そう。）

声は、少し安堵した様に呟いた。

（じゃあ、力を貸して。）

ばさり、と青い翼が舞った。

「そこまでです！！！！」

全てを切り裂く様な、鋭い声だった。

モニカも、サフィーネも、そして、シュウも、その声の主を見ていた。

鮮やかな、空の色を身に纏った、小さな鳥だった。

「・・・チカ・・・？」

誰ともなく呟いた言葉の先に、彼女は神々しく存在していた。

境界の守護者

不愉快な名前で呼ばれた。
そんな気がした。

クリストフ「マクゾート

確かに、そう呼ばれた。

呼びかけに、応える事はしなかった。

その名前で呼ばれた事に対するささやかな反抗なのかも知れない。
それでも、その名を呼ばれ続けた。

何度目かになる、その呼びかけに、彼は憤りを以って応えた。

「その名で呼ぶのは止めなさい！」

自分でも驚く位、荒げた声だった。

「私は・・・私の名前は、白河愁です。」

噛み締める様に、吐き出す様に、彼が呟く。

「どうしてそんなにムキになって否定するの？貴方はクリストフ」
マクゾートでしょう。その名を戴いて、生まれ出でてきたのでしょ
う。」

「違います。そんな名など、とうに棄てました。」

「どうして棄てたの？どうして白河愁と名乗るの？」

「そんな事・・・あなたの知った事ではないでしょう。」

「クリストフ」マクゾートは誰にも愛して貰えなかったから？」

「っ！」

「白河愁であれば、あの人が愛してくれたから？」

「黙りなさい！」

「あの人が誰だかも覚えてすらいらないのに？」

「黙れと、言っているのです！」

「今、貴方を愛してくれている人達に背を向けて。下らない事にば

かり気を取られて！」

「黙れ！！」

彼の叫びに、声は一瞬沈黙した。

「・・・それで？」

声は再び静かに語りだす。

「それで、私を黙らせた後、貴方はどうするつもり？」

「・・・っ。」

「私を殺す？あの、愚かなオイディプスの様に。私の問いにすら答えられずに。私如きも服従させられず、殺す事でしか優位を示せない程、貴方は愚か？」

「・・・言いたい事を、言ってくれますね・・・。」

「可哀想なオイディプス。彼はスフィンクスの首に鎖を繋ぐ術を知らなかった。背負いも出来ないモノを、背負ってしまった哀れな子。・・・では、貴方は？」

「・・・私、は・・・？」

「私を征服する事が出来る？私の首に鎖を繋いで、飼い慣らす事が出来る？」

「私は・・・。」

「クリストフ・マクゾート、白河愁。貴方には、出来る？」

「私は・・・征服してみせましょう。愚かな先人の、二の轍は踏みませんよ。」

「・・・そうでしょう、“チカ”。」

「ええ、その通りですよ。“ご主人様”。」

名前

全員が、ただ一点を見つめていた。
そこにいるのは、小さなちいさな、青い鳥。

「シュウ様！」

モニカが逸早く我へと返り、駆け寄って来る。

「ご無事でいらっしやいますか!？」

「・・・モニカ・・・。」

どこか虚ろだが、何とか返ってきた反応にモニカは安堵の息を漏らす。

そのモニカの肩に、チカは降り立った。

「・・・ご主人様、ガラスのコップに熱湯を注いじやいけません。お湯が冷めるまで、もう少し待って下さい。」

チカが言っているのは記憶の事だと、シュウにはすぐに察しがついた。

だから何度も、彼女は内側で叫んでいたのだ。まだ、思い出してはいけない、と。

「・・・ええ、そうですね。まずは、目の前の問題を何とかする事にしましょうか。」

そう言つて、視線を向ける先。彼女はナイフを振り上げたまま、ぎこちなく固まっていた。

モニカが、シュウを慮ってかそつと彼の手を取る。ゆっくりと、彼女に向けられた瞳には、意志の光が戻っていた。

「感謝しますよ、モニカ・・・それに、チカ。」

「シュウ様・・・。」「ご主人様！」

二人の喜びの声が重なる。

「さあ、あの忌々しい化物から、大切な仲間を奪い返すとしましょ

う。」

「サフィーネ。」

名前を呼ばれてか、サフィーネはびっくりと反応を示す。

「・・・私は、今思い出した事なのですが。貴女は覚えていますか、サフィーネ？」

特に警戒した風も無く、シュウはサフィーネとの距離を詰める。

「いつだったか、私は貴女の名前を聞きましたね。」

ナイフを振りかざしたままの右手を掴み、そつと顔を寄せる。虚ろな赤い瞳が一瞬揺らめいた気がした。

「貴女は笑って、まだ覚えてくれないのかと少し不平を言いながら、名乗りましたね、ヴォルクルスの姓を。サフィーネ＝ゼオラ＝ヴォルクルス、と。」

でも、私が聞いたのは貴女の本当の名前。ヴォルクルスなどに身をやつす以前、貴女が生まれ出た時に授かった名前。

覚えていますか、サフィーネ。貴女が名乗った、貴女の本当の名前を。」

サフィーネの瞳から、一筋の涙が流れ出る。その涙が語っていた。覚えている、と。

「サフィーネ＝グレイス。」

からんと乾いた音がした。

それは右手からナイフが滑り落ちた音。ヴォルクルスの呪縛を脱した証。

本当の名前を、取り戻した瞬間だった。

「いめんなさい」

あの出来事の後、倒れたサフィーネが目を覚めたのは正午を少し過ぎた時間だった。

事情を知らないメンバーには、連日の激務が祟ったとだけ伝えておいた。

唯一、テリウスにだけは真相を話したが、興味が無さそうに「へえ、大変だったね。」と言っただけだった。

案外、当事者になれなかった事を拗ねていたのかも知れない。

だから、目を覚ましたサフィーネの傍らに居たのはモニカとシュウ、チ力だけだった。

「ご気分は如何でして、サフィーネ？」

徹夜で看病していたのか、少し眠そうな目を必死に擦ってモニカが微笑んだ。

「・・・身体は凄くだるいわね。でも、心は晴々とした気分よ。有難う。」

弱々しく笑い返すサフィーネ。表情は幾分やつれていたが、目には力強い光が宿っている。

「・・・シュウ様・・・。」

サフィーネが頭だけを動かし、彼の方を向く。

ベッドの横にある椅子に掛けているモニカとは違い、シュウは少し離れた所にあるテーブルセットの椅子に掛けていた。

「・・・シュウ様、お聞きしたい事がありますの。・・・よろしいですか・・・？」

彼女の位置からではシュウの表情は上手く読み取れない。下された沈黙を肯定と見なし、サフィーネは訥々と語りだした。

「私、操られている間、ずっと声を聞いてましたの。・・・女性の、声でしたわ。」

びくり、とモニカの肩に乗っていたチ力の身体が震える。

「彼女は・・・多分、泣いていましたわ。ずっと、シユウ様を殺せ
て言っている間、ずっと・・・泣いていましたわ・・・」
サフィーネは瞳を伏せる。思い出す。昨夜の出来事。殺せと、確か
に殺せと、黒髪の女性は言っていた。そして、同時に泣いていた。
ただ、帰りがたかったただけなのに。

そう言いながら、泣いていた。そんな気がする。

そして、自分の中から彼女が去る時、彼女は一言、か細い声でこ
う言った。

「ごめんなさい。」

視界が揺れた。

ここは何処だ。

知っている場所。けれど、思い出してはいない場所。

揺れる松明の光が、おぼろげに景色を映し出す。

真っ赤な空間。

白かったのであるうドレスを真っ赤に染めて、女性が泣いていた。

ごめんなさい。ごめんなさい。

聞いている者すら痛々しい気分させる悲痛な声。

ごめんなさい。

真っ赤な手を見て、その手に握られた短剣を見て、彼女は泣いてい
た。

赤い円の中心にいる、我が子を見て、彼女は泣いていた。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

途切れ途切れに呟かれる謝罪の言葉。

もう、永遠に届かない我が子への謝罪。

まだ名も無い青い鳥だけが、その言葉を聞いていた。

椅子と床とがぶつかり合う音がした。

モニカが不思議そうにこちらを見ている。

「シュウ様？」

衝動的に立ち上がったのだと理解するのに少し時間を要した。

「シュウ様もお疲れでおいで御座いませんか。サファイアーの事でしたらご心配には及ばれませんわ。どうか、シュウ様もお休みになつて下さいまし。」

少しほつれた三つ編みを揺らしながら、モニカが微笑む。この少女の強さが、酷く羨ましく感じられた。

「・・・ええ、すみませんが・・・少し、休ませて頂きましょう・・・。貴女も、余り無理をしないで下さいね・・・。」

ふらつく足下を誤魔化す様にゆっくりと歩き、シュウは部屋を後にする。

ごめんなさい。

黒い髪の女性が、泣きながら繰り返して呟いたその言葉だけが、彼の頭を巡っていた。

扉

廊下をぶらついていたのは暇を持て余していたからだった。

ラ・ギアスに來た思い出に、とイルムがリンを誘って出かけたのがお昼の少し前。

その案内を言うと、さり気無くミラを伴ってラテルも出かけてしまった。

サフィーネが元氣ならば、そのダブルデートに意氣揚々と着いていたであうが、残念ながらテリウスにそんな出齒龜根性は無い。

アハマドは相変わらず必要な時以外部屋から出ようともしないので、モニカとシュウがサフィーネの看護に回ってしまうと彼は必然的に暇を持て余す事になる。

昼食は先刻済ませた。何ともつまらない食事だった。ここに呼ばれてからの食事は常に賑やかだった事を思い出す。

「・・・サフィーネ・・・目、覺ましたかな・・・？」

今朝、シュウから、昨日の夜に何があったか説明を受けた。

朝のテンションの低さと、何とも云えない疎外感が手伝って、つい連れない返事をしたことに、今更ながら後悔の念が湧いてくる。

「・・・どうしよっかな。」

サフィーネの様子を見に行くべきか。

是非にも見に行くべきだと思う自分と、そんな事も面倒臭いと思う自分がいる。

よくもまあ、ここまで無精者に育ったモノだと我ながら感心した。

今まで周囲に居た人間がいけなかったんだ、と自分に言い訳をするでは、今はどうなのか。

僅かばかり逡巡した後、テリウスはそつと踵を返した。

彼がサフィーネの部屋に着くのと、シュウが部屋から出てくるのが

ほぼ同時だった。

「おや、テリウス……ですか。」

今朝会ってから数時間しか経っていないのに、更に疲れの色を濃くしたシュウを見て、連日の激務が祟ったのは彼自身なのではないかと思う。

「シュウ、酷い顔してるよ。」

「そうですか？」

自覚があるのか無いのか、蒼白い顔に眉根を寄せて、シュウは首を傾げて見せる。

「もう全部終わったんだろ、ゆっくり休みなつて。」

「ええ……そう、させて貰いますよ。」

気休め程度の笑みを作り、やや覚束無い足下を誤魔化しながら、それでも助けを拒む空気を背中に貼り付けるシュウに、テリウスは嘆息した。

「根深いんで御座いますよ。やっぱり、人間そうそう簡単には、変われませんね。」

いつの間に現れたのか、廊下に等間隔で並ぶ窓枠の一つにチカが止まっていた。

テリウスが手を差し出すと、緩慢な動作で飛び移って来る。

「……でも、少しずつなら、変わる。」

チカが腕を昇る感覚。肩まで辿りついた所で、テリウスは彼女を見た。

「そうだろう、チカ。」

「ええ、そうですとも、テリウス様。」

「……ぼくはね。」

扉を見つめる。取っ手を掴んだ。

「ぼくは、変れた。きっと。変った。」

「そうだろう?」

「・・・ええ、そうですね。」

扉が、ゆっくりと開いた。

弟と姉と小さな鳥

部屋の中は、昼間だと言うのに薄暗かった。

窓を見れば、厚手のカーテンがかかったままになっている。

開けようか迷ったが、視界の端にまどろむ姉と昏々と眠る仲間を見つ、手を離す。

うつらうつらと揺れる姉の髪が、綺麗に編まれた普段とは違う事にはすぐに気付いた。

看病の邪魔になったのか、椅子の背凭れにはぞんざいに外されたままの長手袋。

自慢のドレスは無残にも皺にまみれ、横顔を見遣れば目元にはうつすらと隈が浮いている。

テリウスは溜息を吐いて、モニカの肩を軽く叩く。

「・・・姉さん、看病する側が参ってちゃ、本末転倒もいいところだよ。」

テリウスの言葉にか、それとも肩に置かれた手の感覚にか、モニカが驚いた様に振り向く。

「あ、あら、テリウス。参ってるだなんて、そんな、なきにしも御座いせん事よ？」

慌てて目を擦り、笑顔を作って見せた所で、ボロボロの風体では説得力も何も無い。

「・・・後はぼくが見てるから、姉さんもちよつと休みなよ。」

大変だったんだろう、昨日の夜。

少しの妬みを言葉に含ませれば、姉は赤ん坊でもあやす様に微笑む。
「・・・他の皆様は？」

「デートだつてさ。置いてけぼり喰らったぼくは暇なの。」

「そうです。良い思い出を作って頂ければよろしいですわね。」

「夕飯の買い物もしてきてくれるってさ。ミラが作るって言った。」

「

「それは安心されましたわ。」

夕食悩んでましたの。

言葉に髪が揺れる度、編まれた髪がほつれていく。

「ま、そういうワケだからさ、姉さん。」

姉の手をやや強引に引き、椅子から立ち上がらせる。

驚いたモニカから小さな悲鳴が漏れた。

「はいはい、出てった出てった。」

手袋を押し付け、そのままの勢いで扉まで連れて行った。

「テリウスったら、もう。」

困ったように眉根を寄せながら、それでも、弟の成長を見て取り、モニカは口元を綻ばせる。

「モニカ様、アタクシも居りますんでご安心下さいな。何かあったらお知らせに、それこそすっ飛んで行きますから！」

テリウスの肩上で、チカが小さな胸を張った。

ある武将の死へ前編

「カークスが死んだそうよ。」

目を覚ました彼女が、最初に口にした言葉がそれだった。

「・・・ああ、そう・・・ふーん、そうか、死んだんだ。」

「あら、驚かないのね。」

気の無い返事を返すテリウスに、サフィーネは少しばかり驚きの表情を作る。

「まあ、戦争だからね。誰が死んでも、別に不思議じゃ無いさ。」

「そうかも知れないわね。」

横たえたままだった体を、酷く億劫そうに起こしながらサフィーネが笑う。

化粧をしていないその顔は、普段よりもずっと、彼女を幼く見せた。そういえば、自分とそんなに歳が離れているワケでもなかったなと今更ながらにテリウスは思う。

「何よ、人の顔、じろじろ見ちゃって。」

「ん、いや、化粧してない顔なんて初めて見たなって思ってたさ。」

「・・・サイアクね。好きでも無いオトコにすっぴん見られるなんて。」

「酷い言われようだな、ぼく。」

「で、感想は？」

「・・・は？」

「『・・・は？』じゃないわよ。オンナの素顔見たんだったら、感想の一つも言うのが常識でしょう。」

どこの常識だよ。心の中で突っ込みながら、テリウスは少し考える仕草をする。

「そうだなあ・・・ぼくは、化粧してない顔の方が好きかもね。」
予想外の言葉だったのか、サフィーネは一瞬困ったように笑った。
案外、照れたのかも知れない。

「そう言えばサフィーネ様？」
今まで空気の様だったチカが間隙を縫って口を開く。

「カークス將軍って、いつ死んだんです？アタクシ、まだそんな情報掴んでませんケド・・・。」

「さあ・・・いつだかまでは聞いてないわ。ただ、殺したのは・・・ヤンロンと、そう、リユーネって言ったかしら、地上のコ。」

「ヤンロンが？」
テリウスが上ずった声を上げる。サフィーネが目覚ましてから、一番大きな反応だった。

「アレ、でも炎の魔装機神はカークス陣営に居ましたよね？」

テリウスの言葉の意図を汲んでか、チカが首を捻る。

「そ。内部分裂ってヤツかしら。カークスの息子も、ヤンロン達と一緒に戦ったみたい。」

「はー。お子さんにまで裏切られちゃったんですか。何だかなあ。」

「チカ、それはちよつと間違ってるわ。カークスが、裏切ったのよ。」

「カークスが・・・かい？」

テリウスが、眉間に皺を寄せる。

「そうよ。シュテドニアスをラングランから追い出した後、カークスとフェイルはすぐに激突したわ。」

「兄さんと、か。」

「確か、初戦でカークス將軍、コテンパンにされちゃったんですよね。」

「フェイル軍の強さは、カークスの計算外だったみたいね。ミラとラテルは敗走して来て、あの街にいたのよ。」

ああ、それで。と、テリウスは頷く。そういえば、そんな事を言っていたかもしれない。

「・・・でも、何でヤンロン達はカークスと対立したのさ？」

「簡単な事よ。ヤンロンの・・・魔装機神の敵と、手を結んだから。」

チ力が納得したように小さく声を出した。

「そういえば、ご主人様が言っていましたね。ルオゾールとカークスが、秘密裏に、手を結んだって。」

「そう。カークスは力を熱望したそうよ。それはそれは、大きな力を・・・。」

そこで一旦言葉を切って、サフィーネは笑った。呆れでも嘲りでもない。何とも複雑な笑いだった。「そして、力に敗れた。・・・だから、死んだ。それだけよ。」

「・・・何で、カークスはそこまで・・・？」

「さあね。・・・強いて言うなら、オトコだったから、じゃないかしら。同じオトコなら、アンタの方が分かるんじゃない？」

「無茶言っなよ。ぼくには分からないよ、きつと、永遠に、ね。」

そうかしら。

彼女は意味ありげに呟くと、髪を掻き上げた。

「じゃあ、軍人だったからかも知れないわね。どっちにしたって、同じ事よ。カークスは死んだんだから。」

バカなオトコね。

どこか遠くを見つめるような眼差しで、サフィーネが小さく呟いた。その表情の真意に、テリウスが気付く事は無かった。

ある武將の死へ後編

ノルスに呼ばれている気がした。

自室に戻ったモニカは、シャワーを浴び、髪も乾かす事なく寝間着に着替えた。

倒れる様にベッドに横になったのは、まだまだ日も高かった時で、外出組が戻ってくる気配すらなかった。

ノックの音で起こされてみれば、時計の針は文字盤を半周程している。軽く頭が痛んだ。

「姉さん、起きてる？夕食だつてさ。」

扉板一枚分ぐもった弟の声に、すぐ行くとだけ返した。

妙な癖が付いてしまった髪を梳き、一括りにし、服を着替える。

鏡で自分の姿を確認する。少し顔色が悪い気がしたので、紅だけを薄く乗せた。

夕餉の席はとても平穩だった。

すっかりとデートを満喫したであろう四人は饒舌で、行った場所や起きた出来事を取り止めも無く話しては笑った。

起き上がれるまでに回復したサフィーネも、疲れは見せていたものの、上機嫌そうだった。

リンの首元に、朝までは無かったペンダントを見つけた。ミラの左手には、中指ではあったが、真新しい指輪が嵌っていた。

ああ、戦いは終わったのだ、と改めて実感した。

アハマドだけが一人不機嫌そうな顔をしていたが、思い返せば戦場

以外で機嫌の良い顔を見た事が無いので、案外とそういう顔つきなのかも知れない。

早々に食事を切り上げたシュウとアハマドに次いで、モニカも食卓を辞した。

廊下に出た瞬間に、ノルスの気配を感じた。

呼んでいるのだと思った。

モニカが着いた時には、既に火が入っている状態だった。少し不思議にも思ったが、呼んだのだから当然だろうという気持ちもある。

コクピットのハッチも開いていた。

通信機が着信を示すランプを点灯させている。

誰からの通信なのか、モニカにはすぐに分かった。

「・・・お久しぶりと存じますわ、セニア。」

「ん、久しぶり。相変わらず変な文法ね、モニカ。」

「エネルギー粒子が結ぶ、もう一人の自分との対話。」

「・・・でも、ちよっとびっくりしちゃった。」

「あら、どうしてで御座いました？」

「だって、繋がると思わなかったから。」

同じ声で交わされる会話。それでも、向こうから返ってくるのは、自分の声では無い。

「ふふ。ねえセニア、私達、双子で御座いますよ。」

「うん。」

「双子には、昔から、不思議な力があると言われておりますわ。」

「うん。」

「だから、私には、何となくですけども、セニアの事がお分かりになりますの。」

「・・・うん。」

「今だって、ノルスに呼ばれてここまで参りましたのよ。ノルスも、双子でしたわね。きっと、ノルスは私達自身なのですわ。」

「そうかも知れないね。」

「セニア・・・一人で、居たくなかったのでしょうか？」

「・・・うん。」

「でも、皆様とも一緒には居られなかった。居たくなかった。」

「・・・うん。」

「私、多分、その理由、お分かりになりますわ。」

セニアが息を呑む。

返答は来ない。

沈黙が痛い。

でも、だからこそ、モニカは確信した。

瞳を伏せる。

ああ、やはり。

「お兄様が、お亡くなりになりましたのね。」

嗚咽が聞こえた。

望むモノ、望まぬモノ

兄は優れた人物だった。

常に周囲から期待され、常に周囲の期待に応えていた。

それは、王家の長兄に産まれた者の定めだったのだろうか。

その裏で、彼が常に血反吐を吐いていた事を知る者は、余りにも少ない。

そして、兄は死んだ。

「私のせいなの！」

悲痛な叫び声が響く。涙に濡れたその声が、痛々しさを増長する。

「私が、私が兄さんを死なせたの！私が殺したの！！」

押し殺していた泣き声が、次第に大きくなっていく。

彼女が大声を上げて泣き始めるまで、然程時間はかからなかった。

「私が・・・私、が・・・」

姉の、血を吐く様な告白を、モニカは静かに聞いていた。

「・・・お兄様の死が、お辛かったですわね、セニア。」

兄の死を知っても、不思議と、モニカの心に悲しみは訪れない。

ただ、寂しかった。

「・・・有難う、セニア。」

「え・・・？」

通信機の向こうから、戸惑いを含んだ声が漏れる。

そういえば、彼女は知らなかった筈だ。

兄が、どれだけの苦痛を抱えて生きていたのかを。

彼が王家の生まれでさえなければ、否、長兄でさえなかったなら、その苦痛は少しは和らいだのだろうか。

「・・・お兄様は、もう長くは御座いませんでしたでしょう。」

「知って・・・たの、モニカ？」

「ええ、存じておられましたわ。・・・お兄様が、魔力のテストで不合格になられた、その日から、ずっと。」

すつ、と瞳を伏せる。

あの日の王宮は、本当に馬鹿馬鹿しい程の騒ぎだった。すぐに事態は隠匿された。

兄の全ては、あの日から狂っていった。

後日、再び行われたテストで、兄は王位継承権を手に入れた。

それは、兄の寿命と引き換えられた、余りに悲しい権利。

権力はいつだって、望む者の手を離れて、望まぬ者の手に転がり込む。

「お兄様は、苦しんでいらしておいでだった。」

精神的にも、肉体的にも。

ああ、あの人は何故、今、この時代に生まれてしまったのか。

「最期の瞬間、きっと、お兄様は、安らかでいらっしやった筈ですわ。」

「モニカ・・・！」

「セニア、お兄様はね、貴女が居たお陰で、最期に皆と同じ場所に立てた。そうでしょう？」

「・・・兄さん、言ってた。皆と同じ道を歩きたかったって・・・そうしたら、きっと、楽しかっただろうなって・・・。」

「だからセニア、私達は、歩きましょう。お兄様が憧れた、その道を。そして、この目で、見届けましょう。お兄様が夢見た、未来を。」

「

セニアが、泣き崩れた。

「貴女にも、その涙を受け止めて頂ける仲間がいらっしやいますでしょう。」

「うん、うん・・・！」

「だから、もう、独りで泣くのはお止めになられて。」

貴女は、望むモノを持っているのだから。

懷疑

夕餉の食卓は和やかだった。穏やかに微笑み、時に声を出して笑い、今日出来たばかりの思い出を語る四人は眩しかった。

心配していたサフィーネの容体も、思っていたよりずっと良かった。少し疲れた顔をしていたが、しっかりと自分の足で夕餉の席に来た。その事だけでも、シユウの心は幾らか安らいだ。それでも。

何故だか、その場に居た堪れなさを感じ、申し訳程度に出された料理に口をつけ、適当な口実をでっち上げて早々に席を立った。

皆さんは、どうぞごゆっくり。

そう告げた自分の顔が、きちんと笑えていたか確証が持てない。誰も可笑しな反応を示さなかったのだから、何とかなったのだろう。部屋に戻り、扉に鍵を掛け、灯りも点けずにソファに身を沈めた。

「……ご主人様？」

影から顔を出したチ力が、訝しげな声音を出す。

「どうなさったんですか、ご主人様？」

普段余り役には立たない使い魔だが、こうした時だけ、何故か妙な鋭さを見せる。

「……チ力、貴女は……。」

ある朝、気が付いたらコレはソコに居た。しかし。

当然在るべき疑問が浮かぶ。

記憶の有耶無耶に隠れてしまっていたのだとしても、何故、今まで気付かなかったのか。

「……チ力……貴女、は……。」

嫌な汗が頬を滑る。

ある朝、気が付いたら、コレは、ソコに、居た。

ならば。

いつから、どうして、コレは、ソコに、居るのか。

じくり、と胸が痛む。

右の手が無意識に押さえたその場所。心臓の真上に在る、その傷跡。

「・・・貴女は、どうして、存在しているのですか・・・？」

存在の理由

小さな双眸がじっとこちらを見つめていた。

幼い頃、図鑑でその姿を見た時に「ああ、青い鳥だ」と思った。

これを捕まえれば、幸せを運んでくれるのだろうか。子供心でそんな馬鹿げた事も考えた。

窓辺に飛んできたそれを、一度捕まえようとした事もあった。

実行に移さなかったのは、多分、怖ろしかったから。

捕まえた青い鳥が、幸せを運んでくれる前に、死んでしまうのではないか。そうなったら、自分は永久に幸せにはなれないのではないか。

そんな現実を見せ付けられるのが怖ろしかったのだろう。

その鳥の姿をした使い魔が、自分の前に現れたのはいつだったか。

「お早う御座います、ご主人様。」

ある朝、目が覚めたらコレはソコに居た。

ぼんやりとした頭の中で、ああ、名前を考えなくては、と思った事だけは、良く覚えている。

「・・・チカ、貴女は何故、ここに居るのです？」

繰り返された質問に、小さな双眸が揺れた。

「昔はどうであつたのかは知りませんが、私の記憶する限り、使い魔を必要とするのは神官か魔装機神操者位です。」

その神官ですら、最近は錬金学の発達に伴い、使い魔よりもコンピユータを伴侶とする者が多くなった。

当時、まだ王族であった自分に、使い魔など必要であった筈がない。ならば、何故。

「チカ。」

もう一度名前を呼べば、半ば諦めた様に、彼女は息を吐いた。

「・・・ご主人様、アタクシが誰の手で創られたかは、覚えていらつしゃいますか？」

「・・・いいえ。私が覚えているのは、貴女と初めて会った朝の事だけです。それですら、一体いつの事だったのか、定かではありません。」

そうですか、とチカが小さく呟く。

「アタクシを創ったのは、ルオゾールです。」

ぴくりとシユウの眉が微かに動いた。

「・・・詳しい事は申し上げられませんが、ご主人様が“最初に亡くなった時”にアタクシは生まれました。」

じくり。

傷跡が熱を持つのを感じる。

じくり、じくり。

「つまり・・・私は、少なくとも二回、命を落としている訳ですね。」

じくりじくり。

「そうです。」

じくり。

服の上から傷跡を押さえる。

ヴォルクルス。ルオゾール。儀式。契約。傷跡。青い鳥。

嗚呼。

「最初に蘇った時も、完璧では無かった。」

「・・・はい。」

「それを補う為に、チカ、貴女が必要だった。」

「その通りです。」

「そして、その理由を、私はまだ思い出してはいない。思い出してはいけない。」

一呼吸置いて、チカがふうつと息を吐き出した。

「流石、ご主人様で御座いますね。」

チカが笑った。

傷跡に集まった熱を逃がす様に、シュウも息を吐く。そのままずるずるとソファに横たわった。

「ご主人様、お休みになるならベッドで・・・。」

「チカ・・・。」

苦言を呈そうとしたチカの言葉を遮って、シュウが呟く。

「・・・ヴォルクルスとの契約が成された、と言う事は・・・私は、信頼していた“誰か”に裏切られたのですね。」

言葉の内容とは裏腹に、妙に凜いだ声色。

「・・・ご主人様、お休みになるならベッドで。」

ええ。と気の無い言葉を返しながら、シュウはそつと瞼を伏せた。

思召す儘

風の精霊達の機嫌は、その日の天気に表示れる。そんな言い伝えがある。

本当かどうかは疑わしいが、そうであるならば、今日はよっぽど上機嫌な日なのだろう。

雲の一つすら見当たらない、見事に晴れ渡った空だった。

グナインの甲板には、朝早くからモニカが干していった真白いシーツがはためいている。

青すぎる空と純白のコントラストは目が痛くなる程で、その白がこの艦の所有物なのだと思うと、何だか可笑しかった。

モニカが洗濯物を干していた時から、甲板の一番日当たりの良い場所に、テリウスは陣取って寝転んでいた。はためく布と青い空とを眺め、大きく欠伸をする。

目の前を小さい鳥が通り過ぎて行く。平和だと思った。

微かに靴音がして、日が翳った。

「平和ですね、テリウス様。」

「あー、ラテル？」

「ええ。お隣、宜しいですか？」

「ん。」

失礼しますと言って、ラテルが腰を下ろす。翳った日が元に戻る。

「ミラは、一緒じゃないの？」

「女性陣は皆で最後のお茶会だそうです。」

「ああ・・・そっぴや、今日帰るんだっけ、二人。」

ええ、と肯くラテルを視線の端に捉えて、テリウスはもう一度欠伸をした。

「君達はどうするの、これから？」

「一先ず、ラングランに帰ろうかと。」

「ふーん、大丈夫なの？」

「カークス將軍もフェイル殿下も亡くなりました。戦争が終わったなら、国を守る事こそ戦士の役目でしょう。」

「真面目だねえ。」

テリウスの擲揄するような視線を受けて、ラテルは少し笑う。

「テリウス様こそ、どうなさるのです？」

「んー、僕かい。そうだね、どうしようかな。」

「王位を継いでみては如何ですか。貴方になら、心から仕えられそうなのがします。」

「冗談だろ。」

「冗談です。」

半分は。そう言つて、ラテルが声を出して笑った。

「王位なんて、欲しい奴にくれてやれば良いさ。ぼくは、やりたい事があるからね。」

緩慢な動きで上半身を起こして、軽く伸びをする。白い布が映える空を見上げて、テリウスは口の端を吊り上げた。

「・・・シュウがこれから何をするのか・・・ぼくはそれを見届けようと思つんだ。」

「それでは、精々、退屈させない様に気を付けなければいけませんね。」

白い敷布の群の中に、黒い髪を靡かせて、彼は居た。

「お別れ会が、終わった様ですよ。」

笑った顔は酷く穏やかだった。

ヒュッケバインとゲシュペンストが並び立っていた。

「世話になったな。」

リンの言葉には、僅かな名残惜しさが滲む。

「シュウ、お前はこれから何をするつもりなんだ？」

問われて、シュウは軽く首を降った。

「さあ、まだ分かりません。案外、貴方々と同じ事かも知れませんね。」

「ふふ、そうか。・・・次も敵で無い事を祈ろう。」

笑って、リンとヒュッケバインはゲートを潜った。

恋人が地上に戻る様を見届けて、イルムは「さて。」と声を上げる。

「俺は、リンちゃん程甘くは無いからな。次に会った時に敵だったとしても、容赦しないぜ。」

「肝に銘じておきましょう。」

「んじゃ、そういう事で。モニカちゃん、サフィーネちゃん、ミラちゃん、今度会ったらお茶でもしようぜ。」

最後にウインク一つ残して、イルムとゲシュペンストもゲートに消えた。

「我々も、失礼しよう。」

「皆さん、お元気で。」

二人で一機のカデIFOールに乗り込み、ラテルとミラも其々の日常へと帰って行った。

別れの間際、サフィーネから「結婚式には呼びなさいね。」と言われて、二人共大層慌てたのは余談である。

「アハマド、貴方はこれからどうするのですか？」

シュウに問われ、ムスリムは初めて笑いらしい笑いを浮かべた。

「戦いが無いのであれば、ここにも用は無い。俺は俺の場所へと帰

るさ。」

「そうですか。また、今度も味方として、お会いしたいですね。青い鷹は滑走路を蹴って空に舞う。」

「インシャーアッラー。」

短くそれだけを言い残し、鷹は迷い無く空を駆けて行った。

「アハマド、何て言ってた？」

素朴な疑問をテリウスが口に出せば、シュウは笑って答える。

「神の思召す儘・・・だ、そうです。」

Blue bird

青い鳥が飛んでいた。

きつとあの鳥は、誰かの所へ、幸せを運ぶ途中なのだろう。

どうか幸せに。

何処の誰とも知らない相手に向けて、僕は祈りの言葉を口にした。

翼を持った少女が、僕を見て、微笑んで居る。

どうか幸せに。

彼女はそう言って空に消えた。

青い鳥になって。

神聖ラングラン王国第288代国王フェイルロード・グラン・ビル
セイア。

出来たばかりの新しい墓には、はつきりと読み取れる文字で、そう
書かれていた。

「・・・貴女は、毎日ここに来ているのですか？」

白い百合の束を供えながら、傍らの人物に言葉を向けるシュウ。

「気が向いた時だけよ。」

今の所は、殆ど毎日だけど。そう答えたセニアに浮かぶ表情は哀しさと寂しさ。

「・・・そうだ、アンタにお礼言わなきゃ。」

「おや、貴女に何か差し上げた記憶はありませんか？」

「違うわよ、兄さんのお葬式。モニカとテリウス、出席させてくれたのクリストフでしょう。」

ああ、と呟いてシュウは首を横に振る。

「本人達の意向ですよ。私は何もしていません。」

「ん、そういう事にしとく。」

セニアが少し笑う。風が、二人の間を通り抜けた。暫しの沈黙を埋めるのは、何処からか聞こえる、鳥の声。

「・・・フェイルは・・・苦しまずに死ねましたか？」

じつと墓石を眺めていたシュウが、ふとそんな事を口にした。

「うん、多分だけど。・・・クリストフは、兄さんの事、知ってたんだ。」

「ええ、まあ。」

「私は、知らなかったの、兄さんの事。知ろうとも、してなかったと思う。」

「・・・そうですか。」

「クリストフは、何でも知ってるのね。」

「そんな事は、ありませんよ。」

嘘ばかり。口の中で呟いて、セニアがもう一度笑う。哀しげに、寂しげに。

「全部、アンタの言った通りになったわ。私はあの後、すぐにマサキ達と合流したし、兄さんは、私が造ったデュラクシールで暴走した。」

「それは結果に過ぎませんよ。」

「だけど、その通りになったわ。」

「そうだったとしても、貴女の所為では無い、と言いませんでしたか？」

「そこまで話してようやく視線を合わせる二人。」

「・・・ねえ、アンタはどうして未来見でも無いのに色々な事が分かるの？」

「ただの推測ですよ。」

「・・・推測、か・・・。」

「貴女がモニカのすぐ後に救出されるであろう事は、簡単に考えられます。まず、モニカを失ったシュテドニアスは焦って行動を起こす筈だ。」

その際には、残ったセニアが王女として使われるであろう。あの場所だと、カークス軍よりもフェイル軍駐屯所の方が近い。

更に、あの時点でフェイル軍がシュテドニアス軍に負ける要素は殆ど無い。そうなれば、セニアは近い内にフェイル軍と合流する事になる・・・と言う訳ですよ。」

「ふうん・・・そう聞いてみると、確かに納得するかもね。じゃあ、もう一つの方は？」

「ああ、あれはもっと簡単です。フェイルには時間が無かったでしょうから、ちよつとした切欠があれば、すぐに行動に移す・・・そう考えました。」

その切欠をもたらす可能性が、最も高かったのが貴女です。私は情報だと踏んだのですが・・・まさか、魔装機を造るとは思いませんでしたよ。」

「・・・そっか。」

セニアが空を仰ぐ。青い空には、群を成して飛んで行く、白い鳥。

「ね、私はこれからどうしたら良いと思う？」

「何故、それを私に聞くのですか？」

「・・・分かんない。」

「では、私が何と答えれば満足ですか？」

「・・・アンタって、やっぱり意地悪ね。」

「テリウスにも、同じ様な事を何度か言われましたよ。」
笑って、シュウは続けた。姉弟ですね、と。

「・・・誰しもが、自分の道を自身で切り拓いて進むのです。全ての責任をその身に被って。」

自由である為に。自由であるが故に。

「それを放棄してはいけません。」

それは自分自身を棄てる行為だから。
自分である為に。自分であるが故に。

「悩み、苦しみ・・・それでも、進むですよ。前へ。」

「・・・前へ・・・。」

「時は止まってくれませんから。」

「・・・そうね。」

ずっと空に向けていた視線を戻し、セニアは従兄弟を見遣った。双子の妹が、命を賭けて愛する相手。

「・・・どうか、幸せに・・・。」

「・・・セニア？」

「昔ね、モニカが精霊に祈ってたの。どうか、あの方を、幸せに・・・って。ずっと祈ってた。」

「・・・そう、ですか。」

セニアが、少し笑う。つられる様に、シュウも笑った。風が二人の間を通り抜ける。暫しの沈黙を、歌う風の音が繋いだ。
どうか幸せに。

少女がかつて祈った想いは、いつか届くだろうか。

「ご主人様ー！」

沈黙を破って、甲高い声が響いた。

現れたのは、小さな、青い鳥。

「ありや、これはセニア様！お会いするのは、初めましてですよ！」
！」

ぺこりと頭を下げる鳥に、セニアが目を丸くした。

「・・・アンタのファミリア？」

問われて、シュウは困った様に笑う。

「不思議な事に。」

「どう言う意味ですか、ご主人様！？」

「そっか。アンタのファミリア、ローシェンなんだ。」

何事か考えて、セニアはそっとチカの頭を撫でた。

「・・・迎えが来ましたので、私はそろそろ失礼します。」

「うん。モニカとテリウスによろしく言っておいて。」

軽い会釈をして背を向ける従兄弟。歩き出した彼の背中に、セニアは言う。

「ローシェンは、祈りを運んでくる鳥だって、いつか母さんから聞いたわ。」

どうか幸せに。

青い鳥が届けてくれると。

どうか幸せに。

幼い子供は祈りを託した。

「届くと良いわね。」

いつか願った幸せが。

「・・・もう」

貴方の許へ。

「届いて、いますよ。」

僕の青い鳥。

Blue bird (後書き)

全89話、長々お付き合い頂き有難う御座いました。

魔装機神に出会ってから14年。当時子供ながらに魅力を感じたシユウ・シラカワを主役として小説を書くのはとても楽しかったです。
(お話のベースはSRWEXですが・・・)

捏造やら妄想やらが渦巻いて、中々綺麗な形には纏まりませんでしたが、少しでも読んで下さった方の心に残る物があれば、これ程嬉しい事ありません。

最後にもう一度、読んで下さった皆様にお礼申し上げます、後書とさせて頂きます。有難う御座いました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6761m/>

Blue bird

2010年10月9日03時55分発行